

「目に見えない豊かさ」を知って。

アジアとの出会いと異文化体験——バングラデシュの生活文化とフィールドワークII 報告書



2013.2.17-3.2



フェリス女学院大学



目次

自然・人・文化の宝箱と For Others

——学生の「ふりかえり」から見るバングラデシュの魅力 東 宏乃 文学部コミュニケーション学科……………2

バングラデシュとの出会い 月谷梨沙……………32

目に見えない発展 荒牧里佳……………37

マイクロクレジットを通して見えたこと 宮野有紀……………41

目に見えない心の豊かさ 諸橋茉美……………46

目に見えない豊かさから見えてくるもの 松崎史帆……………51

バングラデシュ人の生活と私の生活 鈴木美咲……………55

旅のアルバムから……………60

2月17日(日) 1日目 成田空港からバングラデシュへ出発……………64

2月18日(月) 2日目 ホッタール発生、縫製工場見学、ダッカ市グルシャン地区で民族衣装購入……………65

2月19日(火) 3日目 ダッカのスラム街とノルシンディー県在地元 NGO「PAPRI (パプリ)」……………66

2月20日(水) 4日目 村の女性との出会い、ストリートチルドレンとの交流……………67

2月21日(木) 5日目 バングラデシュの文化と自然の豊かさ(目には見えない豊かさ)に触れた一日(タンガイル県で)……………68

2月22日(金) 6日目 村の朝市見学、農家や村人の生活見学、タンガイル・サリー織……………70

2月23日(土) 7日目 地元の研究機関「UBINIG (ウビニック)」と、Shikhipori 小学校……………71

2月24日(日) 8日目 バングラデシュの人の優しさが印象に残った日……………72

2月25日(月) 9日目 ジョソール県サティアントラ村での1日……………73

2月26日(火) 10日目 サティアントラ村で、瞑想とサリー体験……………74

2月27日(水) 11日目 サティアントラ村からレブトラ村、ダッカへ……………75

2月28日(木) 12日目 ダッカで3回目のホッタール。ふりかえりのワークショップなど。……………76

3月1日(金) 13日目 ホッタール。オールドダッカ……………77

3月2日(土) 14日目 香港から成田まで……………78

自然・人・文化の宝箱と For Others

——学生の「ふりかえり」から見る Bangladesh の魅力

東 宏乃 文学部コミュニケーション学科

(1) 私と Bangladesh との出会い

1999 年 8 月、チッタゴン丘陵の少数民族ジュマの村とノルシンディー県アムラボ村を、私は初めて訪れた。Bangladesh については、高校時代、岡倉天心の『茶の本』によって、アジア初のノーベル文学賞を受賞した R・タゴールを知り、彼の生誕地としてのベンガルの地を意識はしていた。しかし、NGO に入ってからはずっと、イスラム教の国だから、きっと女性は家の中に閉じ込められているのではないかと、私は偏見を持っていた。案の定、Bangladesh より先に行くことになったパキスタンでは、イスラム教の宗教色が強く、空港で同行の日本人男性と対等に話す私に対して、地元の男性達はつき刺さるような視線を浴びせし、農村の女性は高い土塀に囲われた屋敷地の中で暮らし、外出に際しブルカという全身真っ黒な覆いを着ていた。このようなイスラムの国での地域開発事業は、苦勞も多いだろうと思ったのである。

が、1999 年、国際協力 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の創設者・福澤郁文氏に強く誘われ、アジアと日本の教育を考える「トクトクの会」のスタディー・ツアーに参加することになった。訪れてみれば、パキスタンに比べて Bangladesh は、イスラム教の戒律はゆるいようであり、東南アジア的な農村社会



のニオイがした。

その時、通訳として出会ったのがシャヘ・アラムさんであり、彼の人柄に惚れた。そして、その後、「トクトクの会」や「シャプラニール」のスタディー・ツアーで Bangladesh を何度も訪れ、アラムさんにお世話になることになる。

フェリス女学院大学の科目「アジアとの出会いと異文化体験」のフィールドワークを引き受けるにあたって、駐在経験のあるカンボジアか、憧れの地 Bangladesh かは、そうは迷わなかった。やはり私の大好きな国に学生を連れて行こうと、Bangladesh に決めた。

＊市民が自分の力で独立を勝ち取った国、Bangladesh。

＊自然が豊かで、R・タゴールにして「黄金の国」と謳

わしめた、Bangladesh。

＊南アジアのノーベル賞受賞者 3 人の出身地であるベンガルの地。

学生に Bangladesh を知ってもらい、かの地の素敵な人々に会ってほしい。

首都のダッカでは、今まさに Moving country として勢いのある国の経済発展や経済格差も目の当りにしてほしい。性格の異なる 3 つの村の訪問では、NGO 等による支援と人々の自立、そして彼らの笑顔に、生きることの意味を感じてほしい。

そして、何より、Bangladesh の生活文化の豊かさ、ゆったりとした時間の流れの中で、先進国・日本に生きる学生に、五感で感じながら自分自身を見つめ直してほしい、と思ったのである。

(2) コミュニケーション学科専門科目「アジアとの出会いと異文化体験」の事前学習

2 年前の Bangladesh への海外短期研修（スタディー・ツアー）で浮かび上がってきたテーマは、「ほんとうの豊かさって何？」であったが、今年度の講義ではそれを受け、GNP などでは測れない、Bangladesh のある種の「豊かさ」に会ってほしいと、ワークショップ

HIRONO Azuma

プ形式（参加体験型グループ学習）で授業を工夫した。南アジアの最貧国であるバングラデシュについて、あえて「豊かさ」という観点から多角的にみていくように心がけたのである。（大学での講義が全5回＋現地研修が10日以上で2単位になる科目。）

まず、大学で行なった事前学習について触れておく。

■1回目：写真スライドを使ったバングラデシュの紹介。

特に農村生活の概要。マイクロクレジット（小規模無償貸付）を行う「ショミティ（相互扶助グループ）」の女性に会うために、村の中へ中へと入って行く。学生と同年代の思春期の女の子のグループ活動「キシュリ」に会いに、地元 NGO・PAPRI（パプリ）がプロジェクトを行うノルシンディー県へ。「農村の女の子に思春期という時期が生まれた」という私の説明は、学生 SM には衝撃的だったようだ（P.55 参照）。

■2回目：オリジナル教材「コビール君ちの家族マップ」を使ったワークショップと、VIDEO『豊かさって何？』（スタディー・ツアーの記録、恵泉女学園大学制作）から学ぶ。

教材「家族マップ」を体験した感想をみると、バングラデシュの平野部農村の屋敷地には、パパイヤやマンゴー、ジャックフルーツなどのたくさんの果樹や、青ト

ウガラシやハーブ類など家庭菜園も充実しており、また、牛が、乳・牛フン（かまどの燃料になる）・牛の尿（家の土台や中庭の土の上に塗ると虫除けになる）・牛車など、暮らしの要を担っていることを知ったようだ。学生は、自給自足の生活が成り立っていることに感動していた。その自給自足の生活を、「その日暮らし」とみるのか、「豊か」なのかは、現地に赴いてからの判断となった。学生 SM のレポートを参照（P.57）のこと。

■3回目：フォトランゲージ『世界の家族』を使った「幸せ度（GNH）」のワークショップ

世界各国の家族と家財を写した写真（A4判）を、3枚1組の写真にして、その3枚の中でどの国が幸せか、自分たちでモノサシを作り、幸せの順に並べるワークを行なった。

先進国の代表としては、アメリカ・イギリス・ドイツを。問題のある国としては、国連軍が駐留したボスニア・家屋敷にたくさんの鍵をかける南ア・平穏だが写真に映った家族が実は一週間後に殺されてしまったロシアをとりあげた。自給自足的な国としては、ブータン・エチオピア・サモアを選んだ。

3枚1組の写真に順位を付けたのち、日本の写真を投入した。一斉に歓声というかため息があがった。家財道具などのモノがあふれ（人ではなく）TVが家族の中心

にあり、物質的には豊かな日本であったが、学生は落胆したのだ。逆に、モノが無く祭礼の道具を中心に置いて写真を撮っているブータンの家族写真の方が、文化を大事にしている生活の幸福度は高そうだという結論になった。最終的には、私が撮ったバングラデシュの農村の家族と家財道具の写真を見せ、バングラデシュは貧しいばかりではないということを、導入の学習とした。

■4回目：NGO「シャプラニール」発行のブックレット『ダッカのストリートチルドレン』の要約と、写真教材『100人のストリートチルドレン』、VIDEO「ダッカのストリートチルドレン」をもとにしたワークショップを行い、感想をシェアした。

バングラデシュに18万人以上居るといわれるストリートチルドレンのモノグラフを読み、実態を共有した。農村地帯から首都ダッカに出てくるストリートチルドレンの境遇は、そのまま農村における家族の問題を映し出している。写真教材『100人のストリートチルドレン』を使ったワークでは、具体的なストリートチルドレン一人ひとりの心情に寄り添いながら、彼らにどのような支援が必要か考えた。学生 MS は、ストリートチルドレンの笑顔に会いたいと渴望し、早く現地に行きたいと訴えていた。（P.23 参照）

■ 5 回目：成人式で帰省した MS が雪のために講義に戻って来れず、急遽、ドキュメンタリー映画「ガーマット・ガールズ―衣料工場で働く少女たち」(2007 年、ダンピール・モカメル監督作品)を観ることにした。ヌルジャハンという 18 才の農村出身の女工を軸に物語は進んで行く。彼女の父親は、病気の治療費のために借金をし、そのカタに農地を奪われ土地なし農民となる。長女のヌルジャハンは、家族のために首都ダッカに出て女工となり、毎月、実家に仕送りをする生活に。後半は、安い労働力のおかげで衣料品を廉価で先進国に輸出する国となったバングラデシュの労働争議の話や、ドイツの消費者に取材した様子で締めくくられる。学生は、バングラデシュの輸出産業の影の部分を知り、考えさせられた。

■ 6 回目 (補講)：現地ではカタコトでも話すことができれば、子ども達や村人との距離が縮まり、良い関係を築けるので、作家の Q・ザマン・ジュエル先生に来ていただき、「ベンガル語ミニレッスン」で、あいさつ言葉と自己紹介文を練習した。

その後は、NGO「シャプラニール」発行のブックレット『バングラデシュの女性たちは今』と『ショミティ (相互扶助グループ) とは』をもとに、農村生活における女性の立場や家庭生活、マイクロクレジットについて学んだ。特に、学生の MY は、意欲的に発表していた。(旅

の詳しい説明は、(株)風の旅行社に大学に来てもらい、1 月下旬に行なった。)

(3) スタディー・ツアーの訪問地

さて、現地についてである。ここでは、人々との出会いという視点から解説を加えていく。

(詳しい旅程については、本報告書の後半、学生による報告日記を参照のこと。)

(A) ノルシンディー県

地元 NGO「PAPRI (パプリ)」代表・バセット氏
―「私は村人である」

PAPRI は、元々は日本の国際協力 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」のコミュニティー・デベロップメント・センター (CDC) として活動しており、シャプラニールから自立する形で 1999 年 8 月に誕生した。14 年前、奇しくもその設立式に私は参列していたのだが、創設期からの中心スタッフ、バセット氏が代表を務める。

彼は、物静かで、心に熱を秘めたタイプのバングラデシュ人だ。現在、200 人近いスタッフの雇用を管理しているが、デスクに座っていながらも、現場にも精通して



いる。彼自身の言い方によれば、彼自身が村人なのだという。ショミティ (相互扶助グループ) 活動を束ね、マイクロクレジット (農村女性を対象とした小規模無償貸付) を維持し、それでも、支援に取り残された村人は居ないかどうか、いつも気にしている。

同時に、村人が彼を頼っている色々な情報をくれるらしい。

今回のスタディー・ツアーに対するレクチャーは、バセット氏のシャプラニールと関わる前の時代の話から始まった。そもそも彼がどうして NGO をやっているかということ、まず、自分の村の中で困っていた人を助けたいという思いから活動が始まったそう。村のお金持ちや財産を持っている人たちは、一度、泥棒騒ぎが起ると、まず、貧しい人達を疑った。そして、貧しい人々

HIRONO Azuma

を常に下に見ていた。それについて我慢がならず、貧しい日雇いの農民達を集めて、グループで仕事を請け負うことを始めたのだそうだ。共同事業のスタートである。その実績が認められ、信用できて、読み書きができて、相談できる若者として、村人に頼られ、「プティボン・ブミヌ・ショミティ（土地なし農民の相互扶助グループ）」を作る。バセット氏が20才か21才の頃だという。その時、隣村に、日本人が関与していた「ショロバット・ショミティ」というのがあり、シャブラニールの存在を知ることになるが、合流はしなかった。その代わり、「ゴノ・ウンノヨン・ケンドロウ（GUK：Public Development Center）」というショミティの協議体があったので、そこに参加し、農村開発の活動をした。1982年から1986年は、女性・男性、両方のショミティの立ち上げに関わり、その時のパートナー団体がシャブラニールで、1987年から、GUKは、シャブラニールの一部として活動することになり、GUKのメンバーもシャブラニールのスタッフとして働き、ナラヤンプル村と、アムラボ村、イショルゴンジ村のCDCを担当するようになったそうだ。しかし、1997年、シャブラニールのローカルスタッフがストライキを起こす。それ以降、日本人は現場に直接コミットしないで、CDCのスタッフが実際のプロジェクトを担当するように、シャブラニールは活動のポリシーを変えたのである（詳しく

は、『進化する国際協力NGO』明石書店、2006、を参照）。そして、1998年、PAPRIの前身となる組織が固まる。

地元には地元の問題があると、バセット氏は言う。しかし、それは、シャブラニールのHQ（ダッカ事務所や東京本部）にはなかなかわからない、とも。地元の問題は次々と起こるが、その活動資金を、いったいつまでシャブラニールが継続して支援してくれるのか、3年毎の見直しがあることが、不安の1つめ。2つめは、バングラデシュの日本人担当者が概ね3年に1回で交代するのだが、担当者の人となりや仕事のやり方に慣れた頃に交代してしまうこと。3つめは、長年のパートナーなので、愛とともに憎しみも生じてくる。特に、Emotionalなことをベースに、お互い言いたいことが出てくる、というのである。

この話を聞いて、学生はさらに突っ込んだ質問をした。

TLは、「ショロバット・ショミティを支援していた日本の団体と、どうして一緒に働こうと思ったのか？」

バセット氏の回答は、「団体としてファンド（資金）があったし、トレーニングを受けられるし、ショロバット・ショミティは長年続いていたので、学ぶこともあるだろうと思った。貧しい人のためになる活動ができるだろうと思った。」であった。とことん、貧しい人に寄り添うのが、バセット氏の信条のようだ。

MYは、「地元の問題は地元にはわからない、とい

うのはどういうことか？」と質問した。

バセット氏は、①国際的（International）な問題は、例えば、3.11の日本の震災であり、これについては、日本人でもガーナ人でも、世界中の人が理解できる。②国（National）な問題は、例えば、日本のイジメ問題。これは、日本人でなければ、なかなかわからない。

③地元（local）な問題は、例えば、青森県が抱える問題。これは、青森県の人でなければわからない、と。学生は、支援することや国際協力の難しさに気づいたようだ。

東からは次の質問をした。「例えば、私はカンボジアのNGOで駐在経験があるが、資金獲得のためにプロジェクトをやっている団体も多い。何が必要とされる支援なのかよりも、援助しやすいプロジェクトをやっているのではないかと、疑問をもったことがある。NGO界には、そのような体質の問題があるのに、バセットさんは一貫して、地元の問題に丁寧に対応しながら、同時にファンドレイジング（資金獲得）も上手く行なっている。そのバランス感覚はどこから来ているのか？」。

バセット氏の返答は、「あきらめない気持ちをもって。私は、村の人間である。村の人が問題を起こし、村の人の協力でそれも解決できる。その人間こそが大事なのである（資金獲得ではない）。」と。なるほど、経験から出る言葉は深いと思った。

さて、本題に戻ろう。

村の思春期の少女達を集めグループ化して「キシュリ」を立ち上げたのも、彼だと言う。

ただ、プロジェクトを継続したくてもファンド（資金）が打ち切られたり、村の問題として重要度が高くても、ドナー（資金を出す支援側）がそれを理解してくれないこともあったり、と苦労は絶えないようだ。それでも40年、彼はやってきている。本当に頭が下がる。学生も、バセットさんの人柄には、感銘を受けたようだ（MYの報告、P44 参照）。

学生やアラムさんからも1人500タカ協力してもらい、私のお金を足して10000タカ（≒1万円）をPAPRIに寄付した。1万タカは、「キシュリ」の女の子10人がコンピューターの研修を2ヶ月受ける資金になるという。

◆村の思春期の少女達の集まり「キシュリ」と交流

早婚があたりまえだったバングラデシュでは、女性が初潮を迎えたら結婚していた時代に、少女期の次には妻もしくは母親の時期がやってきていた。しかし、早婚が禁止されると、11歳から18歳の女性に「思春期が生まれた」のである。

イスラム教が9割以上を占めるこの国の農村では、女性は村の外を出歩かない。バリと呼ばれる屋敷地の中で多くの時間を過ごし、屋敷地を出たとしても隣近所止

まりである。

一方、思春期の男の子達は活発だ。クリケットやフットボール（サッカー）をやったり、船を仕立てて村の外にピクニックに出かけたりもする。しかし、少女達は違う。文化的に行動圏が制約されているのだ。そんな中、少女達のエネルギーは持て余される。そこで、余ったエネルギーをうまく村の発展に生かし、かつ、法律で禁止された早婚を押しとどめるためにも、「キシュリ」というグループ活動は上手く機能した。

PAPRIは、プロジェクト地の少女達に対して、当初75の「キシュリ」を組織した（参加者は1500人）。現在は、メンバーが結婚適齢期になって会を抜けたりしたため、55のグループが解散になり、20のグループが残っている。20グループと言っても、1グループ20人のなので、400人の思春期の少女達が参加していることになる。少ない数ではない。

「キシュリ」の活動は、毎週1回、15人～20人くらいの決まったメンバーで集まり、良いお母さんになる事を目的に、生殖・衛生・栄養・予防接種・思春期の身体や心の変化・女性の人権（持参金問題・DVを含む）・社会参加などについて学ぶ。2週間に1回は、PAPRIの女性スタッフが参加し、学んだことの復習をしたり意見交換を促したりしているようだ。また、文化プログラムと言って、踊りや歌をいっしょに楽しむ活動もしてい

るし、PAPRIが実施するパソコン研修やリーダーシップ研修もあるそうだ。

そして、なんと言っても、「キシュリ」の活動のおもしろいところは、学んだことを実践にも移す点だ。

メンバーや近所に、早婚をさせられそうになった少女が居れば、みんなでその親に掛け合って早婚をやめさせる。また、村の中に行政サービスを受けられていない貧しい家庭や独り者が居れば、村のチェアマンに掛け合って、行政サービスを受けられるようにするといった働きかけもしたそうだ。また、不登校の子どもが、再び学校に戻るようになり、冬の寒い時用に、軍隊から服を払い下げてもらえるように交渉したり、薬草でもあるニームの樹を村に植えたりしたという。

そんなしっかりした社会貢献活動をしている「キシュリ：ヴィティ・モジャール」のメンバーに出会って、フェリス大の学生は、最初、びっくりしたようだ。同世代か下の年齢なのに、私たちよりしっかりしていると。学生TLから、「あなたの将来になりたい仕事は何ですか？」と質問をしたところ、「キシュリ」のメンバーは、次々と即答した。

「看護婦」、「ビジネスマン（ファッション関係）」、「軍隊」、「先生」3人、「医者」3人、弁護士、ファッションデザイナー、新聞記者、などであった。

一方、フェリス大生の方は、「海外と日本をつなげる

HIRONO Azuma

仕事」、「NGO」、「広告の仕事」、「飛行機や車など乗り物関係」、「最初はファッションデザインだったが、今は、海外の文化に携わる仕事」、などを答えたが、学生 MM は、「自分には今現在、成りたい夢が無いことが恥しい、成りたい仕事が決まっているキシュリみんなはすごいね。」、と素直に心情を吐露していた。

「キシュリに入って、一番変わった点は？」という MY からの質問では、

「皆の前で堂々と自分の意見を言えるようになった。」「自分の権利について理解できるようになった。」「悩みや思春期の体や心の変化について、親と恥ずかしがらずにきちんと話せるようになった。」「物事に対する判断力がついた。」などの答えが返ってきた。

キシュリからは、日本の法律上の結婚年齢と実際の結婚適齢期、および、各自の宗教について質問された。どちらも簡単ではない質問で、学生は考えながら答えていた。

バングラデシュのティーンエイジャーと向き合うことは、学生が自分自身と向き合うことになるようでもあった。

◆女性の相互扶助グループ「ショミティ」

＝「人生の寺子屋」

ナラヤンプル村で、2000 年に結成された「アミヌ

プール・ベリン・モヒラ・ショミティ」の女性たちに会った。このショミティでは、ショミティに入ってからトイレを初めて作った人が 7 人程、識字教育を受けて、文字が読めるようになり自分の名前のサインができるようになったのは 6 人程。牛を買った人は 3～4 人、子どもを高校まで通わせている人は 7～8 人居るという、比較的発展したショミティである。お互いの自己紹介の後、マイクロクレジットの実際について、詳しくヒアリングを行なった。

・ナズマさん、30 才。女兒 1 人、男児 1 人の子どもの場合

2008 年 5 月 3 日に、農地を借りるための資金として、11250 タカ（タカは現地通貨の単位。1 タカ≒1 円強）を借り、毎週 250 タカづつ返し、45 回目の 2009 年 3 月に返済を終えた。同時に、毎週 20 タカづつ貯金もしていて、2009 年 3 月時点での貯金総額は 1600 タカであった。2012 年 1 月 1 日に、11431 タカ借りて、牛を買った。250 タカづつ返済し、同時に、50 タカづつ貯金も始めた。その返済は、2013 年 1 月に終わり、貯金高は 1790 タカになっていた。

牛が居ることによって、乳を売り毎日収入が得られ、牛で農地を耕すこともできる。



・シェフオリ・ベグムさん、40 才。女兒 2 人、男児 1 人の子どもの場合

牛を 66500 タカで買ったが、足りない分をショミティから借金をした。買った牛からは、毎日 6 リットルの乳（市場で売ると 1 リットル 40 タカ）が取れるので、240 タカの現金収入になる。牛を買うことにより、牛という財産を持つことができ、同時に、乳を売ることでも貯金もできるようになった。そうやって、元手さえあれば、蓄財ができる。

この他に、村の雑貨屋を経営するマゼダさんは、3600 タカの貯金があり、そのお金を元手に、店を木の小屋からレンガの店に建て直そうかと考えている。そして、シャヘラ・ベグムさんは、牛の肥育と農業をやっているが、ナスの栽培と長インゲンの栽培の為に、棚を作

る必要があり、その棚の資材を買うためにショミティから借金をしようとしている。

総じて、借金はしているが、その借金を元手に事業(牛・農業・雑貨屋、等)を始め、その事業から得られる収入で、借金を返済し、同時に貯蓄もするという仕組みである。

新しいカタチのエンタープライズとしては、セファリさんの場合がある。三輪自動車を買ひ、それを夫が村の中の新しい交通手段として運行することで収入を得ている。

25000 タカ借りて三輪自動車を買ひ、修理に 20000 タカかかったが、今では、毎週 500 タカ返済し、同時に 200 タカ貯金しているとのこと、スケールが大きい。

13 年前と比べると、経済的に本当に豊かになったという。家を大きく建て替えたし、三輪自動車を借りる前に、ショミティから借金をして、40 坪の農地を買ったが将来は 20 坪買い足し、耕したい、とのことだった。彼女の笑顔には輝かしいものがあつた。

そして、この「ベリン・ショミティ」では、事業に失敗した人はいない。変な人にはローンを貸さないように、皆でよく話し合っているし、お金を返せないような人はこのショミティのメンバーには居ないとの事だった。(BRAC のショミティからお金を借りている人はいないが、グラミン銀行からは二重にお金を借りている人はいるとのことであつた。)

最後に、ショミティの意義を聞いたところ、「子どもに教育を受けさせることができるようになった。子どもの教育にお金を使うことは、自分や家族の幸せでもある。」とのことだった。実際、子どもがカレッジに入学するのを機に 24000 タカ借りた人が居た。入学金に 5000 タカ必要だったのだが、奨学金をもらえることになり、そのお金は戻ってきたという。

メンバーによれば、ショミティに入らなければ生活は楽にならず、逆に、高利貸しに借りて借金地獄に落ちることになる場合もあるということだ。私は「あなたは、(何も担保のない) 私にお金を貸してはくれないでしょう？ だからショミティが大事なのよ。」と言われてしまった。そして、ショミティに入ったからこそ、教育の重要性を身をもって知ることができたとも言う。その主張に、学生は深く納得していた。

ショミティとは、同じ集合村(パラ)の女性達が集まって学び合う「人生の寺子屋」みたいなものだと感じた。そして、ショミティに参加している農村女性の、生きるたくましさ、知恵と張り合いのある人生に触れて、イスラム社会に生きる女性についての私の偏見は偏見でしかなかったことを、恥じた。彼らは彼らの人生こそをしっかり生きているのだ。

(B) タンガイル県：

地元研究機関「UBINIG (ウビニック)」代表・シャミン氏—「地域開発におけるオーナーシップは誰のものか？」

◆私とシャミン氏との出会い

ユニークな活動をしている UBINIG について短く説明するのは難しいが、ここでは、学生も大きく感銘を受け、今回のスタディーツアーのキーワードにもなった、シャミン氏のレクチャー、「目に見える豊かさ、目に見えない豊かさ」について、その骨子を再録しておきたい。

UBINIG は、マイクロクレジットの発祥の地であり、数千近い NGO がこぞってマイクロクレジットを行っているバングラデシュで、マイクロクレジットをやらずに農村開発を行うめずらしい団体である。

私は、2001 年、シャプラニールのスタディーツアーでバングラデシュを訪れた際に、どうしても農業・環境分野で活躍する団体を知っておきたかったので、ツアーの団体行動から 1 人離れ、UBINIG の代表シャミン氏に、UBINIG のフェアトレード部門のブランド Prabartana (プロボルトナ) が運営する、ダッカのお店の最上階で会ったのである。

「なぜ、マイクロクレジットをやらないのか？」と尋

HIRONO Azuma



ねると、「貧困の撲滅とは言っても、マイクロクレジットを一度導入すると、農民はどうしても、お金を追い求めるサイクルに入ってしまう。そして、マイクロクレジットにアクセスできない最貧層の農民を取りこぼすことになる。それよりも、無農薬・無化学肥料の有機農業（≒新農業運動）の方が、投入資材にお金がかからないので、貧しい農民のためになる。そのためには米や野菜の在来種を保存する Seeds Bank の伝統をそれを担う農村女性とともに再興することが肝心である。」と、明快な答えが返ってきたのである。

シャミン氏とは、それ以来のお付き合いである。

今回は、UBINIG が推進する新農業運動「ノヤクリシ・アンドロン」の基盤となる、タンガイル県の種子銀行 (Seeds Bank) を核にしたノヤクリシ有機農業リソースセンターと、それに併設するアジアンティストが素敵

なゲストハウスで、シャミン氏にお会いすることになった。

ゲストハウスのあるノルショッダ村は、本当に美しい村だ。周囲の田んぼが無農薬栽培なので、田んぼに昆虫や小動物が多く、それらは鳥のエサになる。その影響で鳥の数と種類が豊富で、朝の目覚めは小鳥たちの声で始まる。そして、リソースセンターには、数限りないフルーツツリーとハーブ類が植えられて緑が豊かだ。

敷地には、インド菩提樹の大木の隣に、大屋根のついた集会所があり、そこで、早朝と夕方に、吟遊詩人ラロンやバウルの唄う伝統的なフォークソングをスタッフと農民が一緒になって披露する文化プログラムも行われている。食事には、もちろん近隣の村が生産する無農薬のコメや野菜、無農薬のエサを食べて育った家畜の肉、農薬の流れ込まない川の魚が供される。当然ながらその味わいはとても深い。それとともに、ゲストハウスのホールにあるゆったりとしたソファーに象徴されるような、おもてなしがなされ、とてもびやかな時間を過ごすことができる場なのである。

◆ UBINIG の理念と「目に見えない豊かさ」

シャミン氏は、UBINIG を始める前は、社会主義について勉強をしていたが、資本主義とともに、社会主義のマイナス点も知ったので、皆でどうやったら幸せにな

れるのかを問うた結果、第三の道＝オルタナティブを探すことを理念に掲げたという。「今の開発のやり方の主流は、世界銀行 (WB) やアジア開発銀行 (ADB) が作ったものであり、橋や道路といったインフラの整備は重要ではあるけれども、農民の持っている技術に光を当てたり、一般の人々の幸せをめざしたりするには、オルタナティブな開発が必要である。UBINIG はそのオルタナティブを求め、人間のためになる重要なことをするには、どうしたらいいか、考えに考えたのである。その結果として、NGO ではなく会社組織として政府に登録した。NGO として登録すると政府の監視が厳しく、政府から存在を取り消しされる可能性もあったので、あえて会社組織として登録した。

UBINIG が活動を始める前、1984 年に、ムハマド・ユヌス氏がマイクロクレジットを始めたが、UBINIG もマイクロクレジットを導入するかどうか、3 年間、その方針を決めるのに議論を尽くした時期がある。しかし、マイクロクレジットはお金でお金をつくる（＝利子が利子を生む）が、自分たちは、地域で何か具体的なアクションをすることで、お金を生み出す事にした（＝1988 年、マイクロクレジットはやらないことにした）。

同時に、1988 年、バングラデシュで大きな洪水があり、このタンガイルにもどういった援助をするか考えるにあたって、農民に聞いたところ、『援助ではなく種子を

ください。』と言うので、半年かかって調査したところ、ローカルバラエティー（在来種）が大事だと気づいた。化学的(ケミカル)な農業は近代農業とされているが、今、ケミカルフリー（無農薬）な農業は、近代農業よりもっと科学的に進んだ農業であると考えている。したがって、新・農業運動（ノヤクリシ・アンドロン）と名づけ、それを推進することにしたのである。」

「有機農業は、化学肥料や農薬を使う近代農業より、収穫量が少ないという批判があるがそれについては、どう思っているか？」と質問したところ、

「有機農業は、コメそのものの収量は少なくとも、田んぼから、ハーブ類などの草や魚や昆虫を多く生み出すので、生態系としても農民の家計的にも、近代農業より豊かだと言える。そして、マイクロクレジットをやらずに、農民の知識を高めていくことに心をくだいた。有機農業についての知識が高まれば、その生産物は農民自身が消費するだけでなく、余剰産物は市場で売ることができる。大事なことは、お金の経済よりも、女性や子どもを大事にすることである。アジアではお母さんを中心に家族が成り立っている。そのお母さんの知恵で在来種を守り増やしていくことは重要であるし、その文化をUBINIGは大事にしたい。何より、お母さんや子ども、家族の健康を一番に考えている。そのためにも無農薬で行う有機農業は大事である。」

「UBINIGの活動は、新農業運動以外に、UBINIGのブランド・プロボルトナの事業として、ダッカ市で無農薬のコメと野菜を売り、UBINIGの工房で織った手織物を売り、女性をテーマにした本の出版部門を持ち、タンガイル織りのサリーも売っている。同時に、ベンガルの文化と音楽を伝える集団ノボプラン・アンドロン運動も行っている。」「バングラデシュ全土は、土の質によって大きく4つに区分されるが、その中で、タンガイルは一番川が多く、魚も多いし、地域に、織物や染色などの伝統文化を残しており潜在力があるので、コミュニティー・ツーリズムの可能性も模索しているところだ。」「我々の財産は、農民の持っている有機農業に対する知識や技術、村人の持つ機織りの伝統文化である。それらは、WBによる開発が目に見える開発だとしたら、目に見えない開発だと言える。それらがあることがわれわれの自信につながっている。」と、シャミン氏は締めくくった。

学生MYのマイクロクレジットについての質問には、「高利貸しのモハッジョンから借りる場合、その利子は年利100%である。それに比べれば、マイクロクレジットの年利30%は低いと評価できるし、女性にお金をマネージメントする力がついたので、マイクロクレジットを全面否定しているわけではない。」と、シャミン氏は答えた。

翌日午前には、地域で種子銀行を担っている農民、マイヌッディンさんとリナさんのお宅を訪ね、「有機農業をやることで、毒を摂らない幸せを感じている。」という、新農業運動の実際を見せていただいた。

そして、UBINIGを去る最後の朝ご飯の時、シャミンさんにもう一度、お話を聞いた。

「UBINIGのやっていることは、ソーシャルビジネスと呼んでいいのですか？」と。

その答えは、「UBINIGが活動を始めた頃は、ソーシャルビジネスという単語はなかった。自分達が大事にしているのは、物事のownership（オーナーシップ）は誰にあるのか？とうことである。（それは、UBINIGという会社ではなく、農民にあるべきである。）」であった。PAPRIのバセットさんとはまた違う角度だか、ここでも、村人を中心に据えた地域開発が哲学として実践されていると、私は関心した次第である。

◆学生のふりかえり

「目に見えない発展と豊かさ」という、おそらく初めて聞くであろう切り口のシャミン氏のレクチャーを、学生たちはどう受け止めたのか？ ノルシンディー県のNGO・PAPRIの活動と比較しながら、タンガイル県のUBINIGが活動するノルショッダ村での生活を体験した後、学生に一番印象に残ったことを、ふりかえっても

HIRONO Azuma

らった。そのメモを再録しておきたい。

MS：「PAPRIが農村で女性のためにやっているマイクロクレジットを、UBNIGはやっていないので、最初は、納得がいかなかった。が、実際に有機農業をやっている農家をみたり、シャミンさんの話を聴いたりして、UBINIGのやり方に少しずつ納得しつつある。お金がお金を生むマイクロクレジットの負の面がないので、その点は心配がない。と思った。ここでもモスリムとヒンズーが共存している様子が見られたので、素敵だと思った。」

MY：「UBINIGは会社として政府に登録しているが、(会社そのものの利益の追求ではなく)会社でも農民に支援ができて、ということに驚いている。この場所の空気や文化プログラムの音楽に触れて、こういう風土が、タゴールの詩や、ストリートチルドレンが唄ってくれたフォークソングを生むのだと感ずることができ、民衆文化の高さを知った。タンガイルに来る前の、図書祭りについてもそうだが、国として識字率が低くても、人々の文化度は高いといえる。GDPに換算されない文化の高さというものを思い知らされた。」

MM：「シャミンさんがお金を貸さないということは



元手がないということか?」、東の返答「元手はある。1988年の洪水の時に欧米から援助のお金が入ったと聞いている。そのお金は、利子をとらない元手として、手織物を家庭内の規模でやっている村人に貸し付けられている。1台だった手織り機が6台まで増えた家を訪問したと思うが、そのように使われている。但し、UBINIGは利子を取らずに、返済の終わったお金は、また別の家族に手織物業を拡大する資金として貸出している。シャミンさんは、資金をぐるぐる回しているだけ。と答えていたはず。」

MM：「日本の田舎のように心が広い村人達だと感じた。そして、無農業は利益が出て儲かるというシャミンさんの話には、びっくりしたし、農家は小さい敷地の中にい

ろいろな果樹を植えて、自給自足プラスアルファの利益も出している。その利益で子たちに高等教育を受けさせているのは、すごいと思った。」

TL：「シャミンさんの、橋などの、目に見える発展と、農民の知恵など、目に見えない発展というお話は、人間の場合にも当てはまると思った。目で見て着飾っている人が輝いているわけではないとも言えるからだ。目に見えない発展については、伝統を受け継いで守っていくことが発展につながっている。外見上は裕福には見えない農民の生活も、話を聞いてみると豊かだということがわかった。」

SM：「シャミンさんの話で、無農業の農業の方が(近代農業より)進んでいるという話しがあったが、高校で習った『人類の文明は、進化していく一方で、同時に、退化もしていくパラドックスを抱えている。』という話を思い出した。自分がこれまで進んでいると思っていた科学とはなんだったんだろうと感じた。無農業農業をしているマイヌッディンさんの家を見て、その日暮らしなのではなく、(持続可能な)豊かな生活だと思った。」

AR：「PAPRIで、豊かさと、お金という経済の問題とは離すことはできないのだという疑問を残してタンガイ

ル県に来たが、経済では計れない暮らし方、生き方があ
ることが、ここに来てわかった。UBINIG は会社とし
て活動しているが、今後は、どうしていくのかについて
も興味がある。」(→翌朝、UBINIG の活動を「ソーシャ
ルビジネス」と言って良いかどうか、シャミンさんに、
私からお尋ねしたことについては、先述した。)

◆中間地点の6日目の夜をUBINIGで迎えた。今後の抱負に
ついて学生に一言づつ言ってもらった

SM：一日にあったことを日記に書いているが、内容が濃すぎ
て書ききれないまま寝る時間になってしまうが、がんばりたい
と思う。

MM：一日が濃い、一番インパクトのあったことを思い出
しながら眠りに就きたい。

TL：自分から話しかけるのが難しくても、人と触れるととて
も楽しいので、積極的に人に触れて行こうと思う。節電・節
水の生活にも慣れたい。

AR：バングラデシュの人は、村でも首都のダッカでも、人が
暖かいので、関わりたい。自然にも触れていきたい。

MS：私のテーマは子どもたちの笑顔に触れることだったが、
(子どもだけでなく) 大人も素敵。この折り返し地点で、気持
ちも新たにじっくり感じていきたい。

MY：英語を使う以前の問題だと思うが、何を言いたいのか
すぐにまとまらないぐらい、たくさんのことを体験している。

(C) ジョソール県・サティアントラ村

◆サティアントラ村の特徴

人口は約5000人。選挙権を持っている大人は、1900
人くらい。

イスラム教徒とヒンズー教徒が、半々ぐらいで、共存
している。

- この村の人たちは、
- ①お客様に対してあたたかい。人懐っこい。
 - ②宗教でケンカはしない。お互いの宗教を理解し合う。
 - ③何か大きな問題があると、村人は皆1つの心になる。
クリケットの試合にもである。
 - ④年齢の上の人は、若い者に礼儀などを教える。
 - ⑤この村には、いろいろな職業を持った人たちが、いろ
いろな名前を持った人がいる。
例) 大工、陶器職人、金属屋、農業、インドへの国境
が開かれているので、貿易商。
 - ⑥この村には、小学校、中学校、マドラサ(宗教学校)、
モディール(ヒンズー教のお寺)、
女の子だけの中学校があり、教育インフラは整ってい
る。
 - ⑦日曜日と木曜日に大きな市場が立つので、遠くから人
が集まって来る。

100年前は、この村はカリプール村と呼ばれていたが、
隣の市場にイザコザがあり、その市場の代わりとして、
ドラジャ・ハット(青空・市場)ができ、村の名前もド
ラジャ・ハット村に変わった。最近、その市場が、サ
ティアントラという名前の大きな樹の下にあるので、市
場の名前をサティアントラと呼ぶようになり、また、サ
ティアントラの市場が誰でも参加して良い市場として栄
えたので、サティアントラ市場のある村ドラジャ・ハッ
ト村は、村の名前もサティアントラ村としての方が有名
になってしまった。

イギリスの植民地時代は、ヒンズー教の地主が多く住
んでおり、イスラム教徒の方が自分の宗教を活かすこと
ができずにいた。例えば、ラマダン(断食)明けのイー
ド祭の時と、牛の肉を配る犠牲祭のお祭り日の、2つの
お祭りの時、ヒンズー教にとっては聖なる牛を村の中で
殺すことができずに、イスラム教徒は、原生林の中に入っ
て隠れるようにして、牛を殺して牛の肉を配っていたそ
うだ。

ドラジャ・ハット村は、当時、2人のジョミンダール(地
主)の元に統括されており、その屋敷は無人だが今でも
残っている。

ジョソール県の特徴は、インドの西ベンガル地方との
国境ゲートが開いており、交易が盛んである。また、ノ
クシカタ(伝統刺繍布)の産地として有名でもある。

HIRONO Azuma

おおよその進学率は、小学校 95%、中学校 80%、カレッジ（高校）50%、大学 15% とのこと。

◆ TUHIN 氏とその一家

TUHIN 家は大家族だ。主として農産物の貿易商を営んでおり、畑やジュート、ヤシの木の管理は人に任せている程の、村でのお金持ちだ。

家族構成は、おばあさん SAKINA BEGM さんの下に息子が 3 人いて、TUHIN さんは 3 男。男兄弟それぞれに、お嫁さんが居て、子どもがいる。長男の子どもが、THITI (20 才♀) と ONIKU (15 才♂)、次男 SALIM さんの子どもが SHOHAN (20 才♂) と SINPA (18 才♀)、3 男 TUHIN さん子どもが、ARIN (10 才♀) と ATISHA (5 才♀) だ。しかし、THITI と ONIKU の父親である、SAKINA さんの長男は 10 年前に病気で亡くなっている。つまり、THITI と ONIKU と彼らの母親は、おじさん達二人に養ってもらっているのである。しかし、お嫁さん 3 人の仲は悪くないし、いとこ達の間には何の分け隔てもなく育てられている。父親のいない THITI も、SHOHAN と同じくカレッジに通い、ONIKU も高等教育を受けさせてもらう予定である。

おばあさんに言わせると、「みんなで、仲良く暮らしている様子を、死ぬまで見ておきたい（今、見ている）。」

というわけだ。

TUHIN さんの父親は、サティアントラ村のコミュニティリーダーだった。しかし、他人から逆恨みされて、家に爆弾を投げ込まれ、その時の臀部から下肢の傷がもとで、事件以来、歩けなくなって晩年は家で寝たきりになってしまったそう。その父親の介護をしていたのが、当時青年だった TUHIN さん。村の会合に、動けない父親を荷車に乗せて、通ってもいた。自然と、父親の地域に対する想いや哲学は、TUHIN さんに受け継がれ、村人も、徐々にいろいろな相談事を TUHIN さんにするようになったというのだ。

長男、次男がいたが、3 男の TUHIN さんが、コミュニティリーダーを受け継ぐ予定だという。

SAKINA さんにしてみれば、夫は爆弾で負傷し晩年は寝たきりに、そして、長男までも失った。その時の悲しみは計り知れないものがあったという。しかし、アッラーの神は、乗り越えられない試練はお与えにならないはずだと考えて、これまで頑張ってきた。敬虔なイスラム教徒である。お祈りを欠かさず、心臓病を患ってから、朝の瞑想も慣行している。

◆ 大家族 TUHIN 家の仕来り

TUHIN 家には、SAKINA さんを筆頭に女性が 4 人居る。家事は、長男のお嫁さんが朝食、次男のお嫁さ

んが昼食、三男 TUHIN さんのお嫁さんが夕食を、それぞれ分担している。また、今回のスタディーツアーのように、お客さんが多い時の料理は、おばあさん SAKANA さんが仕切って、料理の献立と味も決めるそう。食器洗いと洗濯は、各家それぞれで行う。そして、家族の中で、誰かの仕事ができないで困っているようだと、それを助けるのは SAKINA さんで、例えば、お金の面でも、誰かが困っていそうな時は、屋敷地内にある竹を売って、補うのだそう。

おもしろいのは、食事の順番。お客さんが先で、次に子ども達と男性陣、最後に女性達が食べる。また、SINPA は母親と意見が合わないことが多いらしく、ケンカして一ヶ月口をきかないことがあった時など、自分の家族と食べないで、TUHIN さんの家族と一緒に食べるのそう。

TUHIN さんのお嫁さん SUBORNA さんがどのように暮らしているのか、平均的な一日についてお聞きした。

- 5:30 起床。コーランを読んで、朝のお祈り。
家をハウキで掃いて、昨夜の夕食の皿を洗う。
子どもを起こして、勉強をするように言う。
- 8:30 子どもたちを学校に送り出す。
(たまにエリンが学校に行きたがらない時は、送っていく。)

アティシャにシャワーを浴びさせる。洗濯をする。

13:30 エリンが学校から帰ってくるので、一緒にお祈りをし、お昼ご飯。洗濯して干していた服を取り込みたむ。

時間があれば、カタ（着古したサリーを重ねたもの）を縫う。

エリンの家庭教師が来る。おやつを出す。

晩御飯の準備。おかずはお昼と同じなので、ご飯だけ炊く。

16:30 お祈り。

17:00 コーランを教える家庭教師が来る。コーランを読む。

夕方 池まで子どもを連れて散歩に出る。

日没後のお祈り。

アティシャとエリンも手を洗って、勉強。

2時間くらい母の SUBORNA さんが子ども達に勉強を教える。

その後、TV を見ながら晩御飯をいただく。

22:00 就寝。

シュボルナさんが幸せを感じる時は、夕方、一日の仕事を終えて、自分が子どもの勉強を見てあげている時と、5時頃に中庭で、今日誰に何が起こったかをおしゃべり

したり、笑い合ったりする時間。それが、娯楽。夏の暑い時期には、午後は昼寝もする。

また、SUBORNA さんは、ここよりもっと不便な 17km 先からお嫁に来た。生まれた村より、この村の方が好きである。理由は、交通のアクセスが良く、学校もたくさんあるし、礼儀や村の規律もこちらの方が整っている。生まれた村では、女性は夜中まで家事をしなくてはならないが、(先述したように)ここでは、みんなが分担してくれるので、多少は楽。

複雑な家族構成の TUHIN 家、仲よく平和に暮す秘訣を聞いた。

おばあさんは、子ども達（＝息子や嫁）の言う事をよく聞き、賛成し、年長者であるおばあさん自身の意見も聞き入れてもらう（年長者の言うことをきくのは、イスラム教の教えでもある）。この家のこと、隣の家のことに口出ししない。酷いことを聞いても、お腹にしまっておく。

SUBORNA さんの心得は、悪口を言わない。誰かへの悪口を聞いてもそれを隣に言わない。隣に何か問題があると、私の家族の方にご飯を食べに来る。それを受け入れる。

義理のお姉さん（THITI の母親）が、間違ったことを言ったとしても、先輩なので、間違いを指摘しない。私の間違いに対しては、二人の義理の姉さんたちは、許

してくれる。

この家で、一番大変だった時期は、長男（THITI 父親）が亡くなった 10 年前である。働き手を失ったし、THITI も ONIKU もまだ子どもで、小さかったから。

この家のお財布は、SHOHAN の父親、次男の SELIM さんが握っている。TUHIN さんはサラリーマンなので、お金を家に入れ、SELIM さんと TUHIN さんで、3 家族を養っている。

家族の要は、おばあさん（SELIM さん TUHIN さんの母親）の SAKINA さんである。

TUHIN さんが生活上で大事にしていることは、「我慢すること」、だそう。

我慢しながらでも、一緒に仲良く皆で暮らすこと。頭を使って問題を解決する力をつけ、神様を信じて、前に進んで行くことが大事だと言った。

このお話を聞いて、バングラデシュの家族の結束、絆の強さを感じた次第である。

◆ヒンズー教徒のカティック・チョンドロ・デボナさん（70 才くらい）にお話を聞く

カティックさんは、ドラジャ・ハット村の天然の池の端に、ヒンズー寺院を建立したそのメンバーの会長である。カティックさん自身、お祭りのお供えのために、マ

HIRONO Azuma

ンゴーの木を 100 本、ライチの木を 200 本植えた。

去年は不思議なことに、モスリムの寺院にお供えしたライチの数が、来場者とぴったり一致したそう。お祭りには何人お客さんが来るかわからないのに、数が合ったことが不思議でめでたいことだと語り継がれている。

カティックさんに言わせると、「生まれた所、ここが私にとっての天国」である。祖父の時代から話には聞いているのだが、ヒンズー教とイスラム教と、ケンカなどは起きたことはない。

TL から、ヒンズー教とイスラム教の違いを感じたり意識したことは、何か無いかと質問したところ、(カティックさんと TUHIN さんと、もう一人臨席していたヒンズー教徒との 3 人で、ごちゃごちゃ話をしだす。整理して出てきたのが)

*ヒンズー教徒としては、牛を殺して食べるイスラム教の人たちのことを理解しにくい。

ヒンズー教では、牛は聖なるものだから。

*イスラム教徒から見れば、ヒンズー教の寺院ではたくさんのお供えものをするが、

お供え物が食べきれない程余るくらいなら、乞食に恵んでやった方が意味があるのに、と思っている。とのことであった。

村の道路の補修などは、道路はみんなのものなので、宗教は関係なくヒンズーもイスラムも一緒になって行

う。

カティックさんが建立したヒンズーの寺院は、最初、イスラム教の人たちに、元々あったのだから再興したらどうかと、持ちかけられて、建設を計画したのが始まりである。

土地はもともとヒンズーの寺院があった場所なので、問題はなかった。

村の政府の土地に、マホガニーの樹が植えられていたが、それを売って、250000 タカを捻出した。政府の土地の樹を切ることには、村から文句は出なかった。

政府から資金の援助が、44000 タカあった。残りのお金は、ヒンズー教の人が 50% を、イスラム教の人が 25% を寄付してくれて、建てることができた。

そもそも、政府の土地、つまり、村の共有地でもある土地に育ったマホガニーの樹を切ることを許してくれたのは、イスラム教の村人であり、その協力があつたからこそ、この寺を建てることができた。

先程、「ここは天国である」と言ったが、息子たちにも、この村に住んでほしいと思っている。そのようになるよう、神様にもお祈りしているところである。

ヒンズー教徒もイスラム教徒も、同じ、女性という母のお腹から生まれてくるのだから、同じ人間である。イスラムもヒンズーも差はないし、お互いに嫉妬もない。それに、生まれた時から、隣にイスラムの人が暮らして

いて、自然と知り合いになるので、この 2 つの宗教の違いを強く意識したことはない。

それに、新しくヒンズーの人が引っ越して来ることができなのが、この村の平和で寛容なところでもある。

イスラム教のイードのお祭りの時は、ヒンズー教徒も呼ぶし、モンディー（ヒンズー寺院）にプジャ（お祭り）がある時は、逆に、イスラム教徒にも声をかけて、参加してもらう。

3 月にはモハナムジョッグという盛大なお祭りがある。

クリシュナのホーリーネームを唱え続けるお祭りで、お参りに来た人に、食事を出すが、

参加者の 40% はイスラム教徒である。4 日間の祭りで、300Kg のお米が料理され、周囲 2 ～ 5Km の近所の人たちが泊まりがけでやってくる。その時、(村のイスラム教の人も含め) 誰も文句を言う人はいない。

チュロン・セバ（足のサービス）と言い、来訪者への尊敬の意味で、足を洗ってあげるのだが、人間の中に神様がいるという考えに基づいている。その神様の一番下の部分の足を洗うことは、とても尊い行為となる。

このように、ヒンズーとイスラムは仲良くこの村で共存している。

◆イスラム教徒の元村長、ムハマド・ロキープ・ウッディンさん（72才）にお話を聞く。

村長を5年×6期＝30年務めた。年をとって病気になるので、引退した。

村長の後任を決める選挙では、ヒンズー教一人、イスラム教が一人、最後に決戦投票になったが、ヒンズーの人も、宗教に関係なく、イスラム教徒の候補に投票することがある。それくらい、この村では、宗教的な仲違いはない。

この村の3つの良い点は、

①果物がたくさん収穫できる。全部の種類の果物がとれる。

②もめ事やケンカが非常に少ない。礼儀があり、平和である。

イスラム教徒もヒンズー教徒も仲が良い。

お互い傷つけないように尊敬しあっている。年長者の意見も尊重されている。

③御飯を食べられない人はいない（困窮している人はいない）。

農業も道路のアクセスも良い。

例えば、政府の道路を作るときは、チンピラにお金を要求される場合があるが、この村は、スキがなく、礼儀がある村なので、そのような事を要求された事がない。

「ヒンズー教徒とイスラム教徒が仲良くしていくよう、次の世代にどう伝えて行くのか？」

という質問に対しては、「生き方を見せる。そうすれば、自然に仲良くなっていくはず。」との答えが返ってきた。誰も不幸な人はいないし、不平を言う人もいない。誰も不幸にならないように、支えあっていく。とも付け加えられた。

本当に、平和な村なのだと、感じた次第である。

◆村の自然もすばらしい。

その様子については、学生のレポートや日記部分を参照されたい。

(4) 首都ダッカ・NGO「オポロジェヨ・バングラデシュ」のストリートチルドレン支援

オポロジェヨとは、「絶対に負けない」という意味のベンガル語だ。

バングラデシュには数千のNGOがあって、教育分野で活動するNGOはあるが、ストリートチルドレンを直接の対象とし、また、政策提言（アドボカシー）を行うNGOは少ない。

その中で、「オポロジェヨ・バングラデシュ」は、10

年以上前からストリートチルドレンの支援を行っている。

具体的には、

①路上生活をしている子ども達への支援

②働いている子ども達への支援

③刑務所に入れられた子ども達への支援

④人権が守られていない子ども達についてのアドボカシー

⑤地域の一般の人たちを巻き込んだ子ども達への支援（mobilization）

⑥人権条約を批准したにも関わらず子どもの人権がきちんと守られていないことへのアドボカシー

⑦子どもを守る裁判活動 などである。

ここでは、路上生活をする子ども達への支援に絞って書いておく。

なぜ、子ども達は路上に出てくるのか？

家族から虐待や暴力を受けたり、父親または母親が再婚して、新しい義父母とうまく行かないなど、経済的にも大変で自分の生まれた家庭を出ざるを得ない場合などである。

自由を求める気持ちの強い子どもが多いそうだ。

彼らは、無賃乗車などをして、地方から、首都のバス停・駅・船着場に出てくる。

HIRONO Azuma

「オポロジェヨ・バングラデシュ」では、首都ダッカの場合、サイダバット・バスセンター（東京の新宿西口のような長距離バスの発着所）やコミラプール駅（東京の上野駅のような地方からの上京者の多い駅）など、市の南部を拠点に、一人で地方から出てくる子ども達が路頭に迷ってストリートチルドレンになっているのを、まずは「青空教室」などに誘うことで、支援にアクセスできるようにしている。

しかし、大人が誘っても、路上生活をする子どもたちは、信用しない。路上生活をする中で、大人にいじめられたりして信用しなくなり、また、人買いに遭うのではなかと敬遠する。そこで、青空教室に馴染んできた子どもが、路上で過ごしたり働いたりしている子どもを誘うことから、支援は始まる。

さらに、青空教室に通って、落ち着いて読み書きができるようになったり、整列することができるようになったりした子どもから、ドロップ・イン・センターという一時庇護所（最近は、宿泊することもできるようになった。）に通わせるようにする。

そこでは、シャワーを使って体を清潔にしたり、自炊もできるし、大事な貯金や思い出の品をしまっておく小さなロッカーを借りたりすることもできる。体を休めた子がいれば、寝転ぶこともできるし、救急箱もあるので、ちょっとした怪我の手当をしてもらえる。

もちろん、遊び道具や勉強道具もある。

そして、ドロップ・イン・センターでは、スタッフとの関わりの中で、愛情を注がれたり、心理的なサポートを受ける中で、徐々に子どもらしい人格を取り戻して行くのである。

私たちは、そんな背景をもつストリートチルドレンに、ジャトラバリ・ドロップ・イン・センターを訪問して、交流を行なった。

MS (P52) や MM (P46) の報告に詳しいが、学生は子ども達の笑顔に出会って、大変感動したようだ。特に、歌を唄ってくれたり、フォークソングに合わせて伝統的な踊りを見せてくれたりしたことを喜んだ。学生の側からも、きゅーぱみゅぱみゅの歌やゆずの「栄光の架け橋」を唄って、お礼とした。最後は、学生6人は、一人ずつバラバラになり、7～8人の子ども達と1つのグループになり、思い思いに交流をした。ベンガル語ができるわけではないので、ベンガル語練習帳を見ながら年齢を尋ねてみたり、「大きな栗の木下で」という歌の振り付けを伝授してみたり、ボディーランゲージで何とかコミュニケーションをとっていた。子ども達の方が、われわれに興味を示してくれたことが、何より嬉しい。そして、2時間近い交流の時間はあっという間に終わったが、子ども達の集中力はすごいものがあると、私は感心した。そして、私個人としては、10年前から知って

いる、元ストリートチルドレンで、今はこのセンターのアシスタントスタッフにもなっている、ハシナさんにも会えたことが嬉しかった。彼女は相変わらずアクティブで、前向きであった。

(5) 学生の気づきを促すワークショップと「ふりかえり」

さて、これまで書いてきた訪問地での体験を通じて、学生は何を学びとっていったのか、その軌跡を追ってみたい。これは、体験学習の意義を明らかにするだけでなく、研修地としてのバングラデシュの魅力をまとめておくことにもなると考えられる。

まず、各時期に行なったワークショップ等の概要を記しておく。

①一回目の講義（2012年10月2日）

私がこれまで撮ってきたバングラデシュの写真スライドを見て、各現場を訪ねる狙いを知り、その後の感想として、バングラデシュに行きたいと思った最初の「動機」を書いた。

②最終講義（補講:2013年2月5日）の最後に、各自の「テーマ」を、一行で書き、研修に参加する決意表明とした。

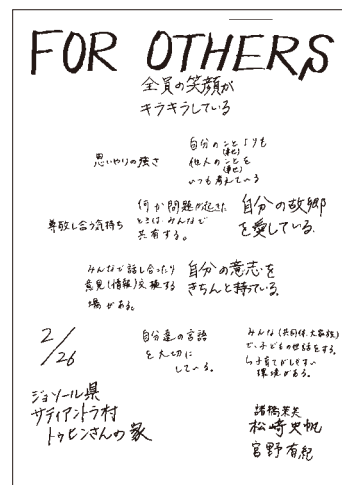
③トランジットの香港空港（2月17日）でバングラデシュへの「期待」を書いた。

＜補＞UBINIGでの夜のふりかえり(2月22日、6日目)
これについては、(3) B:UBINIG のところですでに触れた (P.10～P.12) が、6日目という折り返し地点での「ふりかえり」について、ARは、「これまで 体験としてのインプットが多かったので、こうやって、みんなでアウトプットし、気持ちや意見を共有することは、整理と気づきにつながり、とても良い事だと思います。」と、言ってくれた。これが、まさに、学びとしての「ふりかえり」の意義そのものである。

④TUHINさん宅(2月26日)「バングラデシュの良さ」を検討するワークショップ

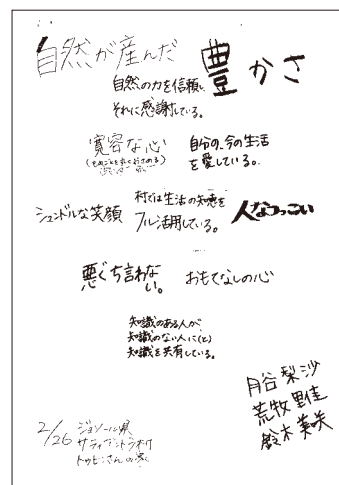
このワークショップは、村々のフィールドワークの間まとめとなった。

ノルシンディー県、タンガイル県、そして、ジョソール県と、性格の異なる村々のフィールドワークをしてきて、学生たちが感じて考えたことを、一旦まとめる時期に来ていたからだ。2月26日(10日目) TUHINさんのお宅のベランダで、3人ずつ、2班に分かれて、ダイヤモンド・ランキングという手法を使って、ワークショップで検討した。



その結果が上の2枚の図である。

「For Others」とは、フェリス女学院大学の建学の精神であるが、全く、予期せず、出てきた。それは、ランキング2位の、「自分の幸せよりも他人の幸せをいつも考えている」というラベルと「思いやりの強さ」というラベルを見て、MYが、自然と導きだして来たのであるが、ランキングの結果にびっくりなタイトルを発見して、この班はとても喜んでた。また、カティックさんの話を受けて、「自分の故郷を愛している」というラベルが出てきたようだし、ヒンズー教とイスラム教の共存の秘訣として「尊敬しあう気持ち」というのもラベルとして上がってきていた。フィールドで感じたことが、き



かと推察された。

ランキングとその発表が終わった後、各自の想いを整理して「私にとってのバングラデシュ」という題でレポートを書いた。

この時の議論や発見が、後々まで効果を発し、各自のレポートにまとめられた。

【特別ワークショップ】ダッカ大学の女子学生と（2月27日、PANSI NAO号の上で）

ジョソール県からダッカに戻る途中、私たちがガンジス河を渡る時、午前中に PANSI NAO 号でガンジス河クルージングを楽しんでいた、ダッカ大学の日本語コー

HIRONO Azuma



スを修了した女子学生6人が、右岸で花飾りとバナーを準備して、出迎えてくれた。

船上で昼食を一緒にいただいた後、ワークショップを行なった。

最初に、ワークショップという学びの仕方について、説明した後、

まず、始めに、札を上げる○×クイズで、場を温めた。

特に、⑤では、場がザワついた。ダッカ大生は、識字率や、イスラム教が多くを占める国で女性の社会進出が遅れていることを問題にしているようだった。一方、フェリス生は、フィールドワークで訪問した村の女性たちや少女たち、一人一人の顔が浮かんだのだと思うが、一気に全員○を出した。

クイズの問い	ダッカ大生の反応	フェリス生の反応
①私は、バが好きである	全員○	全員○
②私は、バが発展しつつあると思う	全員○	全員○
③私は、バの田舎の生活を体験したことがある	2人以外×	全員○
④私は、バの田舎に住んでみたいと思う	△	ひとり以外○
⑤私は、バの女性はしっかりしていると思う。	全員×	全員○
⑥私は、バは豊かだと思う。	△	全員○

バ：バングラデシュ ○：YES ×：NO △：何人かは×や○

この結果に、ダッカ大学の女子学生は、お互いの顔を見合わせ、怪訝な顔をしていた。

なぜ、フェリス生は、バングラデシュの女性がしっかりとしていると思ったのか？

ファシリテーターの私は、すぐそばに居たARにマイクを向けた。そうすると、ARは、

「女性ショミティを訪問した時、メンバーは皆、しっかりとした意見を持ち、家庭の経済的な運営のために知恵を出し、努力をしている様子に出会ったからです。また、いろいろ質問すると、皆、即答してくれて、しっかりと答えてくれた。

場に躍動感が出てきたので、次に、ブレイン・ストーミングのやり方を説明し、フェリス生とダッカ大生との混成チームを2班つくり、各班で、司会・記録・発表・うなづき&拍手係を決めてもらった。この時も、お国柄

というかダッカ大学の優秀さが出て、おもしろかった。発表者は、手前の班が、ファル・ファナさんで、奥の班が、SMさんになった。

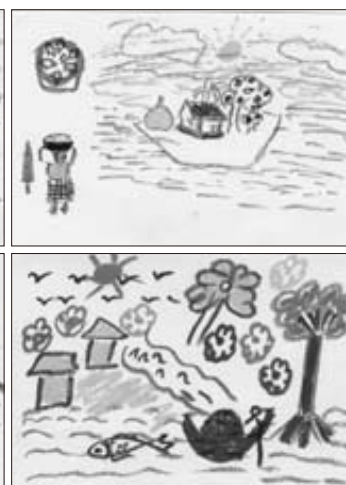
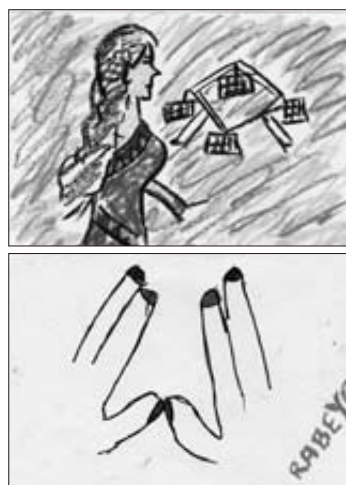
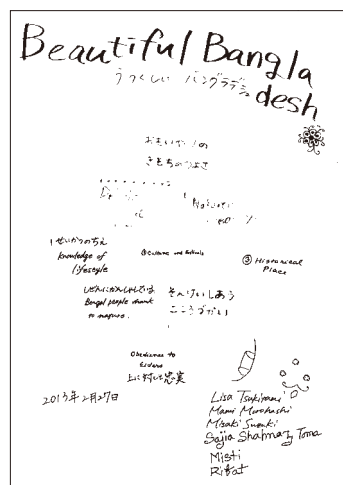
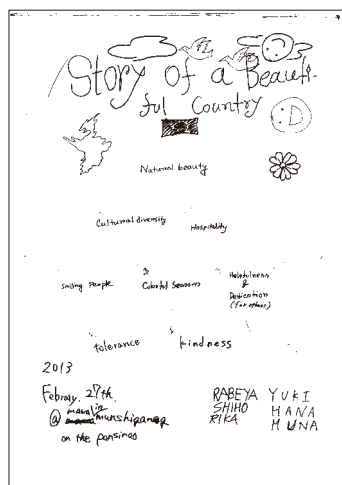
ブレイン・ストーミングのお題は、「バングラデシュのすばらしい点」である。

話し合った後は、ダイヤモンド・ランキングに整理してもらった。結果は、

手前の班Aが、(Story of a Beautiful Country)
奥の班Bが、(Beautiful Bangladesh)

どちらもすばらしい話し合いをしていたが、班Aが、美しい自然を前面に出してきたのに対して、班Bは、思いやりの気持ちの強さを一番に上げてきていて、違いが出た。

最後は、話し合いの結果としてまとめられたダイヤモンド・ランキングの題名にそって、絵を描いてもらった。



農村生活には馴染みの少ないダッカ大学の学生かと思っていたが、絵では、農村風景を美しく描いた学生が居た。また、両手を合わせた絵を描いたダッカ大学の学生は、今回のワークショップでの交流による友好 (Friendship) を示していると言っていた。

フェリス生の方は、笑顔や自然を描く学生が多かったが、食べ物を表した学生も居た。

当初の予定では、日本語を中心にワークショップを行う予定であったが、始まってみれば、ダッカ大学の女子学生は英語が堪能なので、自分たちは英語でどんどん話してしまうという状態になり、フェリス生は少々圧倒されてしまった。言葉の点で意思疎通は 100% でできなかった

が、学生には良い思い出になったし、革新的な学びを体験させていただいた、というのが、この企画を推進して下さった、ダッカ大学の Delwar Hossain 教授からのお礼の言葉であった。(日本語通訳でサポートして下さい、Sunil 先生にもお礼を述べたい。)

⑤最終ワークショップ (2月12日、12日目)

@ホテルクリスタルクラウンの会議室

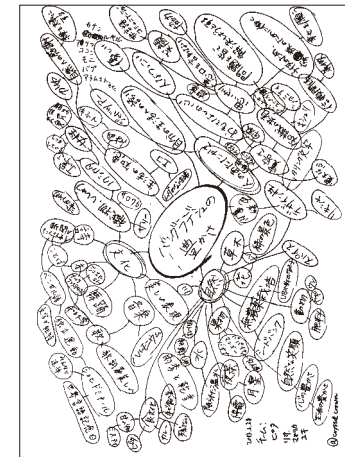
現地での最後のワークショップは、ブレイン・ストーミングで、「For Others」か「豊かさ」について議論し、マインドマップに描き、班で発表をした後に、自由題で、

各自がまとめのレポートを書いた。

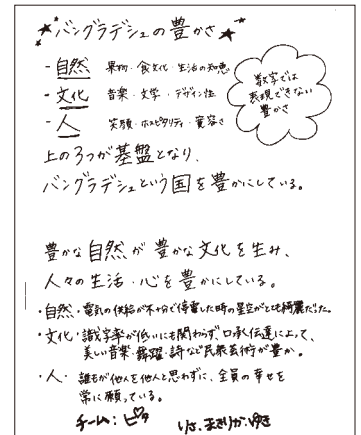
チーム：ピタの三人は、マインドマップを見てわかる通り、バングラデシュの豊かさについては、その要素は多彩で量も多かった。「自然」から派生する物事も多かったが、「人のあたたかさ」や「文化」「生活の知恵」「思いやり」「寛容さ」が、中心的に浮かんできていた。そして、それらは、「数字では表現できない豊かさ」だと、言葉が添えられていた。

「人のあたたかさ」からジャンプして、「ジャバツアー」へと派生し、代表のアラムさん以下、スタッフの名前が出てきている点もとりあげておこう。今回は、言語運動

HIRONO Azuma



マインドマップ チーム：ピタ



画用紙まとめ「バングラデシュの豊かさ」
チーム：ピタ

記念日（ショヒド・ミナール）に献花をするに当たって、行進が混雑した場合もし迷子が出たら大変なので、若手スタッフを増強してもらっていた。また、ホットールが3回あり、そのうち2回はダッカに昼間いるときに遭遇したので、予定していたレストランでの食事がかなわず、JABA tourの事務所の食堂でいただいた。それもあって、JABA tourのスタッフとの出会いが多くなり、彼らのおもてなしの心と優しい人柄に直接触れることになったのである。

そして、チーム；ピタのまとめでは、「自然・文化・人の3つが基盤となり、バングラデシュという国を豊かにしている。→ 豊かな自然が豊かな文化を生み、人々

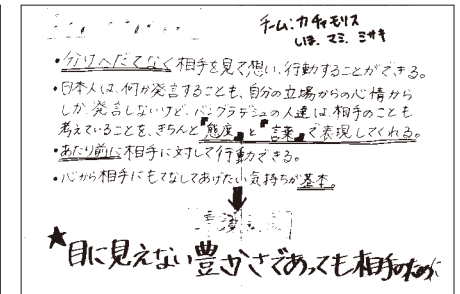
の生活・心を豊かにしている。」と締めくくっていた。

一方、チーム：カチャモリスは、「For Others」を中心においてマインドマップを描いた。そこには、UBINIGのシャミンさん、JABA tourのアラムさん、



マインドマップ チーム：カチャモリス

PAPRIに加えて、チャイ屋のおじさんまでは出てきている。最後は、Hospitalityでくくっていて、「相手に喜んでももらいたい気持ち、相手をしっかり尊重している（信頼）」という、コメントが添えられている。まとめで



画用紙まとめ「For Others」

は、「For Others」は、分けへだてなく、「態度」と「言葉」で表現してくれる（日本人のように暗黙の了解などではない）。当たり前にもたないであげたい気持ちが基本。と書かれ、しかも最後には、それらが連鎖反応を起



こしているのがバングラデシュだというのだ。その For Others は、目に見えない豊かさであっても、それは、(宙に浮いているのではなく) 相手のためにしていることだと、強調された。

(6) 学生の学びのプロセスと現地での最終レポート

スタディーツアーで肝心なのは、現場での「ふりかえ

り」である。

その意義については前章でも触れたが、ここでは、学生の学びのプロセスを提示しておきたい。研修に出発する前と出発した後では、気持ちや考えはどう変わったのだろうか？

あるいは、体験しながらも、気持ちが変わらないのであれば、それは、研修そのものか、学生本人に、何かひっかかるものがあり、理解が進んでいない証拠でもあるので、そのようなサインは重要であり見のがせない。一方、

ボンボン目先が変わりやすい性格の学生も居るので、それに対しては、気づきが深まるような声かけが必要となってくる。

ここでは、

- ① 履修時の「動機」
- ② 最終講義（補講）時での各自の「テーマ」
- ③ 現地入りの直前（＝香港でのトランジット）の「期待」
- ④ 10 日目のワークショップの後に書いた「ふりかえりレポート」
- ⑤ 12 日目のワークショップの後に書いた「最終レポート」

の記述に関して、一人ひとりをポートフォリオをまとめる形で、追いかけてみる。

抜粋であっても冗長だが、大事なことなので、学生の記述を再録しておきたい。

HIRONO Azuma

◆ M・S（文学部英文学科2年）

日程	内容
①	もともと海外旅行が小さい頃から好きで、アメリカ・オーストラリア・バリ・イギリスなどに行って、現地の人々と触れ、文化、食べ物と本当に感動するものばかりでした。大学生になり、他大学の友人で、海外ボランティアのサークルに入っている人がいて、話を聞いていると、とても興味が湧きました。また、偶然その友人が、今年の夏休みにバングラに行き、今まで行ったボランティアの中でとても素敵な地だと話してくれました。そして、今日、このフィールドワークを知り、本当に行きたいと思いました。また、私は、福島県出身で地震が起こり、何も出来ぬまま、関東に上京となってしてしまったこともあり、誰かの役に少しでもなりたいという思いから、今回参加を決めました。今日話を聞いていると、早くバングラに行きたいという気持ちが大きくなりました。
②	たくさんの子どもの笑顔に触れ、バングラデシュの文化にも触れる。
③	バングラデシュに行くまでに、子ども・女性・家族について見てきましたが、その事前学習だけではわからないこと、見て初めてわかることを多く学べるだけ学んで行きたいです。また、授業でみた子ども達の純粋な笑顔を本当に楽しみにしているので、直接会って、自分は感じるのか、考えるのか、一日一日を大切にしたいです。
④	”子どもの笑顔”、”人のあたたかさ”など、もっとたくさんの人と交流したいと強く思い、(自分の)素直な気持ち、純粋な気持ちが無くならないようにしたい。

- ⑤ 「バングラデシュで起こる連鎖反応」
- 私が二週間滞在し、一番考えたこと、感じとったものは、”思いやり”である。今回”自然が生んだ豊かさ””For Others”について6人で考え、まとめ、発表したのが、自分の中でまとめて考えたのは、シャミンさんのレクチャーであった、”目に見える豊かさ””目に見えない豊かさ”を教えてくれたのがバングラデシュだ。(日本は物質的に豊かだが)バングラデシュに着てみてたくさんの方の優しさに触れた。(中略)どこかに行き、最後に挨拶する際に、バングラデシュの人は必ず私たちの幸せを祈ってくれる。それを、きちんと、言葉にし、態度にしてくれる。(中略)私が香港空港で書いた、”素直な気持ち、純粋な気持ちがなくなりたい”と書いたが、書いた時よりももっと強くそう思っている。それは、バングラデシュに来なければ、弱くなっていたかもしれないし、そう思えたのには、私の考えとして、1つ目は、たくさんの方の自然に触れ、邪念をとりはらい、ゆつくりとどうあるべきか、どうならなければならないか、ゆつくりと呼吸しながら考えることが出来たこと。2つ目は、当然となっている思いやり、優しさを目で見て、直接体験して、自分の不足している部分に気づけたこと、たくさんの方の子ども、男性、女性、老人の笑顔に出会い、心の底からこの人たちが一生笑顔でいられますようにと願えたこと、このこと全部が合さり、思えた結果だ。シャミンさんが言った、目には見えない豊かさの連鎖反応は、バングラデシュ人の思いやりと思いやりで起こっていると、目で見て、心の底から感じることができた。

東から MSさんが、笑顔を求めるのは、ご自分の笑顔にコンプレックスがあるからだとも書いていたね。そのコンプレックスはどうやら取り払われたようです。思いやりの心を強く出来たのもバングラデシュのおかげ、とか。自然や人々との出会いが豊かだったことを物語っています。

●T・L（コミュニケーション学科2年）

日程	内容
①	日本で生まれ育った私は、バングラデシュのような発展途上国の本当の暮らしを知りません。説明会（＝昨日の講義）で話を聞くまでは、貧しくて、生活らしい生活をしていない人々なかりがいる国だと思っていました。もちろん、そういう方々が未だにいることもあるのだと思いますが、私が、説明会で感動したのは、美しい民族衣装があること、女性が社会に進出するために努力していることでした。今までは、先進国の文化が大好きで、発展途上国についてはほとんど無知な私ですが、頑張っている女性たちから勇気をもらいたい、そこからこの先私に何ができるのかを発見したいと思い、バングラデシュに行ってみたいと思いました。今日は、日本では見られないような、綺麗な風景の写真がたくさんあるなと思いました。民族衣装を着ることが楽しみです。
②	バングラデシュの女性の社会進出と結婚観
③	日本とは全く違う全てを自身で感じたいです。同じ生活や価値観はもてなくても、自分とは違う何かを知り得たいです。女性が社会進出に意欲を見せている、という状況であることを、少し期待しています。最終的に、自分がバングラデシュという国に対して、良いイメージを持って帰りたいです。
④	バングラデシュは、私が育った静岡の田舎よりも自然が豊かで、その自然と仲良く共存していることが伺えた。（中略）自然が豊かなため、自然に対して素直に感謝の気持ちを表すことができる。太陽や鳥の鳴き声や緑の豊かさに直接触れることができる。バングラデシュに来て一番驚かされることは、バングラデシュ人の人間性の素晴らしさだ。 見慣れない顔の私たちに笑顔を向けてくれる、手を振ってくれる。私たちの幸せを祈ってくれる。一体どこまで私たちが忘れていたこと、できないこと、知らないことを教えてくれるのだろう。触れ合う人々はみんな自分の人生に自信を持っていて、誇りがあって、輝いて見える。彼ら、彼女らからは権利や意思・幸福が感じられた。私は女性をテーマにバングラデシュに来た。私は、日本での自分の生活を幸せだと思っている。バングラデシュの女性は幸せなのだろうか？希望を持って生きているのだろうか？と感じてきた。一言で言えば、彼女たちは大変幸せだった。強い意思があった。羨ましく思える程の笑顔で幸せだと言う。私ももっと幸せになりたいと思った。私は私なりの最大限の幸せを手に入れて、幸せをみんなに分けていけたら最高だと思う。

⑤	「目に見える発展と目に見えない発展」 UBINIG を訪問した際に、シャミンさんのお話を聞き、目に見えない発展を見聞きしてきた。ムハマッドプール村には、無農薬栽培やタンガイル織り、伝統的な音楽・舞踏など、古き良きものがたくさんあり、盛んであった。シャミンさんは、無農薬栽培こそ科学だと主張した。メリットをあげると、有害な薬品を使っていないから身体に悪い影響がなく、健康に良い。子どもに安心して食べさせることができる、無農薬の方が、牛が稲を食べるし、魚も川に住めるなどのメリットがある。そして、無農薬ということがブランドにもなりダッカで高く売ることができる。健康面も経済面も良い面がある。（中略）私は日本で生活していて、目に見える発展をたくさん目の当たりにしてきた。また、目に見える発展を求めている人もたくさん見てきた。それは一種の栄栄であり、人々のエゴが見えると、シャミンさんの話を聞いて感じた。バングラデシュでは、新しいものよりも、大切にされ受け継がれている古いものの方が綺麗で品があって、価値があるように思えた。タンガイル織やジャムダニ織りのサリーも一緒に、古いモノの方がARONGで売られている流行りのものより華やかでパワーが感じられて、女性らしいと思った。どんどん新しいものが産まれる（日本）社会で、古き良きものに触れることに目を向けて来なかったが、古き良きものを生産している人々が誇りに満ちているのを見て、そういう人々の支えができる人になりたりと、強く感じた。（中略）目に見えない発展から目を背けてはいけないと思ったのは、新たな発見だった。
東からのコメント	最初のテーマ「女性の社会進出」についての関心から、現地で過ごすうちにテーマはだいぶ変化しましたが、「目に見えない発展」の重要性という大切な事を発見したようですね。ショミティの女性やキシユリの女の子達が、自信をもって発言している様子にいち早く感心したのもTLさんでした。バングラデシュの人々の自信や誇りのある姿を感じ取ってくれて、私も嬉しいです。ありがとうございました。

HIRONO Azuma

● S・M（国際交流学科 1 年）

日程	内容
①	私は、4 月の時点で、NGO などの国際的な支援活動をしたいと考えていたので、説明会にまず参加しました。写真を見て、海外研修はとても濃密な時間を楽しく過ごせそうだなと、思いました。写真として見るだけではなく、実際にバングラデシュでの生活や現地の人、音から空気まで感じたいし、物質的な豊かさだけでなく、生活の中の豊かさを多角的に見てみたいです。今は、異文化を体験してみたいという思いが強いです。
②	女性の自立（2 / 20、4 日目夜のバスの中の「ふりかえり」では、自分の人間性を絶対に変えて／変わって帰ると訴えていた。）
③	授業の中で、「日本にはない豊かさ」の話をして、これは日本人なら途上国に対して抱く固定のイメージだと思っています。私はその豊かさを身をもって体験できることを期待しています。「バングラデシュの良さは人」というお話も聞いたので、とても楽しみです。私は女性についてレポートを書こうと思っていたので、村の女性が物怖じしないで発言している様子や、日本人と全く異なる考え方をしているということを知ることができたらいいなと思います。現地の（日本人用ではない、村の人が食べるのと同じ）食事や民族衣装も楽しみです。
④	私にとってのバングラデシュは、私が以前思い描いた（理想的な）社会にとても近いと想いました。（中略）こういう生活はいいなと思ったのは、地元にあるもので生活したり、歩いて友達の家や近所の人の家まで行って、自然や豊かな文化に囲まれて、ゆっくりとした時間を過ごしたり、身近なコミュニティや小さな社会を大切にする生活だったので、バングラデシュの農村に来てから、私は以前こういう環境をずっと欲しがっていたんだと、感じて、その時の気持ちを少し思い出した。（今住んでいる横浜は隣近所が何をしているのかもわからず住みにくいのだが）（中略）バングラデシュの村にある、人々の寛容な心とか、土地を愛する気持ちとか、和を保つための我慢とかが、すべて自然によって育まれたものであると、私は身をもって感じたので、そのパワーを再確認できた、証明されたと思う。

- ⑤ 「この国のたからもの」
- ブレイン・ストーミングからマインドマップを描いて、バングラデシュの人や環境や文化が引き起こす連鎖反応について考えた。私が 2 週間で得たものや見たもの、知ったことはとても多い。日本ではイジメ問題が深刻なのに、バングラデシュではそんな問題がないときいて、やはりそれが何世代にもわたって受け継がれてきた人柄や考え方や生活の空気によるものだと思う。（その雰囲気は）国の政策や経済成長によって勝ち取れるものではないし、日本がまねできるものでもない。目にも見えないし、システムによって得られるものではないので、非常に貴重な財産だと思う。バングラデシュの財産と言えば、何が最初に浮かんでいたか。今日のワークショップをする前だったら、「人々の笑顔」とか「自然」「文化」と言っていたと思う。確かにそれも大事だけど、人々が代々受け継いできた「空気そのもの」だと私は思う。自然と共存することや感謝すること、村での生活は、その空気によって支えられてきたし、相手を思う気持ちとか、人々の内面においても同じことが言えると思う。サティアントラ村で、ヒンズー教とイスラム教が共存できるのは、まさに、その例で、カティックさんがおしゃっていた通り、祖父の代からこの村で争いごとはなかった。その考え方や感じ方が受け継がれている証拠だと、私は思う。1 年 365 日この空気の中で生活すればそれにみあった国民が連鎖反応をおこしているというのも納得できる。日本に帰りたくないと感じるのも、バングラデシュの国民や生活の中に目に見えない魅力を感じているからだ。日本ではこの空気感を体験できない。（中略）ダッカ大学の学生とのワークショップでは、彼女らが「バングラデシュの良さ」について記述したことは、丘や川だったけど、意識して人に配慮しようとか、もてなそうという気持ちが、本当にはこの国の人にはないんだなと思った。

東からのコメント SM さんは、感受性豊かに、どんどんバングラデシュの懐に入って行き、4 日目にして自分が変わることに予感をご自分で察知しました。案の定、表面的で紋切り型の意見ではなく、バングラデシュの「空気感」への洞察を深め、ダッカ大学の女子学生とのワークショップを経験し、バングラデシュの人々のおもてなしの心も無意識から出ていることを考察できました。（ぜひまた、バングラデシュにいらっしやい。）

● A・R（国際交流学科1年）

日程	内容
①	私はバングラデシュについて詳しく知らないのですが、ざっくりとしたイメージとしては、やはり”発展途上国”といった感じです。しかし、途上国へ行ったことのある方のお話を聞くと、経済的には貧しくても心は日本人より豊かといった意見や人生観が変わるということをよく聞きます。日本にただでいるだけでは分からない異文化体験をして、さまざまな人と関わってコミュニケーションをとって、今しかできない体験をしたいと思います。異文化を体験して、さまざまな価値感を知って、多くのことを学びたいです。
②	バングラデシュの子どもと教育問題
③	数回の授業で勉強してきた通り、途上国と言えど、発展がどんどん進んでいる国なので、NGOやNPOの力を借りながら自立した、世界に認められる国になってほしいと思います。私は、子どもや教育に関心があるので、ストリートチルドレンとの出会いや村の子どもたちとの触れ合い、学校や教育の様子が少しでも知れたらいいと、期待しています。
④	バングラデシュに来て約10日間、本当にたくさんの経験をしてきました。途上国ってどんなところだろう、行って来た人が言う日本にない豊かさって何だろう、そんな疑問を抱いてこの研修に参加しました。私の期待以上に、バングラデシュというものを五感を使って肌で感じています。この国ではどこへ行っても人々が私たちのことをあたたかく受け入れてくれます。皆、心に余裕があって、他人のことを他人と思わず、ずっと昔からの知り合いのように素敵な笑顔で迎えてくれます。日本の中でせわしく杓然と過ごしてきた私は、この国に来て、この国の幸せ・豊かさを感じとり、日本に閉じこもってはい決してわからない本当のバングラデシュを知りました。確かに、バングラデシュは、GDPや世銀の統計からすると“発展途上国”というくくりにはなっているけれど、私はここで生活してきて、“発展途上国”と感ずることはほとんどなくなりました。だって、会う人皆キラキラしているし、わりと教育も受けているし、自然との共存なんて日本など先進国が見習う点がいくつもあるほどだからです。文化・人間性・自然そのもの……この国の数え切れない豊かさは、自然からきているものなのかなと、今では考えています。あふれるほどのたくさんの緑に感謝して日々を生きている人々は、子どもも大人も男性も女性も関係なく幸せなはず。日本人は先進国の人間だけれども、経済面に突出して豊かになろうとしているような気がします。いったいどれくらいの人々が日々の生活に感謝して幸せを感じているのでしょうか？初対面の人の幸せを祈れるのでしょうか？（中略）バングラデシュに来て私の心は浄化され、前より人に感謝しようと思えたり、もっと関わりたいと思うようになりました。まだ、こんなに短い間しかこの国で過ごしていないのに、遙かに心が豊かになり成長できました。

	私はこの体験をたくさんの人に伝えたいし、多くの人にバングラデシュを、途上国を、現場に行き知ってもらいたいと考えています。そして、お互いに協力し合って、さまざまな豊さを共有して高め合っていけたらいいな、と思います。
⑤	「バングラデシュの豊かさ」 バングラデシュに来て2週間、いろいろな人と出会って、いろいろなことを体感して、今は、帰りたくないという気持ちでいっぱいです。その背景にあるのは、バングラデシュの豊かな自然・文化・人々です。（中略）人の心はどんなに豊かだろうと期待してこの国に来ましたが、実際に生活してみて思うのは、豊かなのは人の心だけでなく、美しくて壮大な自然そのものや素晴らしい伝統文化など、その他、たくさんのものであるということです。人は優しいだろうけど、教育問題や設備の問題はまだ未開発で人々は大変な思いをしているのだと考えていました。けれど、今、振り返ってみると、この地で暮らす人々は、ここにあるものを最大限に活用して、今の生活を愛しているように感じました。何かを必死に追い求めるのではなく、存在するもので生活し、幸せを感じとる豊かさ。経済発展をひたすら続けようとする今の日本が忘れてしまった、世銀の数字では表せない豊かさをバングラデシュは持っています、（中略）私が印象に残っているのが、「幸せですか？」という質問に対して「もちろん幸せです。だから私達はあなた達の幸せも祈っています。」という村の人たちの答えです。それから「生まれたところは天国だ」という言葉も忘れられません。一体この考えはどこから来るのだろう、と以前の私なら考えたことでしょう。ですが、今は、バングラデシュにある豊かな豊かな自然が、人々の心を豊かにして、多種多様な豊かな文化を生んだのだと、自分なりに考えます。（後略）
東からのコメント	素直にバングラデシュの豊かさを感じとっていますね。自分なりの「幸せですか？」という問いを持ちながら現地の人々接していた姿は良く覚えてます。また、自分が感じとったことを、多くの人に伝えたいという意志もすばらしい。帰りの飛行機の中で、このバングラデシュ研修は来年もありますか？と聞いてくださったのは嬉しかったですね。自分の五感を使って一人でも多くの後輩に体感してほしいというARさんの気持ちが伝わってきました。（また、行きましょう。）

HIRONO Azuma

● M・Y（国際交流学科 1 年）

日程	内容
①	私がバングラデシュのスタディーツアーに参加したいと思った理由は、バングラデシュに単身で渡ってフェアトレードの会社を設立した起業家の山口絵理子さんの本を読み、バングラデシュという国に興味を持ったからです。私は、今、日本語教員の資格取得を目指しているのですが、今回のフィールドワークでたくさんの異文化体験をして、日本語教育の授業や国際交流学部の特設科目の授業選択に上手く活かせることができればよいなと思っています。また、この授業をきっかけに、自分の学びの方向性が少しでも定まれば、良いなと思っています。今日、バングラデシュの写真や説明を見て、ますます興味を持ちました。
②	本やインターネットなどでは得られないものを、現地でこの目で感じる。発見する。
③	残りの大学生活に向けての方向性。これから自分は何をしたいか、どうになりたいか、何をすべきかが見つければ・・・。（積極的）、周りから何を言われても、私はこれをやる！という意志を持てるようになりたい。
④	私は、初めは、ショミティとマイクロクレジットが主な興味の対象だったのですが、それらだけではなく、「本当の支援とは何か?」「本当の豊かさとは何か?」「人々の生活向上のために必要な事は何か?」、NGO だけでなく、(UBINIG など) いろいろな支援のカタチがあることも知れました。(中略) 旅の途中で出会った親切な警察官など、いろいろな人の優しさにも触れ、「ありがとう (ドンノバット)」だけでは言い表せない感謝の気持ちを様々な場面で抱きました。バングラデシュの人々の気持ちの根底には、「自分のことよりも、他者を思いやる気持ち」があって、自分本位ではなく、他人本位の生き方にとっても感銘を受けました。PAPRI 代表のバセットさん、UBINIG のシャミンさんなど、知識のある人たちが知識のない人達に、知識を共有して、生活向上と同時に、文化や伝統を守る。これも他人本位の生き方だと感じた。農村に行くと、五感をフルに使って自然を感じたことで、バングラデシュがなぜ、文化や表現、言葉が美しく豊かなのかを、自然の豊かさから表れていることを実感した。本当の豊さ、精神的な豊さは、数字では表せない。統計になることもない。シャミンさんのように知識のある人達が知識の無い人達のために知恵を出し合って頑張っている姿を見て、外国の援助は必要がないのではないかとも思った。(後略)

- ⑤ 「豊かさ・・・」
- タンガイル県のムハマッドプール村やジョソールのサティアントラ村などを訪れて、自然・文化・人が基盤となり、目に見えない豊さを生んでいることがわかった。自然では、青々とした空、果物のなる木々が生き茂っていて、暑くても澄んだ空気、夜は停電で生活は不便にはなるが、星空のきれいさや月明かりの明るさを通して、自然の豊さを感じた。文化の面では、識字率が低くても口承伝承によって、美しい音楽、文学、デザインなど、民衆芸術が豊かである。また、独立運動の時に、ベンガル語を守ったこともあり、自分たちの母国語を大切にしていると感じた。(中略) 自然と文化（服やリキシャアートなど）を見ていて、色彩も豊かに感じた。人々に関しては、他人という概念がなく、「みんな一緒」という概念を持っているということもあり、いつもみんなの幸せを考えているからこそ、バングラデシュの人々は、優しさ、温かさ、笑顔がにじみ出ているのだとうと、感じた。例えば、村を訪問して、村人が別れ際に、私たちに「あなたたちの幸せもいつもお祈りしています。」という言葉が美しく、とても印象に残っている。笑顔だけでなく、言葉の表現の美しさ、言葉のパワーも感じた。(中略) ヒンズー教徒とイスラム教徒が共存する村では、互を尊敬し、傷つくようなことを言わないなど、努力によって信頼関係が築かれていた。以上の事から、目に見えない豊かさというものを、この研修では体験することができた。だが、これは農村において言えることで、首都ダッカという都会には豊かさがあるだろうか？(中略) また、「土地なし農民」は、ダッカに出て稼ぐしかない。そう言った人々は、路上などで生活を営むしなく、物質的にも非物質的にもゆとりがないと思う。でも、私は、ストリートチルドレンやスラム街に住んでいる人々の、一生懸命生きている姿・笑顔を忘れられない。

東から とても熱心に、ショミティやマイクロクレジットについてメモを取りながら研究していました。でも、後半は、人々との触れ合いを味わうようになり、文化や人々の人間性に近づいている姿がコメント 印象的でした。

最後は⑤にあるように、今回出会った人々以外の境遇にあるバングラデシュの人々にも想いを馳せる想像力があり、感心しました。

● M・M（国際交流学科 1 年）

日程	内容
①	（1 回目の講義は欠席→香港で書いた動機を再録）自分の人生で生きていく上で、絶対に行くことがないと思ったから。すごく危ない国のイメージがあったから、行こうなんて思わなかった。むしろ、バングラデシュについて考えたこともなかった。それが、授業でたまたま行ける機会が巡ってきたので、良いチャンスだと思って参加した。
②	女性の結婚・ストリートチルドレンの生き方・女性の娯楽
③	本当にどんな国なのか、どんな人々がどのようにして生活しているのかが気になる。自分達のように、先進国でとても文化的な生活をしているのに、たまに不便だなと感じることはあるのに、バングラデシュの人達は昔からの伝統を守って、科学（技術）に頼らずに生活している知恵や方法を知りたい。授業でふれた、今のバングラデシュの女性たちの生き方にもすごく興味はある。どこの国でも女は強いけど、私たち先進国とは違った強さが見られそう。
④	イメージがガラッと変わった。むしろ来る前のイメージ忘れた。こっちに来てからのインパクトは強すぎて、一番の思い出はやっぱり“笑顔”本当どこ行っても、笑顔とおもてなしをうけないところはない。逆に、ずっと昔から友達だったような対応をうける。すごく、人の心の広さと、キレイさ、優しさ、思いやりを感じる。ストリートチルドレンのような過酷な環境にいる人たちでさえ、最高の笑顔を私たちに向けてくれる。一般の人の笑顔は「癒し」、ストリートチルドレンの笑顔は「感動」だ。（中略）今まで、自分はどれだけバングラデシュという国のイメージが悪かったのだろう。貧困・ストチル・不便・戦争・・・等のマイナスなイメージしかなかった。それが、実はこんなに笑顔と優しさ、思いやりにあふれている国だなんて、ほんの少しも！！全く！思わなかった。やっぱり、現地に実際に行って見て、五感を使わなければわからないことがたくさんある。すごく良い体験になった。（中略）人々の温かさも、村ではまだ、昔のおうにずっと古い歴史のある生活の知恵を使って暮らしていることも、すごく尊敬できる。学ぶことがいくつ学んでも学びきれない。これからどんどん進んでいく国の 1 つであるけれども、村での生活ぶりなど、ずっと存続してもらいたいところもたくさんある。そこは忘れないでほしい。心は今のままで、もっと幸せになってほしい。

⑤	「目に見えなくても行動できる心の豊かさ」 何をするにも、自分の利益やイメージアップなど、全く考えずに、相手のために相手の幸せのために行動できる人たちの国。これは途上国だからこそ、まだ残っている人の根本だと思う。先進国とされている今の日本やアメリカも、昔はこのようなことができていたんじゃないか。経済的、世間からの自分の地位的欲求から、このあたりまえの行動ができなくなってしまったのではな ^ら 愛して m いかと思う。先進国のように、物資・経済・生活が満たされてしまうと、また新しい次の目的に、 また新しいものに、、、、どんどん欲が高まって、一番根本的な大切なものを失ってしまったという感じ。それに対して、この国は、大事なことをしっかり保ちながら成長している。これから先はそのような成長の仕方をするかわからないけれど、今の、バングラデシュは、優しさ、おもいやり、笑顔、幸せにつつまれながら成長していると思う。 日本人も世界に比べれば、わりと他人に気遣いができる人種だと思う。でも、この国の人は、気遣いの中に思いやりがすごく強くある。おもてなしの心。いつも自分がしてほしい、してあげたいという思う事の一步先あたり前のようにしてくれる。（中略：JABA tour の事務所でお昼ご飯の提供を受けた具体例）こんな風に相手を思いやる気持ちが言葉と行動で表現できて、行動できることは、人してとてもステキだと思った。こーゆーところが先進国の人間が学ぶところだと思う。先進国は途上国に対して、国の成長、途上国は先進国に対して、人の成長、お互いに学びあえたら良いと思う。
東からのコメント	4 日目夜のバスの中の「ふりかえり」では、あなたは、自分が小心者だから、これまで、やりた ^い 職業に一步踏み出すのを恐れてきたと言って、泣いていましたね。ストリートチルドレンに出会い交流した事をきっかけに、背中を押され、踏み出せるかもしれない、とも。。。。それからフェリス大生という“看板”も重たく感じていたかもしれませんが。私は引率者として感じるのですが、一人一人の学生は、それぞれにかけがえのない可能性に満ち溢れていると思っています。人間的成長、バングラデシュから見習ったあなたなら、踏み出してください。

HIRONO Azuma

変容がめざましかった学生も、そうでない学生もいる。当初のテーマから大きく変わった学生もいれば、テーマを堅持した学生も居る。変容すればいいというものでもないし、テーマが変わった学生がめざましい成長をしたとも言えない。

ただ、おもしろいのは、SMさんは、変わることをポジティブにとらえ、自分からどんどん自己開示をしていったことだ。ジョソール県に向かうフェリー乗り場で、チャイ屋のおじさんと警官に親切におもてなしをされた時、風邪でちょうど声が上手く出なかったこともあり、うれしさとお礼が言えない悔しさで、自然と大粒の涙を流していた。写真撮影では、ひょうきんな面を見せたり、研修の最後の2日間は、帰りたくない気持ちのやり場に困って、ふてくされたりする面を見せたりしていたが、それでも、出会う人出会う人の人間を鋭く見ていた。また、ダッカ大学的女子学生とのワークショップでは、発表係になり、堂々と日本語で発表をしていた。その姿は、好奇心の塊のような熱意が感じられた。

一方、MMさんは、軽い子に見られがちな振る舞いをしているにも関わらず、最初は猫をかぶったように、おそろおそろ現場に近づいていった。ストリート・チルドレンの笑顔に感動しながらも、日本でDVを受けている子どもへの支援を仕事にすることにはついては、まだ臆病だと言っていた。しかし、バングラデシュのすば

らしさを知るにつけ、徐々に自分から周囲のバングラデシュ人に声を掛けていった。まずは、運転手のココンさんに。私に「運転上手だね。」ってベンガル語でどういうんですかと尋ね、私が簡単な表現を伝え、積極的に話しかけていた。最終日に、アラムのご自宅でお昼をご馳走になった時など、アラムさんの幼稚園に入園したばかりの次男のLiboを本当に可愛がった。最後のJABA tourの事務所では、WEBとPC担当の若手スタッフと懇意にしていた。ダッカ国際空港の航空会社のカウンターでは、「先生、フェリス生ってどうですか？」といきなり聞いて来るので、「一口にフェリス生と言っていい時と悪い時がある。あなたは、あなたという人間でしょ。」と返答したことを私は忘れない。この学生は今後も変化し続けるような気がしている。

紙面の都合もあり、全員について詳しく書く事はできないが、TLと、ARはそれぞれの、持ち味を活かしながら安定的に成長していくものと思われる。途上国について非常に関心をもってくれた事と、全身五感を使って現場で学んでくれたので、これからは、バングラデシュのすばらしさについて発信もしていつくれるだろう。リーダーを務めた、MSは、自分の悩みを解決したようであった。そういう意味では、今回の研修は、人生の節目の旅となったと言える。私の恩師と言われる人が、私のワークショップに参加し「ふりかえり」で贈ってくれ

た言葉は、「若者よ、恋せよ！旅せよ！人と世界に関わろう！」という言葉だが、それをMSにも贈りたいと思う。

サプリーダーを務めた、MYは、真面目で勤勉タイプである。しっかりとした課題レポートを提出してくれたように、今後も勉学一本に励むと思われる。バングラデシュの旅で、人間味あふれる現地の人々との触れ合いを通じて、彼女も人間性の幅を広げてくれたことと思う。

いずれにせよ、学びは学生本人のものであり、教員たる私は、その支援者にすぎない。

しかし、それにしても、現場の力というものは大きい。特に、実際の人物に会うことは、学生に大きな影響を与えたようだ。今回は特に、UBINIGのシャミンさんと、JABA tourのアラムさんが、バングラデシュ人の質のよい面を見せてくれたし、ショミティでもキシリでも、現場の女性たちは、生きることに一生懸命で、その真っ直ぐな姿勢を学生に示してくれた。

学生は、まだ、19才や20才と、若い。今後の可能性に大いに期待したい。

(7) 最期に —「目に見えない豊かさ」と私たち

私は、今回の研修のプログラムを組むにあたって、



UBINIG のシャミンさんの予定は半年前からお願いし、かつ、絶対に、彼の自宅のあるダッカ市内ではなく、タンガイル県の村の自然の中で、UBINIG がコンセプト通りに建てた素晴らしいゲストハウスで、学生に会って欲しかったという強い希望を私はもっていたが、それは功を奏したと言えよう。

シャミンさんの佇まいそのものが、学びの素材だったと言うと、彼に怒られるであろうか？

JABA tour のアラムさんに対しても、感謝の言葉が尽きない。バングラデシュの素晴らしさ、特に、他者のために祈る心と寛容さ、そしてイスラム教徒でありながら、やはりアジア人だ、自然崇拜の心も持っているバングラデシュの人々の稀有な人間性に、私は今回も感動した。シャミンさんの言葉を借りれば、「目に見えない豊かさ」を日本人に伝えていくことについては、私とアラムさんは「盟友」である。

今回も、種は蒔かれた。学生一人ひとりが大きな花を咲かせるのを楽しみにしたい。

最期になってしまったが、このスタディー・ツアーをサポートしてくださった全ての方々に感謝したい。特に、学科長の諸橋泰樹先生には、政治デモ・ホッタールの発生でご心配をおかけした。海外交流課のスタッフの皆さんは、諸々全てバックアップしてくださった。

風の旅行社の原さんにも、見守っていただいた。

御礼申し上げます。

<付記>

今回の研修期間中に、3 回の「ホッタール（ハルタル）」に遭遇した。野党が仕掛ける政治的なデモ・ストライキを言うが、デモを規制するために交通の遮断がおり、被害を避けて大通りの店が閉まってしまうという事態になる。外国人には外出を自粛するような勧告が大使館から出され、現地の人々も、被害に巻き込まれるのを恐れ外出しない。

しかも、今回は、野党の国会議員を務めた人が絞首刑になることが決まった事により起こったホッタールだったので、全国規模のデモでは、犠牲になった人（＝死亡者）は 70 人を超えた。その影響もあり、ダッカ市の南部には行けない事態になり、ストリートチルドレンのプロジェクトとオールドダッカ、ダッカ大学については、旅程を大幅に変更する必要も生じたが、現地旅行会社 JABA tour の努力で、内容の 95% は消化することができた。ダッカ大学の Dr. Delwar Hossain 先生にお会いできなかったのは残念だったが、次回お会いできることを期待したい。

HIRONO Azuma



新聞記事 2013/2/29 英語版



2013/2/29 ৳ংগল ৳রু৳

バングラデシュとの出会い

月谷梨沙 文学部コミュニケーション学科 2年

バングラデシュに対するイメージ

日本に住む人々は、バングラデシュに対してどういったイメージを抱いているのだろうか。発展途上国？最貧困国？それとも、日本と国旗が似ている？多くの人がきつと、小学校の社会で習うような世界中の誰が見ても明白な数値的な事実しか知らないだろう。実際、わたしも先生にバングラデシュの写真を見せてもらうまでは、そういったイメージしか抱いていなかった。

バングラデシュを訪れてみたいと思ったきっかけ

わたしが、まず初めにバングラデシュの何に感動したかという、刺繍や民族衣装など、女性に関わるものだった。一目で手先が器用だとうかがえる細かい刺繍や、色鮮やかで独特な民族衣装の芸術性にわたしは関心を抱いた。そうして女性をクローズアップしてみたときに、イスラム教徒の多いバングラデシュでは女性があまり積極的に社会に出てきていないことを知った。では、バングラデシュの女性は現地で何をしているのだろうか？そう疑問に思い、実際に行ってみて、自分の目で見てきて、何かを感じてこようと思った。

バングラデシュの第一印象

2月17日、成田からキャセパシフィック航空の飛行機に乗り、トランジットで香港により香港からドラゴン航空の飛行機に乗ってダッカに着いた。空港に降り立った瞬間に思ったことを正直に述べると、「あまりきれいじゃないな」といった感じだった。日本よりも湿気があり蚊が信じられないほどたくさん飛んでいて、バングラデシュに着いた瞬間、身体中がかゆくなった。おまけに「この子達は何人なんだ？」というような遠慮のない視線を浴びて、なんだかすごいところに来てしまったな、という気持ちになった。JABA ツアーのかたがたにホテルまで車を走らせてもらっている間は、社会の教科書で見たような、テレビのドキュメンタリーで見たような、「渋滞」を目の当たりにした。隣の車との距離は約30センチメートルでクラクションが鳴り止まない。緑色のタクシーやリキシャなど、全てが初めて見るもので驚きの連続だった。いまだにこういうものが走っている国があったのか、と行って見て初めて思った。

縫製工場で出会った女性たち

まず最初にわたしたちが出会った女性たちは、縫製工場で働く女性たちだった。無機質なコンクリートでできた入り口の狭い建物のなかに、ワンフロア100人ぐら



いの女性たちがいた。見た目は若く、わたしたちと同世代ぐらいの女の子も何人もいるようだった。その女性たちが流れ作業で何枚も同じ洋服を作っていた。わたしたちに興味を示すものの、話しかけてきたり笑顔を向けてくる子は少なく、黙々と作業に取り組んでいて、少し居心地が悪かった。普段わたしたちが買っている洋服はこうやって作られているのか、こういうところで、こういう女の子たちが作っているのか、という事実を見て思ったことは、ここにいる女の子たちは自分たちが作った洋服が先進国でどのように売られているのか、どういった人たちが着ているのか、知っているのだろうか、または、想像したことがあるのだろうか、ということだった。わたしたちが洋服が作られる過程を知らないのと同様に、彼女たちも作った洋服の行くへを知らないのか、と考えると先進国が途上国を従えているように感じられて少し



悲しくなった。縫製工場にいた女性のほとんどが村から来ていて約9割は結婚していると聞いて驚いた。しかし、女性に対する配慮もされているようで、女性は朝家事を終えてからの遅めの出勤と、夕方家事をするための早退が認められていた。ここで初めて、女性の人権が認められていることを知ることができて、わたしは嬉しかった。

サロワ・カミューズを着る

イスラム教の女性たちは、男性に身体ラインを見せたくない。そのため、バングラデシュなどのイスラム教圏にはサロワ・カミューズという民族衣装がある。ワンピースとボトム、それにオルナというショールを合わせて胸のふくらみと腰のくびれを隠す。わたしたちはダッカ市内の「アーロン」「クムデニ」「ジャットラ」の3軒により、それぞれお気に入りのサロワカミューズを



選んだ。刺繍が凝っていたり、ビーズやスパンコールがあしらわれているものは高かったが、本当に繊細できれいだった。実際にサロワ・カミューズを着ると、雰囲気が出てわくわくした。しかし、身体ラインが出ないので、体型に意識が向かず、油断してしまうというデメリットもあった。

スラム街を歩く

バングラデシュに着いて2日目、わたしたちは線路沿いにひろがるスラム街を訪れた。わたしは、スラム街は治安が悪く、柄の悪い人や貧困で飢えている人ばかりがいると思っていたので、訪れるのがとても怖かった。スラム街でもそこに住む人々からたくさんの注目を浴びた。いったいこの人たちはわたしたちのことをどういう目で見ているのだろう、と不安に思った。しかし、スラ



ム街はわたしが思っていたほど怖いところではなかった。愛想よく話しかけてくる若者がいたり、写真を撮らせてくれる人がいたり、売っているものを快く見せてくれる人がいたり、元気な子どもがいたりした。わたしたちの質問に答えてくれる人の話を聴いていたら、これも生活なんだと、かわいそうなような悲しいような、それでも生きているんだと、力強さも感じるような、複雑な心境になった。しかし、スラム街で笑顔を見れると思っていなかったのも、子どもたちや女性の笑顔がここでも見られてわたしは少し安心した。

キシュリの少女たちとの出会い

バングラデシュに行く前、わたしがいちばん会うことを楽しみにしていたのが、キシュリの少女グループだった。彼女たちはわたしたちと同世代であるため、普段ど



んな気持ちで生活していて、将来の夢はどんななのだろう、とお話を聴くのを楽しみにしていた。3日目の午後、ノルシンディー県の地元 NGO「PAPRI（パプリ）」を訪れてバセットさんのレクチャーを受けた後、村を訪れてキシュリの活動を見学した。そのとき、女の子たちがとても元気で、はっきりと意見を述べていて、しっかりとしていると感じた。同世代ではあるけれど、ほっとした。意思があって意欲的だったからだ。キシュリの少女グループの前で、わたしたちは始めてベンガル語で自己紹介をした。紙を見ているのに緊張して足が震えた。しかし、彼女たちは一生懸命わたしたちのつたないベンガル語を聞き取ってくれて、反応を示してくれた。嬉しくてわたしの緊張は解けた。コミュニケーションをとるときに、わたしは「将来の夢はなんですか。」と質問した。その答えはわたしにとっては意外で、「先生」「医者」「看護師」



「弁護士」など、一生懸命勉強をしてこそなれる立派なものばかりだった。もっと控えめだったり、専業主婦だったりするものと勝手に思っていた。全員の夢を聞いた後、自然と拍手してしまった。わたしも自分の夢に向かってがんばろう、と強く思った。全員で写真を撮るときに、わたしたちは初めて近くで触れ合ったり、コミュニケーションをとったりした。言葉はまったく通じないけれど、笑顔と握手で一瞬で彼女たちと距離が縮まったような気がして彼女たちが好きになった。まだ一緒にいたいと思えて嬉しかった。思えばこのときから、バングラデシュの人々のあたたかさを何度も感じたのだった。

アミヌプール・ベリン・モヒラ・ショミティの女性たちとの出会い

キシュリの少女グループに会った次の日は、ショミティ



を見学して、ショミティをやっている大人の女性たちに会った。30～40代中心で子どもがいる人も多かった。彼女たちは、マイクロクレジットという、銀行からお金を借りることができない貧困層の人たちのための小規模無担保融資を利用している。そうして、お金を借りて事業をおこし、その事業で得られた利益でローンを返したり、貯金をしたりする。彼女たちは借りたお金を何に使っているのかを教えてくれた。牛を買ったり、リキシャを買ったり、お店をひらいたり、用途はそれぞれだった。女性たちはみなはっきりと質問に答えてくれて、そこからは楽しさや誇りが感じられた。また、得られた利益や貯金を何に使っているか質問すると、全員が家族のために使っているとのことだった。例えば、子どもの教育のため、夫の仕事の支援のためなどだった。わたしがお金に余裕ができて贅沢になったことはあるか、と質問しても、お金は全部家族のために

LISA Tsukitani

使っていて、それがわたしたちの幸せです、と返ってきた。ここで初めて、バングラデシュの人々の家族に対する思いやりが伺えた。わたしたちのように、稼いだお金を自分のために使っている人なんて、あまりいないのだ、とカルチャーショックをうけた。

ストリートチルドレンとの出会い

ノルシンディー県を離れたあと、わたしたちはストリートチルドレンに会いに、「オポロジエヨ・バングラデシュ」という NGO が運営する施設を訪れた。着いて早々トイレを借りているときに、数人の子どもたちとコミュニケーションをとった。名前は？年はいくつ？など簡単なやりとりだったが、子どもたちは活発で、人懐っこくて、笑顔がとてもかわいらしかった。その人懐っこさは、施設の方々の努力だったのだとドロップ・イン・センターのマネージャーアラムさんのお話を聞いてわかった。年齢を聞いたときは、少し小さいなあ、と感じた。そこがやはり恵まれている日本と、貧困国のバングラデシュとの栄養供給の差なのだと感じた。子どもたちはわたしたちに歌や踊りを披露してくれた。その後わたしたちからいくつか質問をした。そのとき衝撃だったのは、思い出を聞いたときに、親や大人にいじめられた悲しい思い出を挙げる子が何人かいたことだ。思い出と聞かれたら楽しいことしか浮かばないわたしは、平和ボケしているな、



と感じた。そういう傷を負いながらも彼らはしっかりしていて、心が強いなと思った。グループにわかれてコミュニケーションをとったときは、ベンガル語で話しかけても、返ってくるベンガル語が理解できなくて少しつらかった。それでも、一生懸命コミュニケーションをとろうとしてくれる子どもたちがすごくかわいかった。

UBINIG にてシャミンさんとの出会い

わたしがバングラデシュを訪れて、いちばん出会えてよかったと思ったのが、UBINIG の代表のシャミンさんだ。芸術家の彼が運営するゲストハウスはとてもおしゃれでオリエンタルな雰囲気があり、すごしやすかった。そういった芸術性の能力の高さにも惹かれたが、もっと感動したのは、彼の価値観だった。彼は UBINIG の活動についてわたしたちに様々なことを話してくれた。



そのなかで、わたしは「目に見える発展と目に見えない発展」という言葉に深く考えさせられた。人は名誉や他人の目を気にして、目に見える発展を追い求める。しかし、目に見える発展が必要なことは稀で、目に見えない発展こそ地域住民には必要なことなのだ、と聞いてわたしは、それは人の精神的な面についても言えると感じた。着飾ったり、地位を得たりする目に見える部分を人々は重視しすぎているのではないか、大切なのはココロの部分なのではないのか、と感じた。お話を聞いた次の日に村を訪れたら、目に見えない発展を重視した生活をする人々は幸せそうであり、また、人がよさそうだった。追い求めるものは精神的な面にも出てくるのだな、と思った。日本に帰ったら目に見えない部分を大切にするように心がけてみようと思われた。



タンガイル織りのサリーを着る

わたしはジョソール県に着いてから、サリーを着るのを楽しみにしていた。サリーは既婚女性が着るもので、7メートルほどの1枚の布である。サリーからは女性らしさが感じられてわたしは好きだった。それぞれお気に入りのサリーをバングラデシュのデザイナーから買い、着たわたしたちは村を一周散歩した。成人式で着物を着たときのように、少し大人の女性になった気分ですごく美しくなったような気持ちがあった。サリーを毎日着られるバングラデシュの女性がうらやましく感じた。しかし、人生に1度でもサリーを着ることができて本当によかった。

バングラデシュで触れた自然がわたしにもたらしたもの

バングラデシュでは、日本ではなかなか見ることがで



きないたくさんの方に自然に触れることができた。バングラデシュの人々の生活の基盤である自然は、ベンガル人のみならず、わたしたちの心も豊かにした。なぜそう感じたかということ、バングラデシュの人々は自然に対する感謝をよく述べていて、それは日本で聞くときれいごとのように聞こえるが、しかし、バングラデシュで「太陽がわたしたちを照らしてくれているのです」と聞くと、ああそうだな、太陽に感謝しなきゃな、というように素直に言葉を聞き入れることができるからだ。わたしたちのひねくれた心を自然が矯正してくれたように感じた。「あなたたちの幸せを願っているの、わたしたちの幸せを願っててください」というような言葉も素直に聞き入れることができたのは、バングラデシュの自然に囲まれていたからこそだと思う。バングラデシュには、ほとんどの日本人（または先進国の人々）が忘れてしまったこ



とがまだたくさん残っている。過剰な便利さがなくても人々は生きていけるんだということには、バングラデシュに来なければ気づかなかった。便利さを求めなくても、自然を活かせばこんなに誇れる生活ができるのだと気づかされた。自然にあふれたバングラデシュがとてもうらやましいと感じるが、わたしはもうすでに便利な日本で生活している。発展しきった国にいる。先進国に居る人々にこういった考えをよいものだと思わせることは不可能に近いが、古きよきものはたくさんあるのだと知らせることはできる。将来、たくさんの人々に古きよきものを知ってもらおう仕事や活動をしたいと思った。写真を見返して自然を思い出しては、そういった心も忘れないようにしようと思っている。バングラデシュは自然が豊かで、文化が豊かで、そういったものが人々の心を豊かにしている国だった。バングラデシュは豊かだった。

目に見えない発展

荒牧里佳 国際交流学部国際交流学科1年

「今、幸せですか」バングラデシュで私が一番聞いてみたかった質問だ。私は発展途上国と言われる国のひとつのあたたかさを知りたくて、自分の肌で感じたくてバングラデシュへと足を運んだ。この国のひとは自分自身の生活をどう思っているか、その答えを聞けば私の知りたいものが少しでも見えてくるのではないかと思ったのだ。そして、この質問に対して返ってきた言葉は予想以上だった。「幸せです」と即答すると同時に、「あなたたちの幸せも祈っています」と言ってくれたのだ。彼らは自分の幸せだけを考えているのではない。家族の幸せ、周りのひとの幸せ、苦しい生活を送っているひとの幸せ、そして初対面の私たちの幸せまでも願ってくれていたのだ。彼らは、他人のことも自分のことのように考えている。数値では決して表すことのできない、経済発展した日本が忘れてしまった豊かさを確かに持っている。

私は当初、途上国ひとたちは、心はとても優しいが、その一方で生活自体には少なからず問題を抱えて影を持って生きているのだろうと思っていた。その中でも教育に要を置き、ストリートチルドレンや村の子供たちの様子と教育問題を取り上げてレポートにしようと思っていた。しかし、実際にバングラデシュで生活するうちにこの国の素晴らしい面をたくさん知って豊かさと発展について考えるようになった。この感覚をできるだけ多くのひとに伝えたいと思い、テーマを少し変えて自分の考

えを深めていこうと思う。

14日間で強く感じたこと、それは、バングラデシュの豊かな自然とそれに育まれた寛容であたたかい人たち、そして彼らの「目に見えない発展」だ。まず、特に村にいて強く思ったことは、皆自然に感謝しながら存在するものを上手く利用して生活しているという点だ。首都を離れて村へ行くと、本当に空気がおおいしくて、青い空、広大な川、あふれるほどの緑が目前に広がっている。村に住む人たちはこれらの豊かな自然に囲まれて暮らしているのだ。一つ目の村・ノルシンディー県のアムラボ村では早朝と市場の近くで水と共に見える景色がどちらも印象深く残った。朝焼けは水に反射して輝いていたし、大きな橋と広い田んぼも心が癒されるものだった。驚いたのは、田んぼは乾季の今の季節だけで雨季には増水して全体が川になるということ。乾季と雨季で全く異なる表情を見せるのもバングラデシュの魅力の一つではないかと思う。

2泊したゲストハウスのあるタンガイル県ムハマッドプール村では地元研究機関であるUBINIG(ウビニック)が力を入れて支援している地域でもあり、伝統的な農業や文化を大切に、自然と共生しているひとたちの暮らしがよく見えた。UBINIGは開発の基準をその土地の人たちが幸せになるために本当に必要なものを支援するとしており、お金を使って支援する代わりに種を使って支

援を行っている。

“バングラデシュの豊かさを残しつつ、今の人が生活できるように”それがUBINIGの目標だそう。代表のシャミン氏によると、彼は社会主義を学び、その負の側面を知って今の開発に疑問を

抱いた。そこで農民など一般の人の力を底上げし、皆で幸せになれるようにと新しい方法を考えた結果、今に至ったそう。農民たちに知識を与え、また自分たちも農民から知識をもらって高めていくそう。その一つとして、農民たちが昔から行ってきた農業に新しい科学の力をプラスして無農薬農業を始めた。無農薬は安心安全で健康的。自然を最大限に利用した新しい農業の形である。また、seedbankという米や野菜の種の蔵をつくり、種の貸し借りをする制度を広めた。種を借りたひとはそれを育てて増やして返す。これを行うことで、人々は自分たちで野菜を作り、食べる分と売り物にする分を手に入れることができる。つまり、お金からお金をつくるのではなく、





自らアクションを起こしてお金をつくり、生活向上を図っているのだ。村のひとの家を周って見てみると、畑での野菜を育てる他、庭でパイヤやジャックフルーツを育てていた。土が肥えているため、自給自足プラスアルファで植物がたくさん育つのだそうだ。また、莢を干したものを牛のベッドに利用したり牛のフンを肥料にしたりしている様子も見られた。本当に何も無駄にすることなく、リサイクルが見事に成り立って生活ができてしまう。その様子を見たとき、自然を切り開いて経済発展を追い求めた都会の生活とは何なのだろう、と思ってしまった。人間が自然と共生して豊かに暮らす生活の原点がそこにあるような気がしたのだ。最後に行ったジョソール県サティアントラ村でフィールドワークを行ったときも、ほとんどの家で牛フンが干されているのを見た。これは燃



料や虫よけになるそうだ。その他ヤシの葉や竹の根を焚き付けに使っている様子やほうぎとして利用している様子も見られた。食料として、何かの材料として、というメインの使い道の後に残された、捨てられてしまいそうなもの。それらも無駄にせず、自然に返す。それが限られた家だけで行われている訳ではないということも、村のひとがあたりまえに捉えているということも、村を周ってればよく分かる。自然との共生がなぜこんなにも上手くいっているのかといえば、それは彼らがこの豊かな自然を愛し、感謝しているからではないだろうか。バングラデシュが持つこの素晴らしさや価値は、GDP や世界銀行などの物差しには載っていない。

次に、この国のひとたちだ。私はバングラデシュにいる間にたくさんの人と出会ったが、スラム街でも市場で



もそして村でも、皆少し照れながら、素晴らしい笑顔で私たちを迎え入れてくれた。初めは興味深そうに“外国人”である私たちを見ているのだが、こちらが笑顔になると笑顔で返してくれる。この国では、とにかく人と人との距離が近い。近いと言うか、繋がっているような気がした。最も印象に残ったのは、冒頭にも書いたが、幸せを祈ってもらったときだ。この質問は、ショミティという経済的にあまりゆとりのないひとたち同士が集まって小規模無担保融資を利用している女性の団体に聞いたのだが、皆自分が借りたお金や貯めたお金は家族のために使うと言っていた。自分自身の趣味や娯楽に使うと答えた人は一人もいなかった。「家族の幸せは自分の幸せ。子どもに教育を受けさせることができればそれは本当に嬉しいし、夫や子どものビジネスに役立つことも嬉しい」

RIKA Aramaki



何の躊躇もなくそう話す彼女たちを見て、繋がりや絆の強さを感じた。彼女たちにとって家族のためは自分のためでもある。だから決して自己犠牲的な考え方にはならないし、むしろ喜びであるかのようにだった。家族のために頑張る力は、無意識のうちに体の中から湧き出てくるのかもしれない。彼女たちはその生活を十分に愛し、幸せを感じ取る能力を持っている。心に余裕がある。だから私たちの幸せまでも願ってくれたのではないだろうか。

また、イスラム教とヒンズー教が共存する村・サティアントラ村でヒンズー教の代表の方に聞いた話も忘れない。「平和的なこの国が好きで、緑の多い、生まれ育ったこの村は天国だと思う」と言っていたのだ。彼は「宗教を自分の利益につなげようとするから問題になる。政治家が宗教を利用しようとするから戦争が起きる」とい



う考えを持っていて、非常に共感した。互いに理解するように認め合えば何の偏見もなくなる。世界で起きている宗教戦争の解決の糸口がここにあるのではないかと感じた。豊かな自然の中で当然のように二つの宗教が共存し、平和が保たれているこの村のひとたちは本当に寛大だ。過剰に利益を求めずに他を認め合う力を持つと、人々はこんなにも幸せに暮らせる、ということを実感させられた。ここでは泊過ごさせてもらったが、その大家族とも、私たちのインタビューに答えてくれたひとたちとも、通りすがりに手を振って笑顔を見せてくれたひとたちとも素晴らしい出会いをしたように感じる。昔からの伝統や歴史がある村だが、私たちのように突然現れた来客や新しく引っ越してくる人たちにも自然に馴染めるような優しい空気があるのだ。皆が互いに認め合い、心に



ゆとりを持ち、平和的に暮らしている。そして今の生活を愛している。私がバングラデシュのひとが寛容な心を持っていると強く感じたのは、宗教に関してだけではない。もちろん宗教に関しても、もめごとを好まないのもそうだが、他のものとの共生を大事にしている点にあると思う。その文字の通り、「寛大で、よくひとを許し、受け入れる」力を自然に身につけている。彼らの中には「他人」という概念がないようにも感じた。個人としてではなく、常に同じ家族、同じ村人、同じ人間として他者を感じながら皆と繋がりを持って生活している。私は、この根源には、やはり自然の力があるのではないかと考えた。豊かな自然に触れ、それに日々感謝しながら今を生きる。シャワーもなければ電気も十分ではない。先進国の文明の中で生きてきた私たちにとって、とても不便な場



所。しかしそこでの生活に豊かさを感じるのはなぜだろう。彼らの人柄や生き方が幸せであるように感じるからだろう。彼らに会えば、誰でもそんなことを思うのではないかと思う。

そして、バングラデシュでどうしても忘れられないひとの一人

に、最後の日に会ったストリートチルドレンがいる。4日目に行ったドロップインセンターという施設ではなく、船着き場で出会った少年だ。その船着場はオールダッカにある。立派な客船が停まっていて、いかにもお金持ちそうなひといた。しかしその一方でお金をするような子供もいた。私が一番話した少年は、小さな妹を抱いていた。どういう経緯で今の生活に至ったのかは分からないが、路上で暮らしているからには苦労があるだろう。それにもかかわらず、彼らは感じよく私たちの質問に答えてくれた。多少のお金は渡したけれど、それが目当てというほどでもなさそうだった。こんな状況なのに、どうしてそんなに綺麗に笑えるのだらうと思った。こんな状況においても、寛大であたたかい心を持って

いる。彼もやはり、この国の豊かな心を持っている。

バングラデシュは発展途上国、最貧国と言われているけれど、そんなことはないのではないだろうか。この国にはGDPや世界銀行、国連などのデータで測れない豊かさが本当にたくさんある。これは実際に現地に来てみないと分からないものだと思う。だから同じように、他の発展途上国、最貧国と言われる国も、言ってみれば私たちが想像しているほど貧しいわけではないのではないだろうか。私は心の豊かさを信じてバングラデシュへ来たが、生活自体も豊かだと思った。緑に囲まれていて自分たちでその素晴らしい環境を守って、その上で教育も行われている。経済の面で遅れているということだけでその国を貧しい国というのはおかしい。自然も文化も遥かに高い。私たちが出会ってきた女性だってしっかりと意思を持ち、素晴らしい文化や教養を備えていた。発展途上国というイメージが持つ印象を、この旅を通して全て変えられたような気がした。戦後の日本は、経済発展し、今もなお先進国として世界に存在感を示している。しかし、経済の利益を追い求めた日本は何かを忘れてしまったように感じる。それは身の回りの自然に感謝することであったり、周りと認めて合って生きることであったり、今自分が幸せと感じて更に誰かの幸せを願おうとすることだったりする。日本が忘れてしまった、ある種の豊かさをバングラデシュはまだ持っている。発展が悪いというわけではない。どういう形で発

展するのが重要なのだ。バングラデシュは今、目に見えない発展の道を進んでいる。経済的に豊かになるようにと人々にただお金を援助するのではなく、人々が本当に求めているものは何なのかを考える。幸せになるために本当に必要なものを援助し、発展を遂げさせることが重要だ。人々の心は私の想像以上に寛大であたたかくて豊かだった。村の人たちからはもちろん、ストリートチルドレンの笑顔から、このことは強く強く感じた。私はこのスタディーツアーを通して、発展とは何なのか考えさせられた。人々の健康のためにインフラ整備や衛生面の改善は必要であるし、縫製工場の成功や経済的な支援が必要な場合もあるだろう。私も人々の安全な暮らしのための発展はどんどんしてほしいと思っている。しかし、それらを行うことで今持っているあの寛大な心と今まで培ってきた自然に対する思いを決して忘れてほしくはない。発展したその先にあるものが人々の欲や個人の利益ではなく、笑顔とあたたかい心であることを期待する。



マイクロクレジットを通して見たこと

宮野有紀 国際交流学部国際交流学科1年

私が、マイクロクレジットに興味を持ったのは高校の公民の資料集や大学入試の英語の問題で、ムハマド・ユヌス氏のマイクロクレジットの記事を読んだときだった。本やインターネットの情報だけでは満足出来なく、実際に自分の目で、マイクロクレジットの活動を現地で見てみたいと思い、訪問を決意した。バングラデシュを訪問して、マイクロクレジットの活動の見学を通して感じたこと、考えさせられたことについて述べていく。バングラデシュを訪れ、NGO・PAPRI（パプリ）によるノルシンディー県ナラヤンプル村の「アミヌプール・ベリン・モヒラ・ショミティ」と、グラミン銀行によるジョソール県バガールバラックドラジ村の「ドラジャハット・ショミティ」のマイクロクレジット・ショミティ活動を見学することが出来た。



左ページに貯金 右ページに借金、返済状況が記録してある

まず、「ショミティ」とは、ベンガル語で「グループ」や「組合」といった意味を持ち、何かの目的があり、そのために作られたようなグループに対して使われる言葉だ。貧しい村人が5～20人前後集まってショミティを作り、ショミティを支援するNGOのオフィスからスタッフが来て、ショミティのメンバーはお金を借り、同時に貯金もする。「自分たちの生活は、自分たちでよくしていこう」というのが目的で、生活を良くするための努力をしていく。

どちらのショミティも、借金と貯金を同時に行っており、貯金が、収入がなくなったときの借金の返済資金に充てられ、生活のセーフティネットになっている。なかには、借金をせず、貯金だけ行う人もいた。

PAPRIのショミティでは、ショミティの活動と並行して成人識字プログラムもある。ショミティでは、誰が何タカ（現地通貨の単位）を返済、貯金し、いくらになっているのか、お金のトラブルにならないように帳簿をつけ、自分の名前をサインするのに、読み書きの出来る必要性がある。メンバーには、貧しくて学校に通えず読み書きができない人もいるからだ。識字プログラムに参加して、読み書きができるようになった人がインタビューした20人中6人いた。なかには、70歳近くの女性で数年前になってやっと文字を書くことができるようになったという人もいた。読み書きが出来るようになった



PAPRIのショミティ活動の様子

ことは、みな口々に嬉しいと話していた。同時に、ショミティを通して、教育の重要さも知ったそうだ。将来、学校の先生になりたい子どもを高校に通わせるために、授業料の支払いに5000タカをショミティで借りた人もいた。その子どもは、現在、成績優秀なため奨学金を得たので授業料を払う必要がなくなったという。

私が感じたことは、ショミティで活動している女性たちが、思っていたよりもとても活動的だったことだ。やはり、お金を借りることで、自分の力を生かせる、チャレンジが出来るという希望とやる気に満ち溢れている。ショミティに活動している女性は、母であり、家族の中心であり、家族の幸せを強く願い、家族を思っていることを感じた。彼女たちは、家計を助けたい、自分たちの生活をより良くしたいと思っている。女性の意志の強さ



グラミン銀行のスタッフ

グラミン銀行の通帳

を感じた。ショミティに入る人の動機には、貧しさから抜け出したい、自分の立場を変えたいという思いがある。借りたお金は、自分の病気の治療といった場合のように自分だけではなく、自分の子どもの教育資金、夫のビジネス資金のためといったことにも使っていて、家族のことを思っている。ここにも、フェリスの建学理念である「For Others」が生きていたと思った。また、ショミティは井戸端会議や学校のような場でもあり、情報交換、共有が行われており、人と人とのつながりが出来ていた。また、男性はショミティに参加できないため、女性の夫に対する発言力が強くなったそうだ。生活の余裕が出てきたため、夫婦ケンカも減ったそうだ。やはり、収入がないときや返済するときは、度々ケンカが起こるらしい。

どちらのショミティのメンバーも、ショミティから借金をして、土地を購入または借りて農業をしたり、牛を

購入したりして、何か新しい事業を起こして、収入を増やしている。能力はあるが、資金へのアクセスがなかった人たちにとっては、所得を大きく上げる可能性があるのだ。イスラム教徒の村のルティナさんも、「例えば、何か事業を起こしたくて3万タカ借りたくても、誰も貸してくれないので、とても役に立っている」と言っていた。ジョソール県のバガールバラックドラジ村では、マイクロクレジットをやる18年前までは衣服すら買えず、衣食住が満足に確保できなかったのに、マイクロクレジットのおかげで、今では家を建てられ、新しいビジネスが出来る余裕が出来た。

マイクロクレジットを借りてうまくいっている人は、元手となる資金さえあれば結構儲かるビジネスが出来る見込みのある商才のある人だから、順調に返済ができていないのではないかと思った。お金を借りても稼ぐ技術のない人や、お金の運用の仕方がわからない人たちにただお金を貸しても、それですぐ成功できるという保障はない。借りたお金をうまく使えるように稼ぐ技術を教えてあげる必要があると思った。マイクロローンとはいっても、ビジネスを自力で開拓してローンを上回る利益を上げることが出来ない貧困者にとっては、新たな足かせとなってしまう。グラミン銀行から借金している女性たちも、「ローンだから、借りたお金を利用しないとまわらない。」「事業ができるのは、ちゃんと事業が起こせ

る人に限る。」と言っていた。それは、バングラデシュに限らず、日本でも同じことだ。

また、貧しくてショミティに参加できない人は、グラミン銀行による無利子で5千タカを貸す制度により減ったとはいえども、ある程度の生活力がない人、最貧層をマイクロクレジットが取り残しているのではないのかという疑問がある。NGOやマイクロファイナンス機関は、最貧層を取り残さないように限界に挑戦しているのだろうか。最貧層の人たちは、結局、審査のない高利貸しにお金を借りるしかなく、返せなくなり、借金地獄に陥っているのではないか。何か別の方法での援助が必要かもしれないと思った。

バングラデシュには、グラミン銀行、BRAC、アシャを筆頭に多数のマイクロファイナンス機関がある。PAPRIのショミティには、PAPRIからだけでなくグラミン銀行のマイクロクレジットも利用している人、ノクシカタを作っている村の女性もジャゴロニとアシャと2つのマイクロクレジットを掛け持ちしている人がいた。片方から借りられないときは、もう片方から借りるそうだ。真面目に運用し、経済状態も良くなっているので、融資を受けられるそうだ。

多重債務などが増える、現在の貸し手に返さなくても、また別の機関から借りるということが起こることは、返済しないと将来の融資を安価で得られなくなることが返済

YUKI Miyano

の強いインセンティブになっているため、インセンティブが効かなくなり、返済率が下がり、利潤率も下がり、貧困層への支援がますます減る問題が発生するそうだ。対策としては、マイクロファイナンス機関の間で借り手の情報が共有され、デフォルトした顧客が他の機関からも借りることができないようなシステム作りが求められている。

タンガイル県の研究機関 UBINIG（ウビニック）の活動を見学して、マイクロクレジットをせずに、無農業農業や織物といったその土地の伝統と自然、風土を生かし、村民の技術向上開発に努めるという第3の開発により、行動を起こしお金を生み出すという道もあるということを知った。これは、地球環境にも優しいし、有機野菜を食べる人の健康にもつながるのと、資本主義経済の後を追うやりかたとも違う、スローライフのひとつでもあるし、新たな発見だった。

UBINIG 代表のシャミン氏は、マイクロクレジットについて「お金を追うものになっているのではないか？」という懸念を持っていた。マイクロクレジットは、借り手である貧困層の地域の未開発の土地利用を促進、顧客の消費欲を向上させるメリットがある。消費欲が向上することは、あれが欲しい、これが欲しいと物欲にとらわれ、欲しいモノのために借金をし、借金の連鎖にはまるのではないかとも思う。

マイクロクレジットなどを通して、私は、本当の支

援・援助とは何かについても考えさせられた。外部からの進んだ技術や資金を投入する技術型、サービス提供型では、支援者が主導権を握ってしまう。ムハマド・ユヌス氏も「橋や道路など社会資本も必要ではあるが、貧困層が建設事業に参加できないと自活につながらない」と指摘。UBINIG 代表のシャミン氏は、農民が長く自活、手に職をつけられるようになるために、ダムや学校建設といったインフラ整備の第一の開発ではなく、何か別の開発はないかと模索し、村人に農業や機織りの技術を身に付けさせる開発に着目した。農民、機織り職人、村人の技術、定職が UBINIG の自信になっているそうだ。シャミン氏は、彼らの力、可能性を信じていた。

ユヌス氏は「先進国の援助は自分たちの利益をまず考える。」と批判し、「現地の状況を良く調べ、貧困脱却のために最も必要なものを探し出すべき」と発言。NGO・PAPRI 代表の BASET 氏も、「日本の NGO は、地方のことや政府との関係など現地の事情や問題を全部はわかっていない。」と指摘していた。現場では、NGO の資金（ファンド）と支援方法（テクニック）のねじれ現象も起こっている。支援を必要としている者や現場のニーズをどうわかっていないのか調査して、日本に帰ってから発表の場があったら、援助の在り方も、もっと違ってくるだろう。

このローカルの問題に関して、インターネットを通し

て誰にでもわかる問題と日本全体で理解出来る問題、インターナショナルでは理解できない問題がある。時間が経てから、現場に入ってから、わかることもある。このことは、日本の「3・11」を例に取るとよくわかるが、東京と被災地では被災地の問題の理解力に隔たりがあることと共通している。福島の人が抱えている問題も、福島の人にしか、わからないこともある。でも、現場に実際に足を踏み入れ、現地の人に耳を傾け、本当に必要しているものは何かと常に問い続けなければ、本当の意味での支援にならないのだ。現場主義の大切さを実感した。

PAPRI がユニセフといった大きな団体とは違い、日本の国際協力 NGO 「シャプラニール＝市民による海外協力の会」をととても信頼しているのには、Emotion があるからだそうだ。愛情や憎しみを持って互いにパートナーとして活動しているからこそ、言いたいことが言える。時にはぶつかることもある。相手の存在、相手との自分の関係、またその関係をどうしたいかによって、しっかり相手との距離を縮めたり、接触を試みたりと自己開示をしながら活動しているからこそ、深い関係が出来、パートナーとして発展している。日本人の言っていることには本音と建て前というがあるので、これが現地の人との軋轢になるときがあるそうだ。私も、確かにこれは現地の人とはとても戸惑うものだろうと思った。よく日本人は、外国人に何を考えているのか分からないと指摘



アサの通帳を持つ女性

される。誤解を生まないためには、コミュニケーションにも注意が必要だと感じた。異文化理解の重要性を感じる。一方通行ではなく、相互作用により、相手をよく知り、考えていることを伝えることの重要性を知った。

本来、NGO は政府の意向やドナーの資金提供に惑わされることなく、人々のニーズに基づいた自立した活動に努めるべきであるのに、中には資金調達のためや政府の目を気にして本来のプロジェクトが出来ていない団体もある。

NGO・PAPRI 代表の BASET 氏は、ドナーのためでもなく、NGO のためでもなく、地元の人のために活動することこそを心掛けていた。政府やドナーにはわかりにくいのが、地元の人にはわかりやすく、フィールドとの関係を忘れず、ローカルの立場に立って活動している。

でも、いつドナーからのお金が来なくなるのかという不安や政府とうまくいかなってしまう不安はある。

一方、UBINIG は、NGO として登録すると政府の牽制にあうので、あえて Company として登録して活動しているという。

現地の人に主導権を持たせた、参加型開発の形で日本の国際協力 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」は支援をしている。参加型開発とは、支援する側は最初から資金や物資を提供するのではなく、現地の人々が自分たちの持つ資源や課題を自ら明確にし、発見し、解決のためにプロジェクトを行えるように側面から支援することだ。「シャプラニール」は、いくつかのプロジェクト（例えばノルシンディーでのショミティ活動、ダッカのストリートチルドレンの活動）に関して、自分たちの支援にいつまでも頼ることがないように撤退して、地元の NGO、地域の人による支援に任せて、自立の段階へと入っていることも、この目で確認出来た。

1988 年にバングラデシュで洪水が発生し、UBINIG の代表、シャミン氏はどのように農民を支援しようか、模索していた。現地を訪れると、農民は「援助よりも種を下さい。」と言った。そこから、農作物の在来種の保存、管理、研究が始まり、“新しい農業運動”無農薬作物の栽培、販売が始まったのだった。無農薬作物は、環境や健康にも良く、高く買ってもらい、村人の生活も向上す

るというフェアトレードのような素晴らしいネットワークが出来ていたのだった。

PAPRI 代表 BASET 氏のお話を聞いて、シャプラニールの担当者が概ね 3 年で交代することにより、進行中のプログラムに支障が出ていることも問題だと私は感じた。担当者が代わることにより、プロジェクトについて一から説明し、引き継ぎがうまくいかないとプロジェクトの色やイメージが変わってしまう。また、新たに信頼関係を作る必要があり、地元の NGO や人にとっては、大変な労力と時間とストレスがかかり、無駄に感じた。3 年で担当者が交代することは致し方のないことかもしれないが、プロジェクトの引き継ぎをしっかりとする必要を感じた。そうでないと、あまりにももったいない。

これは、全体に言えることだが、一時的な援助ではなく、自立を促すための援助をするには、老子の「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」言葉がとても鍵になっていると思う。魚を与えたとしても、その人を一時的にしか満足させることしかできない。道具を貸して、魚の釣り方を教え、その人が釣り方を覚えれば道具が壊れるまで魚を食べ続けることが出来る。さらに、釣り道具の作り方も習得できれば、一生困ることがないという意味だ。マイクロクレジットでは、無茶な投資を防止するのと、借りたお金をうまく運用できるように、運用の仕方、稼ぐ技術を教えてあげる必要がある。UBINIG

YUKI Miyano

が行っている活動の機織りの技術、農作技術、ポップライスの製造技術の育成、向上は、この言葉と通じているように感じた。

今回、私たちが訪れた村は、本当は NGO の活動が集中している比較的裕福な地域だったのではという疑いを、私は持った。出会った農村の人々は、マイクロクレジットなどにより土地を借りる、または購入して、最低限の衣食住が確保出来ているからゆとりがあるが、マイクロクレジットの審査を通過できなかった最貧層の人、土地なし農民といった人々は、現金収入を求めてダッカなどの都会に出るしかない。ダッカのスラム街や路上生活者を実際に目にして、農村の支援だけではなく、都会の貧困層の支援の強化の重要性も感じた。

バングラデシュといった発展途上国では、年金や保険等の政府によるセーフティネットがないことにより、家族の絆が強く、助け合って暮らしている。バングラデシュでも、家族が多いため小さい子の面倒を母親だけではなく、おばあちゃんや子どもがしていた姿をよく目にした。しかし、身寄りのない人たち（特にお年寄り）はどうやって暮らしているのだろうかと新たに疑問に思った。

BASET 氏やシャミン氏のレクチャーを受けて、貧しい人や農民と知識を共有して、より良く発展していこうと頑張る姿にとっても感銘を受けた。ムハマド・ユヌス氏だけではなく、バングラデシュの発展、人々の幸せを願っ

て奔走している人が多くいることを知った。彼らが、行動に移せるのには、小さい頃から貧しさゆえの不条理を身近で目にしているからではないかと思った。BASET 氏は、実際に自分の村で金持ちや地主が貧しい人を見下して、村で盗難など、何か問題が起こると貧しい人のせいにするなど差別や不条理の現場を目にし、「自分の村の困っている人を助けたい」という個人的思いがいつも根底にあった。貧しくて、教育を受けていない人の信用性と識字力を向上させ、貧困から脱却してもらうためにショミティを作ったのだった。つまり、マイクロクレジットは、貧しい人々が夢を叶えるための最初の一步、ささやかな資金の手助けであるのではないかと思った。子どもたちの夢を聞いても、将来、医者や先生になって自分の故郷に恩返しをしたい、人の役に立ちたいと述べていたのが、いつまでも私の心に残っている。

バングラデシュの人々と交流して、バングラデシュの人々の根底には自分のことよりも他者を思いやる気持ちがあって、自分本位ではなく、他人に対する思いやりにとっても感銘を受けた。そもそも、彼らには「他人」という概念がなく、「みんな一緒」という概念を持っているということもあり、いつもみんなの幸せを考えているからこそ、バングラデシュの人々は、優しさ、温かさ、笑顔がにじみ出ているのだろう。ホームステイ先で、おばあさんが私に風邪を引かないようにと、私が首に掛けて

いたタオルを巻いてくれて、抱きしめてくれたことが忘れられない。村を訪問して村人が別れ際に私達に「あなた達の幸せをいつもお祈りしています」という言葉が美しく、とても印象に残っている。笑顔だけではなく、表現の美しさ、言葉の力も感じた。農村の美しい自然を五感で感じて、タゴールの詩を含め美しい表現がたくさん生まれたことに納得した。

また、バングラデシュは識字率が低い、口承伝承によって美しい音楽、舞踊、織物、デザインなど民衆芸術が伝えられ、豊かだった。農村では、果物のなる木々が生き茂り、美しい田園風景、澄んだ空気、夜は停電で生活が不便にはなるが、星空のきれいさや月明かりの明るさなどを通して、自然の美しさ、豊かさも感じた。人々の笑顔や優しさ、温かさ、素晴らしい民衆文化、自然の豊かさといったものは、GDP や GNP などのように統計を取ることが出来ない、または数字では表すことの出来ない、「目には見えない豊かさ」だ。日本にいては、わからなかった「本当の豊かさ」に気づかされ、考えさせられたのだった。

参考文献：
ブログ・アナタカラ
「グラミン銀行のおかげでバングラデシュの貧困は減ったのだろうか？」
<http://anatakara3blog.seesaa.net/article/298011319.html>
IDE-JETRO 日本貿易振興機関アジア経済研究所
金融 マイクロファイナンス Microfinance
<http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Theme/Eco/Microfinance/index.html>
マイクロクレジット NGO
http://nzisida.lolipop.jp/04_07_13.htm

目に見えない心の豊かさ

諸橋 茉美 国際交流学部国際交流学科 1 年

はじめに：野外授業の意味

まず、バングラデシュに行く前に私がこの国に抱いていたイメージは、途上国、貧困、格差、衛生の整っていない環境、などとても良いイメージではありませんでした。テレビでもそんなに報道されることもなくバングラデシュについての知識は何もありませんでした。自分で調べてみても私のこのイメージが変わることはありませんでした。でもこの国に行こうと思った理由は自分の人生で絶対に行く機会は無いと思ったし、なにより途上国の現状を 10 代のうちに自分の目で見られる良い機会だと思ったからです。日本も先進国のひとつであることから先進国の情報や知識は生活している上で自然と耳にすることができますが、途上国の現状はテレビで放送できるレベルの、ほんのちょっとの部分しか見られません。でも実際は、テレビでは映されない、幸も不幸の面もあるはずです。それを、自分の目で確かめたかったからです。

そして、このスタディーツアーで私が学んで帰ってきたことは、『改めて日本の豊かさを再確認すること』でした。でも、日本に帰ってきた今は、それとは全く逆の『バングラデシュの豊かさ』を身に染みて、痛感して帰ってきました。バングラデシュで生活した 4 日目くらいからもう、バングラデシュに行く前に決めて

いた題材とは正反対の結果になって、むこうで生活しているとき、自分は何を学びに来たのかがわからなくなって少し戸惑いました。けれどこれが現地で五感を使って学ぶ、ということなのだと思います。教室で学ぶやり方では体験できない勉強の仕方でした。普通の勉強では使わない部分の脳が毎日毎日刺激されました。そのおかげで、知識など勉強面はもちろんですが、なによりものごとの考え方や人としての根本が成長できたと思います。たくさんの優しさに触れて、いつもの自分の態度はどうだったか、人とどう接していたか、を客観的に考える機会ができました。主観的にはよく考えますが、自分を客観視すると、自分が思っているほどしっかりとできていなかったりします。

また、このスタディーツアーでバングラデシュの国事情だけでなく、この野外授業全体の、存在目的を自分なりに考えてみました。それは、(1) 自分の抱いているイメージは単なる自分の考えでしかないということ(2) 自分の考えと違う現実を見たら、それが本物の現実だということ(3) それを受け入れて自分の知識を書き変える必要があるということ(4) 経験してみて初めて知るものがいっぱいあるということ。これらが野外授業という総括したものの意味を私なりに学びとったことです。

では今から、そのバングラデシュで学んだ中身について人々とのふれあいのなかから私が体験したことを交え

て、書いていきたいと思います。

ストリートチルドレンの笑顔

私がこのスタディーツアーで一番自分を見直す機会となった出来事でした。drop in center の子どもたちは、満面の笑みと大きな声であいさつをし返して、私たちを迎えてくれました。その笑顔と元気な声を聞いただけで、本当に本当に胸がいつぱいになりました。この子どもたちはとても強く生きている、とすごく感動しました。私の中でのストリートチルドレンとは全く正反対の子どもたちがそこにいました。綺麗な衣装を着て、すごく素敵な歌と踊りを披露してくれたことも、すごく衝撃でした。drop in center がちゃんと子どもたちのためになっている証拠だと思いました。ここで勉強できるから歌や踊りもできる。drop in center を活用しているのだなと思ってすごく嬉しかったです。それは大人への信用が徐々に復活してきていることだと私は思うからです。

私が、彼らに、「一番の思い出は何？」と聞いたとき、「お父さんに捨てられたこと」「路上で生活しているとき大人にいじめられた記憶」など、とても悲しい返答が返ってきました。とんでもない質問をしてしまった、とその瞬間とても後悔しました。彼らは今こんなにも楽しそうで幸せそうな笑顔を見せてくれているけれども、こ



満面の笑みをむけてくれるストリートチルドレンの女の子

の子たちはやっぱりストリートチルドレンなのだと。drop in centerのマネージャーのアラムさんのお話にあった、なぜ路上に出てくるのか→虐待、第二の母・父のいじめ、お金、家にいてもつまらない→楽しいことを求めて（自由になりたい気持ちが強い、精

神の強い子ども）。この通りだと思いました。過去に辛い思い出を持っている子どもがたくさんいるのだと。そのための drop in center の存在があること。

また、同じ子どもたちの助け合いで、危険な目にあわないようにする。というお話も、日本はいじめ問題など、絶対に自分が有利なように、自分は自分、他人は他人という考えがある中、バングラデシュの人たちは子どもの頃から助け合い、思いやりの誠心があるのだと、関心しました。今の日本の子どもに1番必要な考えだと思います。

drop in center のやり方も、関心しました。①まずは

楽しいことから（あおぞら教室）→②信頼できるんだ→③少しずつ頼らせるようにする。子ども同士の伝達でもう一人増える…もう一人…→④勉強を教える（衛生、保健、生活）→⑤drop in centerに住むようになる子も、サービスを受けにくるだけの子も。大人の信用を一回失った子どもが大人を信用するのは難しいことで、drop in center のやり方の手順も、遠回りだけどちゃんと段階を踏んで、だからこそ子どもが近づいてきてくれる1番の近道を実践しているのだと、思いました。子どもの心理をすごく考えていました。

人の優しさ

私が人の優しさで心に残っている出来事は数えきれないほどたくさんありますが、その中で1番心に残っている出来事があります。

ジョソール県サティアントラ村に向かう途中に寄ったカルナガットのチャイ屋さんでの出来事です。外国人が珍しいのか、私たちの周りにはいつも人が集まって来ます。私たちからすればあまり気になることでもないのですが、それに気遣ってくれたチャイ屋さんのおじさんは「せっかく休んでいるのにこんなじゃ休めないじゃないか」と周りに見学に来ていた村人たちを強く叱って追い払って、私たちがゆっくりくつろげる環境を作ってく



重い荷物をのせてきた人を周りに居合わせた人が自然と集まって手伝っているところ

れました。はじめ私は、私たちがここに座っているせいで、商売の邪魔になっている、と自分たちが怒られているのだと思いました。それが逆に私たちのために村人を怒ってくれたことがとても申し訳ない気持ちとともに、すごく優しさを感じました。特別警察の方の温かいおもてなしも、交番を休憩所として案内してくれて、なおかつチャイもおごってくれました。

ありがたかったです。最後私たちがフェリーに乗るときには、車の砂ぼこりが立たないように水を撒いて、道が歩きづらだろうと、手をとってくれる人もいました。特別警察の方はフェリーの中までお見送りに来てくださってまた会いましょう、と笑顔で見送ってくれまし

た。改めて、ここの人たちの心はなんでこんなに温かいのだろうとむしろ不思議に思うくらいです。

村の女性たち、ショミティ

ショミティはすごく良い制度だと、村の女性の意見はみんな一致していました。昔は高い利子でお金持ちからお金を借りて、自分で自分の首を絞めている状況だったけれども、今はこの制度のおかげで、そんなこともなく、みんなある程度の貯金と収入を得ることができている。

貯金も借りることも両方でできて、発展もできる。まとまったお金が入るから家も買えて、ビジネスもできる。



アミヌブル・ベリン・モヒラショミティで記帳をする女性

また、保険システムがあるショミティ（ドラジャハット・ショミティ）もあるので、安心して利用できるとのこと。

ショミティに入ってお金以外のメリットもたくさん

ある。（読み書きができるようになった、健康面の知識、勉強ができるようになった、子どもの教育、村のためのプロジェクト等）

これがショミティの女性たちに聞いたお話です。ショミティをしている女性たちを見て、すごく女性がしっかりしていると感じました。また、ショミティに対してすごく前向きで、向上しようという気持ちが伝わってきました。お母さんはどの国もやっぱり家族のために、すごく一生懸命でした。ショミティのこの画期的な制度もそうだし、決めた約束をみんながちゃんと守っているから成り立っている制度だと思いました。ショミティのおかげでこれから少しでも多く学校に通える子どもが増えていけば、バングラデシュがより、向上していくと思います。

イスラム教とヒンズー教の共存

Q なぜ共存できているか？→生まれたときから共存しているから、同じ女性から生まれた感覚。全く偏見はない。

Q 努力していることは？→ミーティングを開いて、イスラム、ヒンズー、老若男女の意見を聞く。

Q 世界で起こっている宗教問題について、とその解決策→お互いに傷つくことはいわずに話し合うこと。宗

教対立は絶対に良くない。

お互いに共感できないことは確かにある。

（ex, イスラム→ヒンズー：祭壇になぜ食べ物やささげるのか？だったら乞食に恵んだ方が生産的）

（ex, ヒンズー→イスラム：なぜ牛を殺して食べるのか？牛は神聖なもの）

でも、お互いに争うことは絶対にない。むしろ、お互いに助け合って、おもてなししあう。

人間の中には神様がいる、だから人間に優しくすることは神様に優しくすること。宗教にとって1番大事なものは、神様。どの宗教もその考えが根本にあるので、争うこともなく、共存しあえている。お互いの宗教的記念日も参加しあう。サティアントラ村ドラジャハット地区にあるカリモンデル（ヒンズーの寺院）は、イスラムの人もお金の支援をしてくれて、イスラムの人に背中を押してもらって建設が進められた。

生まれた土地は離れない。生まれ故郷は天国。結束のかたい村であるけど他の土地から引っ越ししてくる人がいるということは、この村の環境が良いということ（＝2つの宗教が共存しているけど、環境はとても良い）。

これがカッティック・チョンドロ・デボナツさん（寺院の会長さん、農民）から聞いたお話です。2つの宗教の共存地域と聞いて、とても興味がありました。どんな

MAMI Morohashi

争いがあったのか、どうきりぬけているのか、やっぱり仲が悪いのか。など、もっと深刻な争いや問題があると考えていたので、これを聞いたときそんなものの？とちょっと拍子抜けしてしまいました。私がよく目にする宗教問題はかなり争っているイメージがあったので。と同時にやっぱりバングラデシュは穏やかだな、と嬉しく思いました。お互いの宗教を尊敬しあえているから成り立っている共存だと思います。バングラデシュの人はどの年代の人もどんな環境の人も人を大切にしていることがすごく伝わってきました。なおかつ、デボナツさんは自分でライチの木を 200 本、マンゴーの木を 100 本この村に植えたそうです。人と自然の両方を大切にしていることも、とても素敵だと思いました。心に余裕があるからこそできる、逆に余裕があるからこそ自分の周りに優しさと思いやりをおもてなすことができるのかなと思いました。彼らにとって信仰心は大事だけど、それを他人におしつけない、また、干渉しないことも秘訣だと感じました。

自分が感じたこと

自分のあまつたれを痛感しました。今自分は、大学も行かせてもらえていて好きなこともしてとても環境には恵まれています。だけど自分のやりたいこと、好きなこ

と、興味があること、全て何もない、目標のない生活を送っています。こんな自分がすごく小さくて少女グループ、キシュリの前に立って夢を聞かれたとき、ちゃんと答えられなかった自分が恥ずかしいと思いました。それに対して彼らは夢を聞いたらちゃんと答えられる。好きなこと、幸せだと思うこと、ちゃんと自分を持っている。先進国ゆえの、甘さを感じました。いつも何かあるたびに、私たちは時間、お金、余裕がある生活に頼って、いつかできるだろう、と後回しに、後回しにしています。けれど彼らに余裕は無いいつも、ぴったりの生活をしている。だから、大切なことは何か、今自分がやらなければいけないことは何か、をちゃんとわかっています。私たちのように甘ったれた生活なんてできない。

私は臆病だから今まで嫌なこと嫌なこと怖いことを見ないように見ないように生活してきました。でもそれは自分がただ知らないだけで実際はその現実が進んでいる。弱い考えだと思いました。こんな素敵なお子たちの笑顔と幸せが見られるなら、見たくない物も見られるかもしれないと思いました。でも、まだ 100%の勇氣はありません。

何をするにも、自分の利益やイメージアップなど全く考えず、相手のために相手の幸せのために行動できる人たちの国。これは途上国だからこそ、まだ残っている人の根本だと思います。先進国といわれている今の日本や

アメリカも、昔はこのようなことができていたのではないかと。経済的に、あるいは世間からの自分の地位などの欲求から、このあたりまでの行動ができなくなってしまったのではないかと。

先進国のように、物質、経済、生活が満たされてしまう

と、また新しい次の目的に、また新しいものに…と、どんどん欲が高まって、1 番大切なものを忘れてしまった、という感じがあります。日本人も世界に比べれば、わりと他人に気遣いができる人種だと思います。でも、バングラデシュの人は気遣いの中に思いやりがすごく強くありました。おもてなしの心。いつでも、自分がして欲しい、してあげたいと思うことを一足先にあたりまえのようしてくれます。相手を思いやる気持ちが言葉と態度で表現できて、行動できることは、人としてとても素敵だと思います。

先進国は途上国に対して、国の成長を、途上国は先進



こんなに小さくてもしっかり仕事をして自力で生きているストリートチルドレンの子どもたち

国に対して、人の成長を、お互いに学びあえたらいいなと思いました。

私にとってのバングラデシュ

イメージがガラッと変わりました。むしろ、行く前のイメージは忘れたくらい、バングラデシュに行ってからインパクトが強すぎました。一番の思い出は、やっぱり『笑顔』。本当に、どこに行っても笑顔とおもてなしを受けないところはなかったです。逆にずっと昔から親しい仲だったかのような対応を受けます。すごく、人の心の広さときれいさ、優しさ、思いやりを感じました。

ストリートチルドレンのような過酷な環境にいる人たちでさえ、最高の笑顔を私たちにむけてくれる。私の勝手な考えだけでも、私はそのような環境にある人たちと一般の暮らしの中で見る笑顔の『重さ』が違うかな、と感じました。人の笑顔にランクをつけるように聞こえるけども、そういった意味ではないです。私は、ストリートチルドレンなど、恵まれない環境で育つ人たちの笑顔の方が、すごく心が熱くなりました。バングラデシュ一般の人たちの笑顔は『癒し』、ストリートチルドレンたちの笑顔は『感動』という感じです。今まで自分はどれだけバングラデシュという国のイメージが悪かったのだろう。貧困、不便、等、マイナスなイメージしかありま

せんでした。それが実は、こんなにも笑顔、優しさ、思いやり、幸せ！！にあふれている国だなんて、ほんの少しも！全く！！思わなかったです。

やっぱり現地に自分が実際に行って、五感を使ってみて初めてわかることがたくさんあります。それを再確認しました。五感で感じるなど、今の私の生活にはないです。使う場所すらない。先進国ならではの欠点だと思います。恵まれすぎた、なんでもそろっている環境に居すぎることも良くないな、と思いました。もちろん、便利でたくさん良いところもあるけれども。人としての成長過程で、ずっと恵まれた環境にいることは、足りないことがたくさんあるなと思いました。

人々の温かさも、村ではまだ昔のようにずっと古い歴史のある生活の知恵を使って暮らしていることも、すごく尊敬しました。学んでも学んでも学び足りない。これからどんどん発展していく国のひとつであるけれども、村での生活ぶりなど、ずっと存続してもらいたい。そこは忘れないでほしい。心は今のままでもっと幸せになってほしい。

バングラデシュに行ったことで私の視界がとても広がりました。バングラデシュの人たちを目標に、人にやさしくできるようになりたい。

そして私も、誰かの目標にされるような人になりたい。こんな風に私の考えを変えてくれたバングラデシュ

の人々にすごくすごく感謝したいです。

目に見えない豊かさから見えてくるもの

松崎史帆 文学部英文学科2年

私が、今回バングラデシュに行きたいと思った理由は、幼い頃から親子共々海外旅行が好きで、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパなど先進国に憧れ、また先進国での旅行のほうが安心という安易な考えから、発展途上国に目を一切向けてこなかったことを反省したためである。また私が大学生になり、他大学に進学した高校の友人に再会した際、友人が海外ボランティアのサークルに入っていて、アジア圏にいき、小学校を建てたり、トイレを作ったり、とても大変なことだが、毎日充実していると話をしてくれた。そのことが、きっかけで私も自分の目で発展途上国は今どうなっているのか、先進国と何が違うのか、面白半分ではなく、真剣に見たくなった。そんなことを考え、何かないかと探していると、大学の後期の授業の時間割を決めていた時に、この授業を見つけ、何の迷いもなく、授業を取った。

授業では、私自身はストリートチルドレンの現状について重点をおいて見てきた。しかし、ストリートチルドレンについてのブックレットを読み、バングラデシュに行く前に悲しくなってしまった。なぜなら、私は、ストリートチルドレンについて見てきていたために、バングラデシュ＝ストリートチルドレンという見方をしてしまっていたからだ。ストリートチルドレンというのは、お金がなく、自分のため、家族を養うために路上で暮らしをしている子どもと考えていたが、多くの子どもは家

族、家庭に問題があり、家を自ら出て、ストリートチルドレンになっており、私の発展途上国に対するイメージとして、家族がたくさんいて、仲がよく、祖父祖母、父母、兄弟、全員が協力し支えあって生活しているという勝手なイメージがあったのもあり、たくさんの悲しみ、苦しみを抱いて生活している子どもたち、今日を生きるために、その日その日一生懸命働く子どもたち、単に貧しい生活から逃れるためだけでなく、両親の離婚や暴力など、家庭内の問題が原因で故郷の村を離れ、心の傷をかかえたまま首都ダッカの路上で生活するようになり、また家庭内暴力には、男親が悪い場合もあれば、女親が悪い場合もあり、ストリートチルドレンに対して、私はどこか、まだ幼いにも関わらず、一生懸命家族を支えるために、働いていて偉い、凄いなど安易な考えで見ていた部分があった。

ストリートチルドレンは、小商い、荷運び、靴磨き、ごみ拾い、さらには売春などによって現金収入を得て生活しており、子どもであるため、不当に低い賃金で長時間労働させられる傾向があり、またストリートチルドレンは路上で生活しているため、所持していた現金を夜眠っている間に盗まれたり、不衛生な環境のために病気になったりするなど、その生活は絶えず危険にさらされ、加えて学校に通っていないケースがほとんどで教育の問題も深刻になっている。そんな子どもたちが、50人な



どの話ではない。最近のユニセフの調査でストリートチルドレンは約180万人いるそうだ。

そんなことを知り、ストリートチルドレンの笑っている写真を授業で見て、この子どもたちは、何を思い、何を考え、こんなにも綺麗に笑うのだらうと疑問を持ち、早くバングラデシュに行き、自分の目で直接子どもたちを見たくなった。また、現地に行き、子どもたちの笑顔を見た時、自身がどう感じるのか、早く知りたくなった。授業で見てきたものと、直接自分で見たものとでは、どう捉え方が変わるのか、そんなことを考えながら、私のバングラデシュ研修は始まった。

現地の空港に着き、最初に思ったことは、みんなが笑いかけてくれること、またJABAツアーの人が笑顔で出迎えてくれ、交通渋滞に巻き込まれながらも、ホテルに着くと、ホテルで働いている人たちも笑顔で迎えてく



れた。バングラデシュに着いた初日は、現地の人たちは、笑顔が素敵だなと考えながら眠りについたのを覚えている。しかし、研修2日目からホッタールという政治デモにぶつかり、初っ端から予定変更。縫製工場

に行くことになり、多くの人たちが作業しているのを見たが、ここで、私がバングラデシュに来る前に考えていたこと、思っていたことと、直接見た光景は異なっていた。事前に先生に借りて見たDVD「ガーマット・ガールズ」（ダンピール・モカメル監督作品）の映像の中に映る縫製工場の様子は、罵声が飛び交い、緊迫した重い空気が工場内に流れているものだったので、縫製工場を見ることに少し抵抗を感じていたが、実際は、辛い顔は誰もしておらず、どちらかという、目が合うと笑いかけてくれ、また話を聞くとバングラデシュの縫製工場が伸びてきていること、女性をちゃんと考慮した仕事時間になっていること、そこで働いている人たちが皆仲が良

いというのを聞いた。私はその光景を見て、安心したのと同時に、バングラデシュの縫製工場の技術が上がってきていることを目で見えて感じた。また、聞いていて嬉しかったことが、皆仲が良いため、仕事具合を見ながらお互いの体調を量るというのは、素敵なことだと感じた。

延期になりようやく4日目に、念願のストリートチルドレンのいるジャトラバリのドロップ・イン・センターに行くことができた。しかし、私はそこで衝撃を受けた。バングラデシュに行く前からずっと見てみたかったストリートチルドレンの子どもたちの笑顔。確かに、3日目にスラム街に行き、ストリートチルドレンではないが、そこで暮らす子どもたちの笑顔を見たが、子どもたちは何人か、私たちの持ち物を子どもだけでなく、親までもほしがる人がいて、少し悲しかった。しかし、ストリートチルドレンの子どもたちの笑顔は違った。ひとり、二人の話ではない。全員が綺麗な笑顔で笑うのだ。皆とても元気で、子どもたちの笑顔に心の底から癒され、元気を貰った。ここでも、私が現地に来る前に調べていたこと、考えていたことと、直接目で見えたものは異なっていた。また、子どもたちに質問する機会があり、今までで一番心に残っている思い出は？という質問に、みんなで一緒にいることが楽しいという子もいれば、親に捨てられ、路上に住んでいた頃、大人にいじめられたことが思い出と答える子もいた。しかし、そう答えた子も、全く



その悲しい過去を連想させない、元気で、素敵な笑顔をする。しかし、よくよく話を聞くと、支援している学校に通っているストリートチルドレンの子どもたちは、心の教育なども受けているため、他のストリートチルドレンよりも落ち着いているそう。最終日にオールドダッカに行った時に会ったストリートチルドレンの子どもたちも、支援している学校に通っていたため、自分たちからお金を要求してくることはなかったが、バングラデシュで高級といわれているケンタッキーフライドチキンや、高級スーパーの前にお金に余裕がある人が来ると分かっているのか、ストリートチルドレンの子どもや、貧しいおばあさんがたむろしていて、高級スーパーから私たちが出てきた際、先生のお金を無理やり取ろうとするストリートチルドレンを見たのも事実だ。ブックレットで読んだ通り、この子どもの気持ちも理解でき、親元を

SHIHO Matsuzaki

離れ、今日を生きるために必死なことも、悲しい過去を思い出さないために必死なことも理解できる。高級店といわれる前にたむろする子どもたちの笑顔を見ることは出来なかったが、いつかこの子どもたちにも綺麗な笑顔を見せてほしいと心からそう思う。しかし、この事実も自分の目で見なければ分からなかったことであり、このまま知らないままというのは、あまりにももったいないことだった。支援している学校に通うストリートチルドレンと、教育を受けていないストリートチルドレンの違いは、ないと言ったら嘘になるだろう。ストリートチルドレンが私に笑ってくれた時、年齢的に、私が子どもたちに何か教えてあげなければならない立場にも関わら



ず、子どもたちの笑顔から、私もいつまでも、この子どもたちの笑顔が素敵で綺麗だと思うこと、自分自身もこの子たちのような笑顔でいつまでもいられるような大人、人間になることを子どもたちの笑顔から学

んだ。ベンガル語と英語と日本語で、余りコミュニケーションは取れなかったが、本当に私が子どもたちの元氣、笑顔に救われ、学ばされ、癒されたことが、子どもたちに伝わってしてくれたら嬉しい。

現地に行く前まではストリートチルドレンの笑顔に出会いたいと自分の中にテーマを決めていたが、いざ現地にきてみれば、ストリートチルドレンに関わらず、老若男女みんなの笑顔に何度心が満たされ、胸が熱くなったか分からない。二週間の間にたくさんの笑顔を見てきたが、現地に来なければ出会えていなかった。

私は笑っている人が好きで、そう思うのも、自分の笑顔にコンプレックスがあるからだ。正直、今まで、私はあまり笑わないと周りに言われてきており、現地に行く直前に私の大切な人にも、史帆には笑顔が足りないと言われたということもあり、バングラデシュに行き、あまり皆が素敵に笑うので、うらやましく思ってしまったほどだ。私は、人の笑顔には何か幸せにするパワーがあると信じているため、今回たくさんの笑顔に出会えたことは、本当に私自身を変えるきっかけになった大きな出来事である。笑顔でどれだけ私が幸せな気持ちにさせられたか、相手にとっても同じことだと考えたら、自然と前向きになることが出来た。

私たちは、バングラデシュに二週間滞在したが、その短期間の間に本当にたくさんの人と出会い、たくさん



の笑顔に出会い、たくさんの思いやりに出会った。日本に帰国し、今考えていることは、日本は、お風呂に入りたいときにすぐお風呂を沸かすことが出来、食べ物いろんな種類があり、安全で美味しく、すぐ電氣を使うことが出来、日本にいて不自由になるものは何もないと言えるだろう。

一方、発展途上国といわれるバングラデシュだが、まず私の考えとしてバングラデシュに発展途上国というレッテルを貼るのは、おかしいと考える。UBINIG代表のシャミンさんがレクチャーした際にシャミンさんが発言した“目に見える豊かさと目に見えない豊かさ”が帰国してからずっと頭の中にあり、忘れることができない。この言葉から、何を考えることが出来るだろうか。私は、目に見える豊かさというのは、日本のようなことだと考える。不自由するものがなく、建物は華やかで、



夜も町は光で溢れている。一方、バングラデシュは180度違う。しかし、この短期間で出会ったたくさんの笑顔、思いやりからすぐ理解できる。バングラデシュは目に見えない豊かさという言葉が合っている。目に見えずとも、自分の株をあげようとする思いやりでもない、何か相手にしてあげたいという純粋な気持ち、宗教の共存、常に相手のことを自分の念頭に置いていること、それらを直接目にし、全てを合わせたものが、目に見えない豊かさに繋がっているのではないだろうか。

例えば、村を歩き、ふらっと話を聞くために立ち寄れば、歓迎してくれるみんな。売ればお金になるのにも関わらず、私たちに、たくさんの果実をただでくれた女性。席に着いただけで、何からなにまでしてくれ、手まで洗わせてくれる。私たちがチャイのお店で休んでいて、たくさんの人が集まってきてしまった時、「この人たちは

休んでいるのに、どうして邪魔をするんだ」とギャラリーを叱ってくれたチャイのお店のおじいさん。駐在所の中で休んでいいよと、お茶までご馳走してくれた警察官。たくさんの思いやりを目にし、味わい、バングラデシュ人の思いやりをみたことも、私も常にこうゆうことができる人でいたい、このたくさんの思いやりをこれからもずっと忘れてはいけなと教えてくれた。

このような体験をしたからこそ、言えることは、バングラデシュは目に見える豊かさは、他の国より劣ってしまうかもしれないが、目に見えない豊かさは日本よりも上であり、バングラデシュは目に見えない豊かさの点で先進国だと私は考える。

もう一つ日本に帰国して、感じたことは、私は今までいくつかの先進国を訪れ、先進国から帰国した時に、毎回またあの場所、あの雰囲気に戻りたいと思ってきた。しかし、バングラデシュから帰国した時に思ったことは、今までと違い、またたくさんの笑顔、たくさんの人に会いたいと思ったのだ。自分でも、今までそんな風に思ったことは、なかったため、驚いたが事実であり、私が、バングラデシュに行く前に、バングラデシュから帰ってきたら、どうなっていたいかと考えた際に、よりたくさんの人々と交流しようと強く思い、素直な気持ち、純粋な気持ちがこれからもなくならないようになっていたと考えていたが、全くその通りになっている自分に気が

ついた。

今すぐにでも、バングラデシュに戻りたい。二週間という短期間のうちに目にしたもの、感じたものはとても多い。しかし、まだまだ私たちが知らない良いことも悪いこともあるかもしれない。それをこれからも見ていきたい。目を逸らさずに、受け止めていきたい。

バングラデシュに行き、目で見たもの、感じたものは絶対忘れない、忘れてはいけな。自分の成長に繋がる研修になったことは言うまでもない。これからもバングラデシュの良さがなくなることなく、繁栄していつてほしいと本当に思う。こんなにバングラデシュに戻りたいと思っている自分に驚く。私はこのバングラデシュの研修をより自分の成長に活かし、いつかまた近いうちにバングラデシュに足を運びたい。そう思わせてくれたのも、何回も言うが、たくさんの笑顔、思いやりに出会い、JABA ツアーのスタッフ、バングラデシュ好きの先生のサポートがあったからだ。

ありがとうバングラデシュ。

バングラデシュ人の生活と私の生活

鈴木美咲 国際交流学部国際交流学科1年



(1) 動機

なぜ実際にバングラデシュへ行こうと思ったのか。現地で使ったメモ帳に整理して書いてあったので、レポートを書く前に見返してみた。よく考えたらいろんな理由があった。先生の言った、「村の女の子たちに思春期という時期がうまれた」という表現をずっと忘れることができないということ。「思春期がうまれる」という状況がもう日本とは違う。自分とはまったく違う生き方をしている同い年の女の子がいるのかな、と思うと彼女たちがそんな生き方をしているのか気になった。それにどこでもいいから日本以外の国に行きたい願望がずっと前からあった。それは観光でもよかったが、観光客用のホテルに泊まるのではなく、ホームステイするとか野宿するとか、とにかくその土地に住む人の生活そのものを体験したい。たくさんの違いを発見したかったし、いろんな考えや生活があるということを知りたい。それに私は人や生活や文化が日本のものとか離れていてもそれを純粹に楽しみたいと思う。イスラム教やヒンズー教は日本国内で知名度はあっても、本物に触れることは難しい。だからこそ、余計に興味はわく。だから、観光化されて生活水準が日本とさほど変わらない国に行くよりも、バングラデシュを選んだ。

発展途上国、経済が上昇傾向にある国の人々は、とて

もフランクで陽気な性格なのだろうと勝手にイメージを持っていた。誰とでも分け隔てなく接したり、良い人間関係を築いていける人が多い。私はそういう人間になりたい。私は人との関わりが苦手だと自分でも思うことがある。でも自分の将来を見つめるたび変わりたいと強く思う。子どもも初対面も苦手な自分から、人との関わりを恐れずむしろ楽しめる人になりたい。海外で開き直って人との関係を楽しみたい。

もちろん社会問題についても興味がある。私は漠然と、教育の受けられない子どもや、自分たちの権利を侵害された人々、環境や生活問題の調査、解決する団体で仕事がしたいと考えてきた。自分が仕事にするほど本気でやりたいこともないが、仕事をするときはお金をもらうためだけの仕事ではなく、社会貢献したいし、やりがいも感じたいからだ。そのため国内外の社会問題に取り組めるようになれたらいいな、となんとなく考えてきた。今回は今思い描いている自分の将来像に近づきたいチャンスだと思った。

以上、バングラデシュにはたくさんの期待を持って、研修に参加した。実際に研修が終わると自分はいろんなものに満たされた2週間を過ごしたと思う。

(2) テーマ

たくさん期待があって、自分が学んだことも多いと思う。スタディーツアーでは「豊かさ」という言葉が重要になっていた。自然の豊かさ、心の豊かさ、文化の豊かさ…。バングラデシュでいろんなかたちの豊かさを見てきたが、私が帰国して最後に注目したものについてレポートを作りたいと思う。それは「生活の豊かさ」についてだ。自分の中で思っていた豊かな生活は、バングラデシュの農村の生活を目の当たりにして少しずつ変化してきたように思う。だからその変化についてまとめてみたいと思う。そして豊かな生活の上にあるもの、人との関わりのなかに見つけたことや、わかったことを書きたい。

(3) 豊かな生活とは？

自分の気持ちの変化について書きたいから、最初に私が考えていた豊かな生活について書く。それはいろんなものに囲まれた社会だったと思う。スマートフォンやPCなどのたくさんのインターネットツール。いろんな国のいろんなメーカーの服。食料や日用品以外の雑貨のショッピング地。日本の田舎にもあるであろう手軽に乗れる電車やバスや新幹線。カラオケやゲームセンターな



どの娯楽。そこへ一緒に行く仲間…。さらにこれらがすべて、「多種多様」であることも重要である。

これらの「豊かさ」が何をもたらすのか。これらのおかげで自分たちができることの可能性も広がるだろう。バングラデシュに行く前のこの考えは確かに事実だと思う。例えばPCがなければインターネットが使えない。インターネットが使えなければ身近な情報しか手に入れない。地球の反対側の状況についての知識は得られない。PCがなければ文書作成の技術も得られない。そうなってくると将来自分ができることの可能性が狭くなっていく。移動機関が身近なら行動範囲もずっと広がる。可能性の広げられる環境にはたくさんの物が必要になるが、物質的に豊かになりたいのではなく、このような理由から物のある社会は豊かであると考え。そうい

う面で、バングラデシュの農村の人は豊かな生活が送れていないのではないか、と思っていた。ある村で生まれて、ほとんどの人はその村を離れることなく生涯を終えると想像していたので、そんな生活本当に幸せなのか、楽しいのか…そんな風に考えていた。

しかし、私たちが向かう村にいる人たちは、実際、十分幸せそうだった。NGO・PAPRI（パプリ）が支援する少女グループ「キシリ」であった女の子たちは、今の生活にも満足している。やりたいこともみんなそれぞれ持っているし、それにたいする意思もちゃんと持っている。ストリートチルドレンのドロップインセンターでは、子どもたちが元気に笑っていた。「今十分幸せだ」と話していたし、彼らの自分自身に対する自信や今の生活に対する誇りも感じた。ガンジス河沿いの二つの村でも子ども達が仲良く元気に過ごしているのがわかったし、みんなハッピーだと話してくれた。タンガイル県のデルドゥアのUBINIGでは、特に、タンガイルという地域に「可能性」を見出して活動しているし、ジョソール県のサティアントラ村では「この村を出ようと思ったこともない」というお話を聞いて、農村での生活にある豊かさについての考えも少しずつ変わってきた。

(4) 違うかたちの豊かさ

バングラデシュの農村での豊かな生活とは、そこにある自然に寄り添って生きていくことが根本にあると思う。日本から来た私たちからしたら「原始的」と思えるかもしれない。牛フンで燃料はつくるし、フンに混ぜるものも化学物質ではなく、植物の繊維だ。それにこの燃料は村のあちこちで目にした。トイレもシャワーも不便だった。しかし、原始的という言葉は少し違うような気がする。原始的な生活というと人間らしさがまだ乏しいようなイメージだ。文明がまだ未発達であるように。

しかし、農村にある人々の生活は人の立場で自然を考えに考えてフル活用し、また自然に返すというようなものだったので、原始的とは言えないのかもしれない。

たとえばUBINIGのゲストハウスでシャミンさんがおっしゃった「本当にモダンで科学的な農業」についての考え方にはとても感銘を受けた。ノヤクリシ・アンドロン（新農業運動）は、何が最終的にメリットをもたらすのかよく吟味されているのに、直接的な科学のない自然のままの農業を人の手によって広めようとしている。これはまさに、自然と歩むための人間らしい例だと思う。それにその活動はあくまでビジネスとして成り立っているのだから余計強く思う。自然から切り離された生活を文明的と呼ぶこと自体に抵抗を持った。

MISAKI Suzuki



振り返りの時に「文明は進化しているが、同時に退化している」というパラドックスを紹介したが、その時は自分の思っていた科学ってなんだったんだろうという思いしか浮かばなかった。そのパラドックスが持つ意味も今ではよくわかる。以前の、自然と切り離された生活こそが人間らしく文明的という考えにも疑問を持った。

自給自足的な生活に対する憧れはあったが、それが豊かな生活だと思ったことはなかった。しかし、身の回りの自然と密着した生活を「豊かな生活」とアラムさんがおっしゃったときもつといろんなことが見えてきたような気がする。食材がないとき、身近にあるものにいつでも頼ることができる生活。最初にこれを聞いて私は「その日暮らし」という言葉が頭をよぎった。ギリギリの生活をしているように感じた。しかし思い起こせば敷地内

にはナスやパパイア、ライチやマンゴーなどもっとたくさん食べ物がある。それに畑も加えて、畑に行くまでの土手すら青トウガラシなどの食材が育っている。どこを見ても、豊かな食生活の様子を伺うことができたのだ。東先生がおっしゃっていた、スーパーや通販でいつでも買い足すことのできる私たちの食生活のほうが安定しているようで、本当は不安定であるというまとめにも納得できた。私たちの食生活は他者に対する依存でできている。しかし農村の生活には依存がない。ギリギリの生活のようで、実は私たちよりずっと満たされているのだ。

(5) 農村の生活に育まれたもの

12日目に行った、ホテルでの最後のふりかえりで、私たちのダイヤモンド・ランキングでは、この「自然を信頼し感謝して生活している」という考えが一番根本にきた。バングラデシュという国の人々の基盤にはこの要素があると考えた。では、この基盤の上にどんなものが生まれたか、現地で実際に体験したことから分析してみようと思う。

①自信と誇り

村の人たちが自分の今の生活に自信と誇りをもっているのは学生がみんな共通して感じたことだと思う。ジョソール県のサティアントラ村では「生まれたところが天

国である」というストレートなお話を聞いた。この村の環境を愛しているからこそその言葉だと思う。サティアントラ村での生活や村の人々を構成しているのはやはり自然だと思う。だから自然によって今の生活に対する誇り、自分自身への誇りが作られていくと感じた。

10日目、TUHIN家で行ったふりかえりの後に書いた中間レポートでは自分の地元に対する愚痴がポロポロと出てきてしまった。「生まれたところが天国だ」なんて私にはまだ言えない。天国だなんて思ったこともない。だからすごく衝撃だった。実際、サティアントラ村の自然は素晴らしかった。でも私たちは長いあいだそこにはいなかったから実際の生活や流れる空気を知ることはできても、完全に理解はできていない。以前の、物による可能性に満ちた生活こそ豊かだとしたら、そこでの生活は恐ろしく退屈になると思う。学生の中には、この村は何もないから日中はボーッとするしかすることがないんじゃないか、と言っている人もいた。カティックさんが「この村をでようと思ったこともない」というのはつまり、この村以外の都市や国を知らないし、知ろうとも思わないからではないか…。私もそんな風に感じてきた。でもそれぞれの村に対するそれぞれの誇りはやっぱり本物なのだと思う。なぜなら、少女グループ・キシュリでは知識を広め合って行動にまで変えているし、ストリートチルドレンは教育を受けたがっている。村には教育機

関もあるし、携帯電話で違う土地の人と連絡だって頻繁にとりあっている。マイクロクレジットや教育の面から、いろんなことを知りたいという気持ちや、ほかの地域への関心が私と同じように持っているとわかる。それをふまえて考えると自分の地元と生活を愛する気持ちがより一層強く伝わってきた。

②性格

バングラデシュに来て、一番感銘を受けたのは、人の性格だ。人との関わりを楽しみたいと行きのトランジットで寄った香港で私は話して、バングラデシュでは人との関わりに大きな期待を持っていた。飛行機で声をかけてくれた人。ダッカの空港で助けてくれた韓国人、その人を通して話をしてくれた人。キシュリで快く接してくれた女の子たち。ショヒド・ミナール（母国語運動記念日）の後、車まで歩いているときに声をかけてくれた親子。ゆく先々で会った子供達やストリートチルドレン。チャイ屋のおじいさん。ゲストハウスの人。元気に話しかけてくれた船着場で働く子供達。すれ違う人々。車の外から笑いかけてくれる人々。たくさんの人が話かけてくれて、たくさんに関わりが出来たと思う（自分が外国人だからかな？とも思ったが）。言葉も通じない見知らぬ人にこれだけ積極的に話しかけてくるのはすごいことだ。私にはできないことだった。でも2週間のうちに、人と関わるのを楽しめたかな、と思う。その証拠に風邪

で声が出なくなって人と話せないときとてもつらかったから。TUHINさんの家でも自己紹介も喉さえ普通だったらもっと大きな声で言いたかったし、TUHINさんのめいっ子シンパ(18歳)とももっと会話がしたかった。歌もちゃんと歌いたかった。お礼もちゃんと言いたいと思った。人の「フランクさ」に加えて言いたいのは、「平等さ」「優しさ」「我慢強さ」「問題を上手に解決するから」などである。平等さや優しさとは村で異なる宗教が共存していること、お互いを認め合っていること、尊敬しあっていること、目下の人を目下に見ない習慣が存在することなどである。それに、もともとあったライチやマンゴーの収穫はイスラムとヒンズーが均等に分け合うのが当然だと村全体が考えている。これは果物の収穫だけに言えることではない。我慢強さと問題を上手に解決するからは少しだけ共通している。

我慢強さについては、たくさん人の想いがこみ上げてきた。誰かに言われたことや、どこかからきいたことを筒抜けにして問題を悪化させるのが日本だ。学校でも職場でも日本では近所づきあいでも問題になる。私も以前は筒抜けにするタイプで、だんだん変わってきたと思う。それは人に対してだけではなく、その場の空気を壊さないためにあえて口にしなかったり、相手の気持ちを考えて行動することにもつながる。簡単なことなのに、できない人は多い。その話を聞いた時に自分の中にあった、

こんな人間になりたいという願望は「バングラデシュ人みたいになりたい」というものに変ったんだ、と強く思う。問題をうまく解決するからというのも我慢強さが必要になると思う。

③受け継がれてきた空気

「この国のたからもの」という現地で書いた最後のレポートには代々受け継がれてきた空気こそたからものだと書いた。自然や、自然によって生まれた誇りによってつくられた空気というのは、たとえば「なぜモスリムとヒンズーが共存できるのか」というと「生まれた時からその環境の中に暮らしていてそれが当たり前だから」という返事が返ってきた。カティックさんの祖父の代から争いごとはなく、その空気を今でも保っているからだろう。

同時に伝統も次の世代へ橋渡しすることになる。母親のサリーでつくったカタ(布)、ノクシカタ(刺しゅう布)自体も母親がやっているのを見て自分も始めたと話していた女性にも会った。日本では伝統は人の生活の中にはあまり感じるできないかもしれない。でも親の世代から受け継ぐものがもしあったら自分の子供にも受け継いで欲しいと思う。日本や、家族、個人の歴史について考えたことはあまりなかったけど、楽しむための軽いイベントだけでなく、過去の人物や歴史を尊重することがもしあったら、私も是非参加したいのに、とショ

MISAKI Suzuki

ヒド・ミナール（母国語運動記念日）のときに思った。

（6）おわりに

物による豊かさのほかに、たくさんの豊かさを見つけた。

日本に帰ってきたら、人との関わりの楽しさや、いろんな人に興味を持って話しかける気持ちを忘れるんじゃないか、と思っていた。研修でいろんなことを考えたのに、それもわすれて現地でみた豊かな生活も忘れるんじゃないか。でもそれを忘れるのも記憶するのも自分次第であることはわかっている。私は今回の研修で出会った人や、新しく知ったこと、「豊かさ」に対する考えの変化を大事にしたい。そして、今度は日本で、大学やバイト先で私の知り合ったバングラデシュ人のように生きてみようと思う。

私が誰かに感謝したり、その気持ちを行動に表したり、人との関わりをもっと楽しんだり、社会貢献したり、自然にも感謝する気持ちを持って生活することこそ、現地であった人たちへの恩返しなのだと、ジョソール県に向かう車の中で強く思ったことを絶対に忘れない。

バングラデシュの食事



バングラデシュの食事はカレーばかりと書いていたので、「確かめてくる！」と友達や先生に話してきた。私は可能な限りいろんなものを食べるつもりで来たので、実際に食べたものについて紹介しよう。

ベンガル料理はサラサラのインディカ米と数種類のおかず。主食とも呼べるようなものも多く、ポリュームもあるので「おかず」と呼ぶのは気が引ける。すべてカレーというよりは味つけが全部カレー味だった。日本やインドのカレーとは異なるから、私からするとカレーとは呼べないかもしれない。香辛料は強く、もちろん辛い。市場で見た香辛料は黄色や赤やオレンジと、色も濃くて綺麗だった。クミンやターメリックやコリアンダーなど。日本のようなまろやかさはなくひたすらスパイシーでとろみはない。すべてカレーというよりは味つけが全部カレー味だった。インドカレーと比べると油っぽさが控えめだという。

カレー味で調理した魚も食べた。日本人は魚好き。それにしても PAPRI や UBINIG で食べた魚は香辛料がよくあっておいしかった。ベンガル仕様の魚には、同じ魚でも全然違う味の演出に少しだけ感激したことを覚えている。

ご飯の他に「ルティー」という薄いナンのようなものもよく食べた。米粉で作られたものでそれでカレーを包んで食べるのはホテルの朝食の定番だった。

料理のほとんどは辛いためデザートは甘い。「ミスティ」と総称し、ライスプディングのようなものが多い。練乳に近い甘味がし、中には米粉で作った丸いドーナツ状のものをシロップ漬けにしたものもある。ヨーグルト風のものにシロップをかけて甘くしたり。どれもおいしいが一番美味しかったのは、「ビタ」。米を歯ごたえの残したままの米粉の中にサトウキビの粉末が入っていて加熱調理するととてもおいしい。舌触りがつづつと独特で、私は毎日3食ビタでも生きていけるような気がする。

私は市場でゆで卵を食べたが普通だった。しかし、生卵は明らかに違うようだ。青っぽい殻、黄色っぽい殻、茶色っぽい殻…。バングラデシュでは女性の服だけでなく、卵までカラフルだった。帰国してから「2週間ほとんど毎日カレー味で飽きなかったか」とよくきかれるが飽きることはなかった。来る前から、飽きるだろうとは私自身思っていなかったし、今ではカレー漬けの2週間がむしろ嬉しい。みんなで食べたこと、それが楽しい思い出なのだから。食べたいものはたくさんあったのに、滞在が短いめ食べられるものは制限された。マスタードやフレンチトーストも日本のものと比べてみたかったのに！今度は現地人が食べる実際のものを食べて、是非お腹をこわしてみたいものである。

（鈴木美咲）

旅のアルバムから



NGO・PAPRI が支援する少女グループ「キシュリ」(ノルシンディー県ナラヤンプル)



MY のデジカメに写った自分たち
に見入るキシュリのメンバー達



民族衣装、サロワ・カミューズを着てポーズをとる愛称ナウシカちゃん



お礼に曲を披露。 きゃりーばみゅばみゅ「つけまつける」は好評でした



UBINIG のダイニングで、代表のシャミン氏（黄色い服に茶系のストール）を囲んで



UBINIG の有機栽培野菜や魚を
スパイシーに味付けたご馳走



TUHIN 家の THITI がヘナ染
で絵を描いてくれた



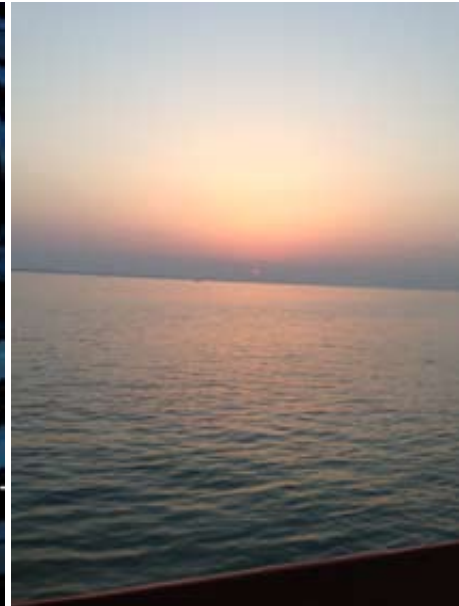
ジョソール県サティアントラ村で、既婚女性の正装 タンガイル・サリーを着て
(ちなみに右端の AZ だけはジャムダニ織り)



旧市街地 オールド・ダッカの路地を歩く



南アジアで一番大きいショッピングセンター
「ボシュンドラ・シティ」の天井



2月27日 PANSI NAO 号の船上から見た
ガンジス河に沈む夕日



UBINIG の Seeds Bank 見学中に撮られた夕日の
ベストショット





サリーを着てバングラデシュ風に髪を結った TL



TUHIN 家のゴットマザーにギュッと抱きしめられるAR と AZ



NGO・PAPRI が支援する女性ショミティ
(相互扶助グループ) の笑顔



ダッカ空港で JABA tour の出迎えを受ける
(左から 3 人目がアラムさん)



村の少女達との記念撮影でしきる SM



2 月 21 日言語運動記念日にショヒド・ミナールの前で



ダッカ大学の女子学生との船上でのワークショップの記念撮影

2月17(日) 1日目

成田空港からバングラデシュへ出発



8時40分に成田空港第2ターミナルに集合で、二人来ていなかった。朝はすごく寒かったけど、現地についたら気温がまったく違うんだろうなと思った。「風の旅行社」の原さんと先輩の杉本美紀さん(コミュニケーション学科3年)がお見送りに来て下さった。彼女はバングラデシュに3回行ったことがあり、「バングラデシュの良さはなんですか?」ときくと「人」とお話していた。前日は「バングラデシュでどんな出会いがあるのかな?」とFacebookに投稿していたので、緊張するけど期待が大きくなった。空港で歌の練習をしていると中国人に写メを撮られて、さっき杉本さんが「現



地では携帯で写メ撮られたりするよ」と話していたのに、行く前にもう撮られた(笑)と思った。そして向こうについたら小学校の国語の授業で紹介された、粘り気の無いサラサラのインディカ米もつ

いに食べられる!と、食事に関する期待もとっても大きかった。でも初インディカ米は成田から香港までの機内食だった。「生野菜はもうあんまり食べられないからサラダは食べて下さい」と言われて、「ふーん」程度に思って食べた。飛行機から降りるとき、ほとんどの座席の周りはいろんなものが散らかっていてびっくり。プランケットもビニールも雑誌も散らかし放題だった。illyでトロピカルスムージーを飲みながら入国前のレポートを書く。①バングラデシュに行こうと思った動機、②バングラデシュに期待すること、③どんな国なのかという予想、④どんな自分になりたいか、をそれぞれ書く。私は、今回の経験をいろんな人に伝えたいとか、食べ物に対する期待とか、人に対する優しさや自分の国を好きになりたい気持ちを書いた。他の人が話していた、「偏見のない国際人」という言葉が印象的だった。香港からの飛行機はとても人が少なくて好き放題移動できる。何人か民族はわからないけど、夫婦でけんかしている様子を間近で見て、女性よりも男性のほうが立場が上なのかな、と感じる光景だった。飛行機からおりるとき知らないおじさんに「ばいばい」と手を振られ、びびって笑顔しか返さなかった。ここはもう日本じゃないんだ、知らない人と関わる最初のチャンスが無駄にした!と若干後悔する。ものすごい灯油臭がして、日本とは違う気温を肌で感じる。パスポートとボーディングチケットを渡すと、英語でなんやかんやきかれ、入国に必要な質疑応答かと思ったので焦った。でも韓国人の女性が通訳してくれたのですごく助かった。外に出るまでに蚊が大量すぎてあっちこち刺された。柵の向こうでは、出稼ぎの家族を待つ人たちがたくさんいて驚き、すこしこわかった。2カ月ぶりの雨が降ったせいで空気はぬるい感じがした。JABA tourのお出迎えを受け、お花をそれぞれ頂いて車に乗って窓の外を見ると、頭に荷物を乗せたおじさんはいるし、走る車は車線や列を守らないし、信じられない車体の汚れに日本との違いを感じた。バスに乗る人も落っこちそうになっている。なによりクラクションの音がすさまじい。車の中も歩道も女性はほとんどいないけど、助手席に座る女性、歩道を歩く女性、赤ちゃんを抱いて住宅地を歩く女性をみてまったくいいわけではないわけではなかったので、私か読んでブックレットからずいぶん変わったんだな、と思う。ホテルクリ

スタルクラウンでフルーツジュースを頂いて部屋に向かう。建て付けの悪い引き戸や変な風に設置してあるトイレトペーパー、破損したコンセントやペーパーの流れにくいトイレにすごくわくわくした。親切にファンのまわし方を教えてくれた人に感謝しつつ1日が終わった。
(鈴木美咲)



2月18日（月）2日目

ホッタール発生、縫製工場見学、 ダッカ市グルシャン地区で民族衣装購入



初日から、ホッタールという野党の政治活動のゼネストに遭遇することになり、オールド・ダッカ観光を延期し、急遽、最終日に予定していた縫製工場見学になった。初めてバングラデシュに来た学生の私たちは、目に入るものが何もかも新鮮で車から降りた私は、きょろきょろ周りを見渡していた。工場と聞いていたが、外装は日本でいうアパートのような、入り口も細く、ここは本当に工場なのだろうかと疑問を持った。しかし、階段をゆっくり列になって登っていき、入り口の狭さに驚きながら入ると、その入り口からは考えられない、多くの女性と男性がひたすら作業をしていた。私が見た感じでは、男性2割、女性8割ぐらいだろうか？

フロアによって、作業が分かれているようで、上の階から下がってくるごとに服が出来上がっていくようになっていた。上の階までいき、服の各箇所の型紙をつくっているところから、大量の布を重ね、布を切っているところ、石鹸を使って、跡をつけているところ、



順々に見ていた。私としては、先生に以前貸していただき、観させてもらったDVD「ガーマット・ガールズ」（ダンピール・モカメル監督作品）の中にあった縫製工場の映像は、もっと雰囲気が高く、怒鳴り声があがっているものだったため、私たちが見学しても大丈夫なのかと感じたが、ここの工場は、ひたすら作業をしているが、そこまで重々しくなく、外国人の私たちを見て、少し不思議がっていた。私たちは、まわりをゆっくり歩き、ほとんどが女性の中、アイロンがけを男性だけでしているのを見た。これは、女性は男性よりも体力がないため、女性がやるとすぐ、疲れてしまうので、男性の仕事になっているようだ。また、その工場の社長の方とも、お話することができ、話を聞いていくと、その工場が使われる糸や布は全てバングラデシュ製で、デンマークやアメリカ、ドイツに送っているようだ。また、この工場で働くほとんどの人が村から来ていて、女性は、9割が結婚して、女性を考慮しており、女性は朝遅く、夕方早く帰ることが認められているため、その分男性に負担がかかってくるという。また、この工場は入ってすぐに仕事はさせず、3、4ヶ月丁寧に訓練させてから、仕事をさせる。そのため、ミスをすることが少ない。しかし、1つのフロアが気を抜くと、100万円単位の損害が出てしまうため、次々に仕事を入れていくという。また、嬉しかったのは、この工場で働く人々は仲が良く、その日の仕事の出来具合でお互いの体調を見るという。また、社長さんに、何故縫製工場をしようと思ったのか尋ねたところ、親類に医者が出たが、時代に合わせたチャレンジ、ニュービジネスをやりたいかったのだという。また、この仕事していて楽しいことは？という質問には、私は、英語を話すことが出来るので、依頼人の外国の方とコミュニケーションをとることが出来るし、時間通り、約束通りに仕事ができるのが楽しいという。縫製工場を直接見たことがなかったこと、たくさんの人が同じものをたくさん作っていくこと、難しいことだと思う。私は、実際に見たが、実践したわけでもない。また、私たちが訪れた時期は、春になりかけの冬というものもあって、夏になったら、気温はさらに高くなり、窓もあまりなく、入り口も狭く、空気の通りも悪いと思う。そんな中での作業はこの時点でも大変にも関わらず、何倍も大変になるに違いない。勿論、私を考え

ている以上に変なことはたくさんあるに違いないと関心したのと同時に、考えさせられてしまった。

私たちは、工場を後にし、私たちが二週間着ることになる民族衣装のサロワ・カミューズを買いにフェアトレードのお店を回った。やはり、私たちも女子大生ということでファッションには敏感だ。たくさんのサロワ・カミューズを目にし、自分に合った色、気に入ったものを試着したり、みんなに意見を聞いたり、目を光らせて品定めしていく。ARONG → JATTRA → KUMUDINI と三店舗周って、全員それぞれ自分が気に入ったサロワ・カミューズを3着ずつ購入した。途中、JABA TOURのオフィスにお邪魔させていただき、お昼を用意していただいた。バングラデシュに来て初めてのベンガル料理。私たちは席に着くだけで、スタッフの方たちが何から何まで、準備してくれた。ときどきしながら、食べる。お、お、おいしい!! 私は、カレーが好きでルーから手作りするくらいのカレー好きだが、やはり本場に敵うわけもなく、日本に帰ったら実際に作れるように味わいながら、たくさん食べた。その後、今回私たちの研修をサポートしてくれるアラムさんに、アラムさん自身について話を聞いたが、この時点で素敵な人だと強く感じた。知的で、自分のことだけではなく、他人のこともしっかり考えており、家族を愛している。だからこそ、アラムさんの周りの人も素敵な人ばかりなのだろうと、この日の天気は春のような天気で、そんなことを思いながら、ゆっくりとしたお昼を過ごした。

そして、夜はホテルで夕食。六人前のチャーハンを頼んだら、どう考えても10人以上以上はある量が出てきて、私と、MMと頑張ってたくさん食べたが、食べることが出来なかった。この日は、お買い物も、食事も大満足で眠りについた。（松崎史帆）



2月19日（火） 3日目

ダッカのスラム街とノルシンディー県の 地元NGO「PAPRI（パプリ）」

朝 5:30 起床。実際は 5:47。なかなかすっきり起きられない。
朝は苦手！

ホテルで朝ご飯 6:15。豆カレー 油で焼いたルティーに似たもの、ジュース、野菜いため、食パン。バターがなぜか水に浸かっている（小分けにしてあるバターが溶けてひとかたまりにならないため、と後で、先生に教わる）。

東先生が来ない（笑）。寝坊かなってみんなで話していた。6:30 になっても来なかったら呼びに行くことに。で、呼びに言って来た。バックグしていたらしい。7:00 ホテル出発の予定が、フロントでの支払い等で結局 7:20 過ぎに出発。車で 20 分くらいかけてスラム街へ、アラムさんと「カオランバザール（ダッカの卸売市場）」の脇のスラム街で待ち合わせ。7:45、アラムさんと落ち合う。昨日はホッタルだったので、道が空いていた。今日は道が混んでいる。これが本当のダッカ。空気も少し、石油臭い。クラクションが鳴りやまない。車もリキシャもぶつかるんじゃないか、ってぐらいいりぎりぎりで進む。でも、ぶつかったりしない。さすが、うまい。

●スラム街の衝撃。

臭い、臭いが本当に強烈。魚と泥と腐った野菜と香辛料と生活している人の交じった臭い。正直、とてもくさい。香辛料の刺激、人々の生活、歩くとも地面に腐った野菜が積もっていて歩きづらい感覚、全てが衝撃。

女性が料理をしていた。ハエがすごく飛んでいるところで。全く気にしてはいないと思う。灰で食器を洗っているところもしっかり自分の目で見られた!! でも、汚れが落ちているようには見えなかった!! どんこの地面に置いて洗っているし、まして洗った物も地面に置かれているし。

鶏のメ方、魚の裁き方、売り方、野菜果物香辛料の売り方も、テレビでしか観たことのない内容だった、でもそれが本当だった。

スラムの子供たちはすごくシャイ。昨日の製糸工場の女の子たちは私が笑うと恥ずかしそうに笑い返してくれた。でも、スラムの子どもたちは、逃げていたり、困惑した顔をされた。唯一笑顔の子どもの写真をマキリカから拝借。



少し立ち止まるとたちまち自分達の周りに人ばかりができた。

電車に無賃乗車する人も、生ではじめてみた。あんなに風が強いのによく屋根の上に座っていられるなあ、しかも、みんな線路を歩いていたのに、電車が来ると普通にさーっと退いていく。私たちは電車が通ることにとわりと困惑した。一歩タイミングを間違えると大変なことになる。さすが、住んでいるだけある。親切な人達が声を掛け合って皆無事に退いて電車が通る事ができた。携帯電話を使っていることもびっくり!! スラムの人達も、携帯電話を持っているのか!そして、電波もあるのか!

言葉の意味はわからないけど良いことも悪いこともいろいろな事を言われているのはわかった。そのリング素敵ね、ピアス素敵ね、若者には良くない事を言われているのを感じた。少年がずっとついてきた。とにかく日本人が珍しうだった。写真もいっぱいとられた。

ダッカを出て 1、2 時間すると、渋滞も少なくなってきた。でも、クラクションが鳴り止むことはない。においも、草や自然のいい匂いになってきた。ダッカはあまり深く呼吸できなかったのが気持ちいい。野ヤギや野牛が見られるようになる。途中、アラムさんがコーラとポテトチップスを買ってくれた。ロゴがベンガル文字でかっこいい!

パプリに着いて、まずはお昼ご飯。初めて手でいただいた。お米

のサラサラ感にとっても苦戦。なかなか食べられない。カチャモリス（青トウガラシ）を食べた!! 最悪!! 辛い!! とても辛い痛い辛い! 最悪! 口の周りの痛さと汗が尋常じゃなかった。スープカレーとご飯にお塩をかけたなんちゃって塩おにぎりでなんとか回復。その後、初めて自分でお水を流すトイレを体験。ペーパーは備え付けてあったのでまだ楽だった。その後レクチャー、パプリの活動についてお話を聞いた。授業で聞いていたことそのままだった。



キシュリの村に行った。すごく子どもがかわいい!! ほんとうにかわいい!! 素の全力笑顔! 私たちのお話もすごく真剣に聞いてくれて嬉しかった。私たちのベンガル語の自己紹介もちゃんと伝わったみたい。キシュリの子達に将来の夢を聞いたとき、みんな即答だった。自分はまだ何も考えられていない。恥ずかしいなと思った。

帰ってもう一回レクチャー。バセットさんの local の問題は local で解決したい、それに全力で応援する気持ちがすごく伝わってきた。

夜ご飯、辛さに慣れてきたかも。お腹がパンパン。

顔洗ってのはみがきしようとしたら洗面所がアリの大群と翅アリだらけで怖すぎてやめた。

夜、パプリのスタッフさんと、近くに住んでいるであろうおじさんたちと、たくさんお話した!! すごく楽しかった! ベンガル語ほんっと何も知らないし言葉が通じないって本当大変だと思った。でも、一人英語ができるおじさんがいて、かなり助かった感じ。お互いのことをたくさん話し合った。スタディーツアーとかでは聞けない個人的な生活のこととか聞けて楽しかった。かなり長い時間おしゃべりして就寝。つたない英語だけどちゃんと伝わったときすごく嬉しい! (諸橋菜美)

2月20日（水） 4日目

村の女性との出会い、ストリートチルドレンとの交流



6時過ぎに目を覚まして部屋から出ると、朝焼けがきれいに見えた。木々が池に反射して、青とオレンジの空が目前に広がっている。村の朝は、車の音ではなく鳥の鳴き声が聞こえてくる。ダッカとは異なる時間の流れ方を感じながら顔を洗った。

7時10分くらいにゲストハウスを出発。車に揺られて25分、アムラボ村の小さな市場に到着した。市

場ではトマト、じゃがいも、唐辛子、小さい玉葱にニンニク、豆類…たくさんのもを売っている。市場の片端でピタ屋さんをしている女性に話を聞くことになった。ピタというのはお米と塩からできた薄味の平べったいパンのようなもの。その女性の一日の売り上げは200～250タカ。米粉を買い、薪を買い、ピタを作って売って、子どもの教育費などに使うらしい。小さなお店だが需要が多いのか月給は5000タカほどで、わりと安定した生活を送れているようだ。

市場から離れて大きな橋のあるところまで歩いた。橋近くの景色は絶景。青い空と川、緑の田んぼ、目の前に広がる壮大な自然はずっと見ていたくなるほどだった。

ゲストハウスに戻って朝食を済ませた後、今度はアミヌプール地区へ行って、「アミヌプール・ベリン・モヒラ・ショミティ」という女性のショミティを見学した。30～40代中心で子どもがいる人も多い。彼女たちは、マイクロクレジットという銀行からお金を借りることができない貧困層の人たちのための小規模無担保融資を利用している。黄色いカードはいわゆる通帳になっており、写真、名前、住所などが記してある。また、それとは別に青いカードと代表者の持つ大きな冊子があり、この2つには借りたお金、返したお金、貯めたお金などその人が利用しているお金の動きがすべて日



付と共に書かれていた。彼女たちに借りたお金をどう使うのか質問してみると、「牛を買うため」、「リキシャを買うため」、「農業をするため」となかなか積極的な答えが返ってきた。この答えが何を意味するかというと、彼女たちの経済への挑戦だ。そのときお金がなくて困っているから借りるというよりは、生活を向上させて利益を得るためにお金を借りるというのだ。たとえば牛を買うとすると、その牛を世話して牛乳を作り、それを売って利益を出す。毎月少しずつ返済し、同時に貯金もする。その動きをきちんと記すことで、自己管理能力も上がる。またこれだけ細かくお金を管理することで、責任感が生まれ、経済的自立を促すのではないかと感じた。そしてプラスになったお金はどうするのかといえば、子どもの教育費や病気になった時の保険だという。

マイクロクレジットはここにいる人たちの生活を支えているのと同時に挑戦する機会を与えている。私は村の女性たちの前向きな努力と挑戦への意欲、家族への愛情に出会うことができた。

昼食の後、1時過ぎにゲストハウスを出発したが、ダッカへの道が渋滞してストリートチルドレンと会う時間は4時を過ぎてしまった。薄暗くなったダッカ市内の細道で車を降り、ジャトラバリ・ドロップ・イン・センターという、NGO「オポロジェヨ・バングラ



デシュ」が経営するストリートチルドレンが利用する施設を訪問した。

まずトイレを借りようとしたため、中に入って1分くらいで交流が始まった。いきなり私たちの名札を読んで名前を呼んでくれて、皆にこにこしながら笑顔で話しかけてくる。分かったり分からなかったりする言葉は英語を交えたもので、ジェスチャーや書くことも駆使しながらいきなり衝撃的な素晴らしい体験となった。別の部屋へ移ってドロップ・イン・センターの代表のアラムさん（JABA tourのアラムさんと同姓）のお話を聞く。ストリートチルドレンのことを本当によく考えている素晴らしい方で、子どもたちの大人に対する信用を取り戻し、学校に通わせたり就職させたりするために努力しているそうだ。大きな部屋に戻ると子どもたちが座って待っていて、私たちのために歌やダンスをいくつも披露してくれた。私たちが歌を返したけれど、まだまだ伝え足りなかった。その後は、6つのグループに分かれてそれぞれ質問し合ったり一緒に歌ったり踊ったりしながら交流した。

ストリートチルドレンは皆幸せそうに笑っていて、全くかわいそうだと思わなかった。彼らは立派に育っている。（荒牧里佳）

2月21日（木） 5日目

バングラデシュの文化と自然の豊かさ（目には見えない豊かさ） に触れた一日（タンガイル県で）



昨晚、UBINIG に向けての荷造りと洗濯に追われ、睡眠時間あまり確保出来なかったのも、少し眠かった。朝食を済ませ、予定より遅く 7 時 20 分にホテルを出発した。今日は、ベンガル語国語化運動記念日のため、祝日で学校も会社もお休みだ。

1947 年に、宗主国大英帝国が去り、宗教を基にインドとパキスタンに分けられ、パキスタンは西パキスタンと東パキスタンから構成された。東パキスタン（現バングラデシュ）では、ベンガル語が使われ、西パキスタンの人々が使用するウルドゥー語とは異なることを国語とし使用していた。両言語は、日常の言語としてはかなりの隔たりがあった。パキスタン政府は公用語としてウルドゥー語を掲げた。そうなると、バングラデシュの人々が公職に就くとするならウルドゥーを学ぶ必要がある。ダッカ大学の学生が、1952 年 2 月 21 日に抗議活動をした。デモ隊に警官は発砲し、死者が出た。学生たちは、命に代えて言語（ベンガル語）を守るために立ち上がった。勇気ある学生たちが倒れたダッカ大学の構内に「Shahid Meenar」（言語に殉じた若者たちの碑）が建てられた。人が命に代えて言語を守ったのは、歴史的に初めてのことで 1999 年にユネスコは、この日を国際母国デーに制定した。

記念式典を見学するため、JABA TOUR のスタッフのルベルさん、バブさん、モニさんもご同行。7:50、ダッカ大学に到着。ダッ



カ大学の敷地に入り、構内を見学し、言語運動記念碑「Shahid Meenar」に向けて歩く。ダッカ大学の敷地は広く、中には歴史的建造物も見られた。記念碑に行くまでに、献花の花や国旗が色々なところで販売されていた。献花のために、多くの人の長い行列が出来ていた。私たちも大学を代表して、式典のために花束を持参。記念碑の入り口に到着すると、たくさんの現地マスコミが待機していた。外国人が献花に来たということで、最初に SATV から取材を受け、東先生や学生がインタビューに答えた。靴を脱いで、記念碑に献花するときには、たくさんの TV 局のカメラに囲まれ、身動きが取れなくなった。私たちへのインタビューは、その日の夕方と翌朝のニュースで放送された。中央の大きな碑が母親とバングラデシュを表し、横の碑が子どもたちと勇士たちを表し、お母さんたちが子どもたちを守れなかった申し訳ない気持ち、母が頭を垂れる姿を大きい碑の傾斜が表現している。後ろの赤い円は、死んだ若者の血を表している。碑の前には、献花された花を使ってアートをしていた。とてもきれいな光景だった。その後、ダッカ大学内で開催されている、「図書祭り（ボイ・メラ）」に向かった。「図書祭り」では、ベンガル語の様々なジャンルの本や詩が売られていた。見学していると、なんと、バングラデシュに行く前に私たちにベンガル語を教えて下さったジュエルさんが登場。ジュエルさんは作家であり、毎



年、この「図書祭り」で自分の本を出展しており、そのためにバングラデシュに戻ってきたそう。カフェで、甘めのコーヒーを飲みつつ、休憩し、ジュエルさんと談笑。ジュエルさんは、今年は、物語の本を出展しており、半分は日本を題材にしたものを書いているそう。東日本大震災もテーマに取り上げていた。バングラデシュでは、製本するのが早く、安い。ジュエルさんと別れた後、車まで、馬車に乗って移動した。ダッカ大学の周りを行進するのに、3 キロもあるそう。同行した JABA TOUR のスタッフ 3 人と別れた後、グラミンショップにて、サリー、ピアスなどを見た。ついでに、隣接するグラミン銀行本店ビルを外から眺めた。祝日なので、グラミン銀行もお休みだった。UBINIG のあるタンガイル県に向け、トラック川沿いを走行。12 時 30 分に、沿道のビザ屋さんで昼食。チーズ、サラミ、アンチョビの 3 種類のビザとポテト、ガーリック風味のマッシュルーム、クリームパスタを食べた。ビザの生地は薄いタイプだったが、大変おいしかった。店内には、きれいな格好をした現地の人や欧米人がいた。

再び車に乗り、15 時 40 分に UBINIG のゲストハウスに到着。フィールドワークまで、ヤシの実ジュースを飲み、バドミントンをしたり、外でお昼寝をしたり、各々の時間を過ごした。村の中にも、「Shahid Meenar」の記念碑があった。その後、この地域特産のサ



リーなどに使われるタンガイル織の工房を見学。19歳の少女が、機織りをしていた。この工房は、機織りの研修センターにもなっているそうだ。作った分のお金が彼女たちに入るそうだ。UBINIGの有機農業リソースセンターを視察した。そこでは、チキンナゲットなどに使われるマスタードの菜種が干されていた。干された菜種は、牛が引いて搾るそうだ。また、女性たちが、麦や米などを使ってポップライスやコイ（コメなどを薄く潰したもの。カレーやヨーグルトなどに混ぜて食べる）を作っていた。焦げないように作るのには、火加減が重要で、職人技なのだ。

UBINIGでは、農民に農作物の品種を保存させる活動をおこなっている。“ノヤクリシ・アンドロン”と言って、新しい農業運動を行っている。農民と一緒に、作物がいつ、どこで、どのような土地で出来たか、適しているか、一週間でどのくらい育つかを、研究、記録している。この村のコメや麦の品種は、元々14700種類だったが、今は2470種類だ。米などの品種の種籾を瓶や壺に入れ、倉庫に保存しており、まさにそこは、Seed Bankであり、遺伝子のプールだった。ジュートで出来たシイカ（縄みたいなもの）で、瓶をつるし、ネズミが近づけないようにしてあった。

村を散歩していると、丸い鳥の巣やジャックフルーツといった木々や、コリアンダーなどの野草がたくさん生えていた。視察から



帰ると、紅茶とマスタード付のピタで休憩。18時から、UBINIGの文化プログラムに参加し、村人による歌と踊り、喜劇（滑稽劇）を鑑賞。バングラデシュの文化の奥深さに触れた。言葉はわからなくても、表情や仕草で何を表現しているかは感じる事が出来た。

夕食は、地元の有機野菜を使った伝統ベンガル料理を食べた。ここでは、生野菜の調理が安全なため、生野菜も食べることが出来た。

食後、UBINIGを経営する共同代表のシャミンさんからレクチャーを受けた。UBINIGは、NGOではなく、株式会社として政府に登録している。そのため、政府が何か牽制してきても対等に闘えるため、NGOと違い自由に活動を行っている。農産物の研究活動と村の伝統産業の技術向上を図り、村の自然、伝統文化を守り、生かしCommunity Based Tourismを展開している。村には、豊かな有機農産物や伝統的機織り、竹細工といった産業があるため、お金でお金を生むマイクロクレジットはやってはおらず、やる必要がないのだ。メジャーNGOがやるような、ダム、学校などといったインフラ建設といった第一の開発ではなく、何か他の開発はないかと模索し、第三の開発、そこにあるものを生かす開発（村が持つ、伝統産業、有機農業の向上）に着目したものだ。無農薬農産物を通して、人々の健康的や環境のことも考えていた。また、女性は家族の中心であるため、女性の考え、立場も重要と考え、女性のた



めの出版会社も設けている。シャミンさんのレクチャー、農村の暮らし、農業、文化から、この世には「目に見える豊かさと目に見えない豊かさ」があるということを知った。

22時30分過ぎにこの日の日程は終了した。（宮野有紀）

2月22日（金）6日目

村の朝市見学、農家や村人の生活見学、 タンガイル・サリー織



この日は、朝早く起きて自転車に乗って、ノルショータバザールと言われる村の朝市に行くことに。先生と、MYさんは休息。少し肌寒いが、久しぶりの自転車に気分が上がる。しかし、道が細かったり、でこぼこしていたり、何よりサドルが高すぎて恐怖のサイクリング。しかし、誰よりも怖かったであろうSMさん。私は直接見ていないが、MMさんとアラムさんの証言によると、木と木の間に消えて行ったとか…見たかった。しかし、怪我はなく、アラムさんが言うには、“ぶつかってみた”らしい。そんな愉快なハプニングがありながらも何とか、朝市に到着。そこは、そんなに大きくないが、野菜が売っているところと、魚が売っているところ、牛乳が売っているところなどと分かれていた。もう当たり前になったかのように、私たちの周りに人が群がる。魚を買ったり、卵を買ったり、私とSMさんでゆで卵を食べることにした。私は殻を割る時点でどのくらい力を入れていいのかわからず、日本の卵と違うのかと、力を入れすぎて潰れた…。しかし、味は日本の卵と変わらず、おいしかった。その後、一通り朝市を見学し、紅茶を頂き、SMさんは行きよりも慎重に帰りは帰ってきたことだろう。そして、ゲストハウスに帰ると、朝市で、食べることの出来なかったビタが！！！！！！想像した以上に、甘くて美味しかった。見た目は丸い白い、粗めのパウンドケーキのようなものの中にサトウキビの砂糖が程よく溶け



て、香りも香ばしい。朝食前だったが、何人も2つペロッと食べてしまった。そして、朝食を食べ、アティア・モスクに。お祈りの人たちが来る前に行ったが、自然の中に佇む古い伝統的なモスクは、どこか神秘的なものを放っていた。アラムさんに、そこでのイスラム式の体の洗い方を実際に見せてもらい、その場を後にした。

次に、村の無農薬農家をしている家に向かった。その家には、敷地の中にたくさんの種類の野菜、果物、なんでもあった。その家の夫婦のマイヌディンさんとリナさんに話を伺ったところ、最初に始めたのは、リナさんと、マイヌディンさんたちのグループだけでやっていた。周りには、肥料なしでやっても、収穫も多くない。しかし、いろいろ比較すると無農薬の方がいいとなり、100人しかいなかったが、今では4～500人もの無農薬栽培をしている人がいるという。米、油、野菜、果物、豆、200弱の種類があり、自分たちの分まで余ったものは売ってしまうそうだ。また、だいたい他の市場で売るよりもUBINIGは高く買い取ってくれるのでUBINIGに売るそうだ。一番儲かるのは、野菜、じゃがいも、菜種で、1年間取れるものを栽培し、たまねぎは時間がかかるのでやらないという。大変ではないのか？と尋ねると、体は大変だが、肥料にお金をかける必要がないのと、家の中でたくさん採れるので、自由に自分たちで使うことができ、一番嬉しいのは、毒なしのものを



食べ、健康でいられることだという。またリナさんは、こうゆうことを頑張っていることで、外国人がわざわざ来てくれると、お茶目なことを言うてくれた。そこにいた子どもたちも可愛かった。次に、タンガイル織を見に。私は、なんとサリーを2つ買ってしまいう事態発生。最初に見たも手織りのものに気に入ったのだが、二つ目のUBINIGのゲストハウスの隣の家は、家族二代でやっていて、柄の1つ1つが大きく、色鮮やかで、あまりの綺麗さにうっとりしてしまうほどの、素敵なサリーだった。また、ジャックワードというフランス人が開発したパンチングカードを応用してデザインを織り機にかけられる織り方が特徴で、そのサリーは賞を取るほどのものであった。現在は、息子の代になり、父親が考案した織りの図柄を息子がコンピューターデザインで行っているが、それでも機織り機で地道で緻密な作業をしているのを見た。直接、そこのお父さんに話を聞かせてもらい、そのあとは、みんなでサリーを選んだ。最初私はすでに買ったからと、見る気がなかったが、出てくるサリーがどれも素敵すぎて、我慢できなくなり、結局私も買ってしまった。息子さんたちの笑顔が素敵だった。あとは、ゲストハウスに戻り、少し仮眠をし、夕食を食べた。ここの夕食に出てくる野菜は本当に美味しい。特にバングラデシュのジャガイモは本当に美味しい。そのあと、ふりかえりをそれぞれにし、部屋に戻った。（松崎史帆）

2月23日（土） 7日目

地元の研究機関「UBINIG（ウビニック）」と、 Shikhipori 小学校



6:25 一階集合、35 分くらいに出発、集会所に。もう既に村人たちは集まっていてお祈りしていた。女性は少ないけれど居た。集会場に行く途中も何人もの村人が活動していた。

バングラデシュの人たちの朝は早い。まだ日の出前。私たちも加わって 1 曲目 牛を持って畑に行こうよ という歌。2 曲目 さっきの返事の歌。皆のこと面倒みないといけない。【ラロン】3 曲目

皆アッラーに感謝している。誰かに、何かに、生かされていることに感謝する歌。【ハント】4 曲目 モハメッドの歌。神様自然が傷つかないような生き方。そうすればあの世でも幸せになれる。【ナット】

これからの一日や仕事に気合入れて頑張るために歌う。これで気合い入るとかすごい。私だったら 1 分でも長く寝ている方がその日一日頑張れるかも。笑

帰って朝ご飯。卵焼き、ルティ、瓜のカレー、豆のカレー、ミスティーは、飲むヨーグルトに似たものと、半分凍ったシャーベット状のものだった。これがすごくおいしくてみんな好評だった！シロップをかけるともっとおいしい！

食事の後、UNIBIG の共同代表のシャミンさんのお話を少し聞いた。私たちの活動を見に来てくれてうれしい、ありがとう、感謝の言葉をいただいた。シャミンさんの人の良さがすごく伝わった。人として、



ブシガッドトラ。土地は買った。UBINIG のもう一人の共同代表のホラハッダさんが金持ちだったからこの土地が買えた。シャミンさんはここに暮らしていた。昔はこの池の真ん中に偉い人が集う、家があった。とても涼しい。むかしはたくさんの偉い人が来ていた。

今は種を広める団体を作っている。7 人の人がやっている。種は魂でもある。人間の教育も。ビスパウンディション。知識の種。人間の種。種にはいろいろな深い意味がある。チュンヌさんはビジネスマンではなく、現地で働く、フィールド上で働くコミュニティワーカーがモットーだと言っていた。

10 時くらいから子供とあそぶ！

折り紙で扇子帽子など、葉っぱで蛇や水をすくう小道具などつくってくれた。遊ぶのが上手。日本の子どものような、ゲームや遊具などなくても充分楽しく遊べる。たくさんの遊び方を知っている。10 時 30 分くらいから縄跳び！一緒に跳んだり、とても汗かいた！

最後歌を歌ってくれて解散。子供の笑顔はやっぱりいやされるけど、笑顔の重みの違いを感じた。笑顔全て良いものだけど、私は、ストリートチルドレンの笑顔の方が心動かされるものがあった。辛い環境でも笑顔が見せられている子供の笑顔の方が、私は、とても重く感じた。

素敵だった。なおかつ、お洒落。フェリス大のリーダー二人がお礼の言葉を言ってシャミンさんとは、さよなら。

8:50 Shikhipori 小学校へ出発。9:35 到着。UBINIG が来たとき、この地域では、健康と勉強が遅れていた。1986、7 年、学校を作った。UBINIG のスタートはここから。第一の事務所はここにあった。スタッフのチュンヌさんは UBINIG に来て 12 年。この村の名前、ル



お昼ご飯に行く途中、細い脇道のすきまにサリーを作っている女性を発見！じーっと覗いていると、こっちへおいでよ、と呼んでくれた。そのいたラッキーなメンツだけ見られた。

12:15 分～村の伝統的な食べ方で村の料理をいただく。茄子、チキンのカレー、ゴマのすりつぶしたもの（ポッタ）、カリフラワーの辛いカレー、緑の野菜 2 種類、魚、バナナ、茄子おいしい！！野菜がすごくおいしい！！

13:05 UBINIG 出発。16:00 ホテル到着。休憩。18:30 ご飯。ヌードルスープ、炒飯、鶏肉とカシューナッツ、チンジャオロース、野菜炒め、スプライトとダイエットコーラで乾杯！！冷えた炭酸おいしい！！

19:30 解散、3 泊 4 日のサティアント村にむけて準備、22:00 早めの就寝。
(諸橋茉美)

2月24日（日）8日目

バングラデシュの人の優しさが印象に残った日

滞在中2回目のホッタールの影響のため、当初の予定より早く、5:30、朝食。この日は、船上でも朝食を食べるため、水とケーキとバナナと軽めだった。6時にホテルを出発。ホッタールのため、ほとんど車が走っていない、警察官や警察関係の車両を多く目にした。ホッタールが激化する場所を無事通過し、マワ地区に向かった。途中、美しい朝日を見た。バングラデシュで見る太陽は、とても大きく美しくよく輝いている。アラムさんの故郷ムンシゴンジ県スリナガル村も、途中通過し、アラムさんの経営しているバスや所有している土地、故郷の友達も目にした。アラムさんのお父様に偶然に出会い、市場まで一緒に乗車した。85歳で、杖は使っているもののお元気そうで、顔がアラムさんにそっくりだった。マワの魚市場に到着し、日本では見られないような珍しい魚が見られた。ここでも、市場は、人々が活気に溢れていた。シラスや、イリシュ・マース（国魚）、エビを購入。8:30、伝統的クルーズ船 PANSI NAO 号に乗船。ガンジス河を初め目にした時は、海ではないかと思ってしまうほど、対岸までとても遠く、広大だった。船上で、大阪大学の一行（学生6人と引率の先生3人）と合流。大阪大学の方はホッタールの影響により、ダッカ市内での活動を止めて、ガンジス川の川下りに変更したようだ。ダッカと UBINIG に10日間滞在し、“貧困撲滅のためのモノ作り”の研究をするために訪問するらしい。乗船後、お互いの自己紹介をし、朝食。9:10 ガンジス河の左岸のベドウイン族の村を訪問。小学校や市場を見学。村のおばさんによる手品を鑑賞。12:20-13:10 右岸の（中州の）西ナウドゥバ村（ベンガル語で、船が沈む村）を訪問。村人の生活を見学。授業でも見た、バングラデシュの包丁を実際に使っている姿を見ることが出来



た。見学中に、トマトとお花をもらった。村民は、中州に住んでいて、イスラム教徒で、中州まで公共サービスが行き届いていない、学校に行っていない子どもが多かった。また、外部の者があまり来ないため慣れていないのか、シャイな子が多かった。どちらの村でも、子どもたちは、どこに行くにも私達について来て、船が見えなくなるまで見送ってくれた。13時過ぎに船上で昼食。朝、市場で買った、ガンジス河の魚が料理された。15時、対岸のフォリドプールに着き、ジョソールに向かい車で移動。東先生の風邪が悪化し、声が出なくなる。16:30、ホメオパシーの薬屋で薬を処方される。カルナガットの茶屋で休憩していると、この地域では、ほとんど外人を見かけないため、私たちは地元の人に取り囲まれてしまった。すると、チャイ屋のおじさんが、「私の客に迷惑を掛けないでくれ」と親切に追い返してくれた。また、近くにいた地元の警察官も協力し、交番を休憩所として提供し、チャイまでご馳走になり、フェリーまで私たちを送ってくれた。バングラデシュの人の優しさに触れた。メンバーのなかには、風邪で声が出ないためお礼が言えないもどかしさと優しさに触れ、涙を流していた人もいた。

19:30、ジョソール県サティアント村 TUHIN 宅に到着。私達のベンガル語による自己紹介とプレゼント交換をした。プレゼントに、緑の素敵なショールを頂いた。東先生は、声が出なくなったため、筆談を交えて会話をした。夕食は、伝統的ベンガル家庭料理を振る舞って下さった。テラーを家に呼んで、サリーのブラウスとベチコートのために採寸をして、この日の日程は終了した。（宮野有紀）



2月25日（月） 9日目

ジョソール県サティアントラ村での1日

サティアントラ村に来て初めての朝。中庭を見ながら、ホテルでも今までの村でも食べたことのない、女性たちが作ってくれたおいしい朝ごはんをいただく。今日は1日サティアントラ村についてのフィールドワークだ。

9時過ぎに TUHIN さんの家を出て、マップを見ながら村の中を散策。多くの家で牛やヤギを飼っているようで、道を少し歩くだけでいたるところに動物がたくさん目に入る。庭の方を見てみると、牛フンの利用率が高く、ほとんどの家できれいに整えて干されていた。他にも竹の根やヤシの葉などを肥料や焚き付け、ほうきにしたりするようだ。一見ゴミになってしまいそうなものも再利用して自然に返す。そのことを工夫している、と捉えるのではなく、あたりまえにどの家でも行われているところが素敵だと思った。ある家の中庭でカタを作る女性がいたので早速インタビューをすることになった。カタとは着古したサリーを数枚重ねて刺繍を施したもの。家庭の仕事をしながら余った時間でつくることが多いそうだ。女性のたしなみで、だいたい結婚してから始める。いくつものカタを見せてもらったが、どれも素敵で凝っているものが多かった。自分のカタは母のサリーを使っているなど思い入れのあるものもあるようだった。また、他の人のものを作ってあげることもあるという。少し歩いていると、偶然グラミン銀行のショミティに遭遇して、見



学させてもらうことに。マイクロクレジットを始めたグラミン銀行だけあって、メンバーは142人もいるそうだ。そしてその下に15のグループがある。ショミティのメンバーにはイスラム教の人もヒンズー教の人もいて、もめ事もなく決まりを守りながら皆仲良くやっているようだ。イスラム教とヒンズー教が共存するこの村だからこそこのショミティである。また、貯めたお金は個人のためだけでなく、村の木を植えたり乞食に渡したり、村のこと、貧しいひとのことを考えて利用していると話していた。

次にヒンズー教の人の家へ行ってお話を聞いた。特に驚いて感動したのは、結婚式などはもちろん、ヒンズー教の人のプジャというお祭りにイスラム教の人も招くということだ。宗教特有の催しものですらこの村では境目がなく、それを特別に思っていない村人たちがいるのだ。

TUHIN さんの家に戻って昼食をし、水浴びをさせてもらった。井戸で組んだ水をバケツに溜め、その水をすくって流すという人生初の水浴び。少し冷たかったが、汗を流せて気持ちよかった。3時半からは池のほとりへ行って、ヒンズー教のカティックさんにこの村についてお話を聞いた。彼は今78歳だそうだが、自分、父、祖父の代でイスラム教とヒンズー教でもめたという話は聞いたことがないという。イスラム教の人もヒンズー教の人も同じ母から生まれ



れた兄弟のように考えていて、神は違っても人間が幸せになるために言っていることは同じだというのだ。生まれながらにして共存していて、同じ場所に自然のままに暮らしている。だからお互いに何の偏見もジェラシーもないのだと。その後は午前中通らなかったルートで村を周り、大きな池やモスク、ヒンズー教の寺院などたくさんのものを見て、家に戻った。



夜は、ひとつの部屋にフェリス生と TUHIN さんの大家族とが集まって、ハルモニウムの演奏を聴き、歌を聴き、私たちも歌を返して…と文化を共有し合った。とてもあたたかくて大きな家族、豊かな心をもった人たちのやさしい空間の中で居心地の良い時間だった。子どもたちが寝てからは、TUHIN さんの家族にこの村のこと、生活のことを思うままにたくさん聞いた。村の人口や教育のこと、宗教のこと、女性の一日のこと。どれも村の様子を思い出しながら聞いていた。

この日はずっとサティアントラ村について自分の五感をフル活用して学んだが、村の人たちの自然への愛や寛容な心を、身を持って感じる事ができた。
(荒牧里佳)



2月26日(火) 10日目

サティアントラ村で、瞑想とサリー体験



5:30 起床
6:00 池のほとりまで散歩をする。
ヨガをしてココロとカラダをあたたためて起こす。
瞑想をして、自分のココロを客観的に見つめる。
池の周りをしゃべらずひとりで散歩して振り返りをする。
(ひとりで見ることに、考えることだけに集中すると、普段は見えない様々なことが見えてくると感じた。改めて、日本ではなかなかこのような壮大な自然を見ることは出来ないなあ、と感じた。)
池のほとりで振り返りを発表する。
(10日間、様々な職種、タイプの人々にインタビューを行ってきたが、どの人も自分が思っていることを早く、はっきり答えてくれたことに驚いた。それだけ自分の人生や、やっていること、考え方に自信や誇りを持っているのだな、と感じた。最近の日本人はなかなかそういうことが出来ない。日本に帰ったら、自分がやっていることに自信を持てるような、誇れるような努力をしようと思った。)
イスラム教とヒンドゥー教の共存について、村長を6期30年務めたムハマト・ロキーブ・ウッディンさんにイン



タビュー
9:30 朝ごはん
おいしいルティをいただき、3〜4枚食べてしまう。
10:45 10日間のフィールドワークのまとめ
(TUHINさん宅のベランダで)
(ダッカ大学の学生とのワークショップの予習)
議題
・ワークショップとは
・バングラデシュの良さ
・ダイヤモンドランキング
3人1組になり、各人3〜4つバングラデシュの良いところをポストイットに挙げる。その後3人でそれを9つに絞る。その9つを、1位、同率2位(2枚)、同率4位(3枚)、同率7位(2枚)、9位と順位付けする。ダイヤモンドランキングにタイトルをつける。(2班のダイヤモンドランキングのタイトルはそれぞれ、「FOR OTHERS」と「自然がうんだ豊かさ」。挙げられたバングラデシュの良いところはどちらの班も同じような内容だったが、順位が全然違うので興味深かった。わたしたちの班は良いとこ



ろの原因を考えて1番の原因になるものを1位においた。自然の豊かさが生活の豊かさを生み、人々の心も豊かにして人々を素敵な笑顔にする。という結論に至った。「FOR OTHERS」のチームはバングラデシュの人々を中心に考えていて、自然が生んだ豊かさはバングラデシュの生活の基盤について考えていた。)
中間レポートを書く(テーマ：わたしにとってのバングラデシュ)
中間レポートを書いて、一言振り返りをする。
13:00 お昼ごはん お昼ごはんを食べたあとと水浴び
15:00 サリーを着付けてもらう。村を散歩する。途中クリケットを見たり、紅茶をいただいたり。サリーを着るとサロワ・カミューズを着ているときほど人は寄ってこない先生がおっしゃっていたが、クリケットを見ているときも、紅茶を飲んでいるときも、人はたくさん集まってきて、写真をとられていた。
20:00 夜ごはん

(月谷梨沙)

2月27日（水） 11日目

サティアントラ村からレブトラ村、ダッカへ



朝、5時30分に起床。TUHINさんの家での最後の食事をする。三泊のお礼を言って、同じジョソール県のレブトラ村へ向かう。レブトラ村ではノクシカタ（伝統刺繍布）を縫う女性をたくさん見た。シャムスンナハルさんの家では作ったカタをNGOを通して販売する。家はコンクリートでできており、門は鉄。夫が薬局をやっているのもあって、中より上の生活をしている家庭のようだ。ノクシカタのビジネスが始まる以前は、それぞれが好きなもの、ヤシの木やふねなどを好きなように作っていて、それは頭のなかでまずデザインをまとめることから始まる。自分でイメージしたものもあればどこかで見たものを参考にする場合もある。今は好きなものをデザインして縫っているのではなく、外国人消費者向けのデザインを、専門家が介入してよりきれいによりはやく作ることが求められるようになった。「縫えるもの」を縫うだけでなく、難しいモチーフは「生命の木」「太陽」などで、自然のものをモチーフにするときれいだし、自らの文化や生活の証拠を残すことにつながる。シャムスンナハルさんがカタをはじめたきっかけは、彼女の母親がやっていたのを見たからで、カタはこのようにして代々受け継がれてきた女性の仕事なのだろう。だいたい1カ月くらい心をこめて縫えばきれいに縫えるようになるのだという。このノクシカタの元手は布代と糸代で2200タカくらいし、これを3000タカで売る。昔は1000タカでサリーのノクシカタをやっていたが、今では1500タカまで値上がった。この収入はほとんどの場合女性のものとなる。25年前と比べると女性の収入はぐんと増したので、好きなことを自由にできるようになった。なぜかという、好きなことをするお金を稼ぐ手段を持っているし、わざわざ旦那さんに相談しなくても

自由に使える資金を持っているからだ。ピアスなど女性的なものに費やしたり、子どものおこづかいや教育にまわしたりすることがほとんどだ。そのため、家庭において女性が使うお金が一番意味がある。教育や家計にたいしての出費がほとんどで、男性よりもその必要性を十分に吟味して慎重にお金を使う。だからシャムスンナハルさんの家ではマイクロクレジットを利用していないそう。それはただ単に必要なからである。しかし村にはマイクロクレジットがあって、なかには「ジャグルニ」「アシャ」と二つのショミティに参加している人もいる。資金が2度に分けて必要なときに利用するという。女性は自分の時間を経済にまわす。たとえば、時間があるときに自分の好きなようにノクシカタを作り、オーダーが入ればそちらを優先させて作り上げる。それが終わってまた時間があるときに趣味の方のノクシカタを縫う。

それから車で川岸に向かいPANSI NAO号に乗り込む。ダッカ大学の学生さんたちからお花をいただき14時20分昼食。15時から「バングラデシュの良さ」についてのワークショップを行う。マル×クイズで、「農村で暮らしたいと思うか」や「バングラデシュの女性はしっかりしている（賢い）と思うか」という質問で意見が割れた。私たちが見てきたのは、村のショミティで自分達の権利について学んだり、生活への向上心から新しい事業に挑戦する女性たちだったころ、ダッカ大学の学生のなかには農村の女性について詳しく知らない人もいたということで意見が割れた。ダッカ大学的女子学生たちは女性がまだ社会進出しにくくて、十分な発言権も持てていないとお話していた。ダイヤモンドランキングではダッカ大学の方は英語でどんどんアイディアを出すので、私たちは戸惑ったり圧倒されたり。私たちが出したバングラデシュのいいところには、人々の温かさや笑顔、農村の自然に根差した生活などが多かったが、ダッカ大学の学生が思うバングラデシュのいいところは食べ物や、ベンガルトラや丘やたくさんの川などの自然、ジャムダニ織りのサリーなどの文化が多かった。ワークショップが終わり

に近づくにつれて景色がきれいになってきた。

18時30分、上陸して車まで歩く。

18時40分、車で移動。翌日はホッタールなので私たちの車を



デモに使われそうになって、アラムさんが警官に対して怒る。

それからムンシゴンジ県スリナガル村の私立SIZUE小学校で、

ホッタールの前夜の混乱を避ける時間調整の為、のんびりする。着いたときは停電していた。教室を見ると教卓と生徒の席のあいだの、教室のまんなかにスペースがあったのできくと、教師が授業中うろうろしてすべての生徒の近くまで行けるように設けたスペースなのだという。現在は2階までだが、5階か6階くらいまでを建設中である。屋上にいくと星がたくさん見えた。当然日本でも見られるオリオン座だが、その周りにはもっとたくさんの星が見えたので、まるで別の星座であるかのように、より特別に感じた。この小学校は毎年、生徒の数が増すので建物の開発がぜんぜん追いつかない、とお話していた。

21時にケンタッキーフライドチキンで夕食をする。注文が終わったらアラムさんは帰った。KFCの値段は、一般的な家庭が利用する料理店の5倍はするので、ここには裕福な人たちが来ない。日本で食べるよりも濃い味がした記憶がある。私たちの周りにはずっと店員がうろうろしていた。

21時40分車へ戻る。お店をでるとおばあさんが手を差し出してきた。ここには裕福な人たちしか来ないから、お店を出た人を狙っている施しを求めるのだそう。すぐ横に来て目を見つめられたが、驚いたので私はサッとそらして首をふったり、掌を見せたりしてしまった。

それからホテルに戻った。

（鈴木美咲）

2月28日（木） 12日目

ダッカで3回目のホッタル。 ふりかえりのワークショップなど。



7:30 起床

8:30 朝ごはん

この日はホッタルのため午前中はパッキング整理をしたり、振り返りをしたり、ホテルでゆっくり過ごす。JABA tourのアリフさんが13:00に来るということだったので、11:00頃ゆっくりシャワーを浴びていたらアリフさんが到着したとの連絡が入り、焦る。

11:45 ARONG（アーロン）へ出発 お土産を買う
アラムさんのご家族と会う。

13:00 お昼ごはん 西アジアの炊き込みご飯「ピリヤーニ」を食べる。味はチキン、ビーフ、ラムの3種類。

14:15 高級スーパーマーケット「アゴラ」でお菓子や紅茶を買う。
みんなギリギリまでタカを使う。

15:00 ホテル到着

16:00 ふりかえりのワークショップ（～18:30）

3人1組にわかれて「FOR OTHERS」が「豊かさ」をテーマにブレイン・ストーミングを行って、最後は、画用紙にまとめて発表をした。「FOR OTHERS」の班は人々の



心の豊かさ、笑顔、優しさについて触れていた。「豊かさ」をテーマにした私たちは自然と生活の豊かさや文化の豊かさ、そこから生まれる人々の心の豊かさや文化の豊かさ、最終的に、GDPなどの数値データでは表せない、＜目に見えない豊かさ＞がバングラデシュには存在することに全員が気づいた。

中間レポートを書く タイトルは各自それぞれ。
一言ふりかえりをする。

19:00 グルシャン地区の韓国料理を食べに行く。注文しすぎて運転手のココンさんと呼ぶ。

（月谷梨沙）



3月1日（金） 13日目

ホッタール。オールドダッカ



ホッタールの影響で、前日の夜までに 50 人以上が犠牲（＝死亡）になった。朝、6 時 15 分起床。7 時荷物を出す。ココンさんとみんな写真撮ってから 8 時、車に乗る。オールドダッカの港に向かって、船着き場を歩いてみる。川の水は腐っているので硫黄臭が強い。乾期で一番おいがきつい時期らしい。雨季になると水の量はぐんと増すので、まだマシのよう。船着き場で仕事を探すストリートの子ども達はその水に飛び込んで水遊びをするという。私たちとは全然違うものすごい免疫を体を持っているみたい。カメラを向けると元気いっぱいポーズをとる女の子がいた。でも写真を撮ったらお金を要求してきた。荷物運びをするストリートチルドレンと出会って話を聞く。それとは対照的にとてもきれいなサリーを着た富裕層の女性も見た。見るからに一般人とは違う装いだった。そんな人と、横から笑顔で話しかけてくるストリートの子どもたちとを同時に見ていたら「あなたはこの場所が好きではないみたいですね」と言われてしまった。実際に子どもが大きな荷物を運んでいるところも目撃した。服も手も汚れていて、最後に握手すると自分よりずっと皮膚が固かった。出て行く時、壁には行方不明になった裕福な家庭の子どもの貼り紙があった。後ろを振り返ると、さっきの子どもたちが奥に見えた。それからピンクパレスまで車でむかう。正面の通りでは野菜やフルーツが並べて置いてあり、シュレグダーにかけ



た紙くずの上に広げられている。そのあとムガル帝国時代(1526 年～ 1858 年)の建築物がところどころに残っているオールドダッカを歩く。オレンジ色のレンガが特徴的な壁と、窓枠のデザインが印象的な建物があちこちにある。これらの通りは商店街のようで、表にはお店があり、建物と建物の間には長くて明かりのないスキマがある。その奥に、それぞれの家庭があるのだそう。10 時 30 分、南アジア最大の高級ショッピングモールへ行く。南アジアというと、インド、バングラデシュ、スリランカ、パキスタン、ネパール、ブータン、モルジブ、アフガニスタン、イランなどである。日本でも普段目にするような「洋服」が店内に並んでいる。街中で洋服を着ている女性は見たことがなかったので、どんな人がどこに着ていく服なんだろうと思った。それにモールのなかではジーンズ姿の女の子を発見し、もの珍しさに凝視してしまった。バングラデシュは皮製品も有名で世界シェアも高い。皮の加工技術が高いらしい。モール内で一人、胃を悪くする。12 時、アラムさんの家で昼食をいただく（サプライズ！）。一人寝ている間にアリフさんが「においをかぐとスッキリしますから」とオレンジを置いてくれた。床にたくさん料理がでてきて、みんなで最後のベンガル料理を食べた。ただの白いインディカ米ではなく味付けのされたご飯がとくにおいしかった。でも今日帰ると思うと悲しくなったので、逆にあんまり食



べられなかった。後悔している。最後に出てきた色も味も濃いヨーグルト風のデザートは衝撃的なおいしさだった。「ご飯と一緒に食べるとおいしい」というから食べてみたけど普通だった。ゆっくり過ごしてそれから 14 時 30 分、JABA tour の事務所へ向かう。アラムさんにフェリスからの感謝状をお渡しし、入国したときの服装に着替えると「日本人がいるー」と言われた。少し寂しかった。紅茶をいただいてクッキーとパウンドケーキとバナナを食して 17 時 30 分まで写真を撮ったりいろいろして過ごす。18 時には空港について車のなかで 2 週間のふりかえりをする。この 2 週間が挑戦だったこと、実際に豊かさにあふれて他の場所でもそれを自分で広めたいということ、さまざまな形の幸せと喜びと生き方を発見した事、みなさんのいろんな思いがきけて私も嬉しかった。「2 週間前と今じゃみなさん全然変わった」と言われたけど、みなさんどうでしょう（笑）。ハグと握手をしてからさようならをした。入国の時と同じで蚊がすごかった。19 時 30 分、出国審査をする。「こんにちは」には笑顔で「こんにちは」と言い、「さようなら」にも笑顔で「さようなら」が言えた。フィジカルチェックでキチュリをほめられた。20 時 55 分発の香港行きでバングラデシュを出た。（鈴木美咲）

3月2日（土） 14日目

香港から成田まで

翌日の朝、香港に付いた。飛行機のなかではほとんど寝ていたからあっという間だった。でもとなりの外国人に何度も起こされたから全然寝足りなかった。機内食も寝ながら食べたからほとんど記憶に残っていない。たしかフルーツが3種類でたような気がする。一つ食べたら、ダッカのホテルの朝ごはんのジュースと同じ味がして、悲しくなってきたから食べなかった。来る時と同じように、illyで少しゆっくりする。アラムさんと JABA tour へのお礼のお手紙を書いた。でも眠すぎて書けなかった。先生が近くの長椅子で横になって寝た。8時40分の少し前に移動して、成田行きの飛行機に乗る。ダッカの空港からずっといた大学生がすぐ近くにいたので、その存在だけで面白かった。彼はダッカの空港で「どうして日本語がそんなにうまいのか」というと「実際に話していればうまくなる」というようなことをサラッと話していて、それは当然だけどさすがだなと思った。成田行きの飛行機の中でもずっと寝ていた。機内食はお魚と丸いパンとおいしいクッキー。ここもインディカ米だった。成田に着くと、やっぱり今までいたところとは違うなと感じた。モシヤ（蚊）はいないし床も壁もきれいだったしとても静かだった。それぞれの荷物をもって、あらためて感想を短く話す。みんなダッカでは、帰りたくない帰りたくないと言っていた。日本に向かう飛行機のなかでは私も、「日本に着いちゃうよー」とか話していたけど、本当に日本に着いてしまった。（鈴木美咲）

「目に見えない豊かさ」を知って。

2013.2.17-3.2 アジアとの出会いと異文化体験——バングラデシュの生活文化とフィールドワークⅡ

発行——フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科

発行日——2013 年 3 月 21 日

編著者——東 宏乃（フェリス女学院大学 文学部コミュニケーション学科 非常勤講師）

連絡先——PC メール：azuma111@mrg.biglobe.ne.jp

編集——designFF+ 福澤郁文 + 高田真貴

印刷——フェリス女学院大学ドキュメントセンター

